# 「のと恋路号」殺意の旅



西村京太郎

C★NOVELS

不審な自殺をとげた恋人中原をしのんで、能登恋路海岸を訪れたあや子の前に、小山という刑事が出現。だがこの男は、とんだ偽物であった。十津川警部の部下である本物の小山は殺されていたのだ。警官殺害に端を発し、あや子の周囲に起こる連続殺人。M化学のエリート研究員だった中原が、恋路駅に遺した謎のイニシャル……。北陸路から東京、ハワイ、セブ島へと次々に捜査陣を翻弄する犯人に、十津川警部は初の敗北を喫するのか？

カバー・イラスト　村山潤一

# 「のと恋路号」殺意の旅

西村京太郎

C★NOVELS

中央公論社

目次


第一章　のと恋路号　7
第二章　刑事　25
第三章　失踪　43
第四章　捜査会議　63
第五章　K・T　81
第六章　雨の金沢　101
第七章　山中温泉　119

第八章　ハワイ　137
第九章　伝言　157
第十章　セブ島にて　175
第十一章　対決　193
第十二章　一つの解決　213

# 「のと恋路号」殺意の旅

# 第一章　のと恋路号

## 1

太宰治は、悲しいから旅に出るのですと、書いた。

井岡あや子の今度の旅も、また、悲しみからのものである。ただ、帰京する時は、その悲しみを忘れて、出来れば、新しい出発にしたかった。

六日前、中原が、突然、自殺した。

中原雅男。二十九歳。身長一七六センチ。M化学中野研究所勤務。

いや、そんなことは、どうでもよかった。あや子にとって、大事なのは、彼女が、中原を、愛していたことである。

中原もまた、自分のことを愛してくれていると、あや子は、信じていたのだ。

勝手な自惚れとは、思わない。自分に対する彼の態度や、言葉で、愛されているという実感を持っていたし、結婚の申込みも、されていたのである。

それが、突然、自殺してしまったのだ。

自殺自体にも、もちろん、ショックを受けたが、同時に、自分に何の相談もなく、彼が死んでしまったことも、ショックだった。

中原にとって、自分は、そんな存在だったのかという当惑であり、不満だった。

中原の葬儀には、M化学の上司や、同僚も来ていたが、金沢支社からも、管理課長が、来ていた。

十日前、中原は、金沢支社へ出張していた。その仕事から帰ってすぐの死だったから、金沢支社からも、管理課長が、参列したのだろう。

あや子は、その管理課長から、中原が、仕事を終えたあと、能登へひとりで、出かけたときいた。

「『のと恋路号』という新しい車両が、運転されているんですが、それに乗って行きたいというので、私の方で、予約しておきました」

と、管理課長は、あや子に、いった。

中原の能登行が、今度の自殺に結びついているのかどうかは、わからない。

ただ、あや子は、中原が、なぜ、自分に、何の相談もせず、七階のマンションから、身を投げたのか、その理由を知りたかった。

「のと恋路号」は、JR七尾線の七尾から、午前九時二四分に出発し、第三セクター「のと鉄道」の、珠洲まで走っている。

あや子は、五月十八日の午後、金沢へ向った。金沢で一泊し、「のと恋路号」の予約をした。

二両編成で、定員は七十六名。一番から四十番までは団体席で、四十一番から七十六番が個人席である。

十九日の朝は、旅館の人に頼んで、朝食を早く出して貰い、あや子は、金沢発午前八時〇一分の急行「能登路1号」に、乗った。

これに乗れば、七尾で、お目当ての「のと恋路号」に、乗れるからである。

連休が終ったのと、ウィークデイのせいで、「能登路1号」の車内は、すいていた。

あや子は、座席に腰を下すと、能登の観光地図を広げた。が、楽しむために、見るという気分には、なれなかった。

どうしても、中原が、なぜ、「のと恋路号」

に乗ったのかに、気持が、いってしまうのである。

（なぜ、その時、電話で、呼んでくれなかったの？）

という、口惜しい気にもなる。

もし、その時、一緒に行こうと、電話してくれていたら、あや子は、一も二もなく、休暇を取って、金沢に、飛んで行ったろう。

（ひょっとすると、その時、一緒に行く女性がいたのではないだろうか？）

とも、思ったりする。

中原は、もう死んでしまっている。それとわかっているのに、口惜しくなってくるのだ。

あや子は、七尾で、降りた。

3番線ホームで、待っていると、二両編成の「のと恋路号」が、入って来た。

最近流行の、大きな前面ガラスを持った洒落た車両である。

第三セクターの「のと鉄道」が、観光の切り札として、製造したというだけにホワイト、オレンジ、それに、イエローの三色のカラーが、斬新だった。

中に入ると、前部には、視界のいいパノラマ展望席があり、そのうしろには、リビングシートが、設けられている。

あや子は、乗り込むと、車内を、見て廻った。鉄道好きだった中原も、きっと、そうしたに違いないと、思ったからである。

二両連結の1号車の後部には、ジュースやウーロン茶の自動販売機が、置かれている。

2号車に入ると、車内販売のカウンターがあり、新聞も、置いてあった。

リビングシートのところには、カラオケセットが置かれてあるのも、いかにも、北陸の観光

列車の感じだった。

九時二四分。定刻に、「のと恋路号」は、七尾を発車した。

あや子は、リビングシートに腰を下し、窓の外の景色に眼をやっていたが、次の和倉温泉を出てすぐ、二十五、六の男が、

「ご一緒しても、構いませんか？」

と、声をかけてきた。

2

車内は、五〇パーセントほどの乗客だった。

二つあるリビングシートにも、あや子の他には、家族連れが一組、腰を下しているだけである。

それなのに、わざわざ断って、座った若い男に、あや子は、変な人だなという眼を向けた。

が、男の方は、変に、なれなれしく、

「おひとりですか？」

と、きき、あや子が、黙っていると、

「僕も、ひとり旅で、この列車が、面白そうだから乗ったんですが、なかなか、感じがいいですねえ」

と、車内を見廻している。

どこか、運動選手のような体格で、別に、嫌いなタイプではなかったが、今は、死んだ中原のことを、考えていたかったので、あや子は、返事をしなかった。

男は、煙草を取り出したが、吸っては、あや子に悪いと思ったのか、また、ポケットにしまい込んだ。

「僕は、目的なしの気ままなひとり旅ですが、あなたは、どこまで、行かれるんですか？」

と、きいた。

あや子も、どこまで行くという当てもなく、



乗ったのだが、それは、気ままなひとり旅だからではない。

中原が、どこまで行ったか、知りたかったからで、一応、終着の珠洲までの切符を買っていた。

窓の外には、田植えをすませた、青々とした水田が広がり、その向うに、海が見えている。波静かな七尾湾である。

男は、何か、話しかけていた。この列車に乗るには、乗車券の他に、パノラマ券を買わなければいけないのは、少し高すぎるとか、カラオケは好きですかとか、いっているのだが、あや子は、生返事しかしなかった。

（中原は、どこで、降りたのだろうか？）

と、それを、考えていた。

七尾から、珠洲まで、「のと恋路号」は、十の駅に停車する。

和倉温泉は、もう過ぎてしまった。

あとは、のと穴水、甲、鵜川、宇出津、九十九湾小木、松波、恋路、鵜飼、そして珠洲である。

どこで降りたかは、勘に頼るより仕方がない。

一〇時〇七分、のと穴水着。

（ここじゃないわ）

と、思った。そんな気がしたのだ。

ここまでは、ＪＲの七尾線で、これから先が、のと鉄道になる。

運転手も交代し、車内販売のコーナーには、のと鉄道の若い女性が、乗って来た。

三分停車で、発車した。

ひとりで勝手に喋っていた男は、いつの間にか、あや子の傍から、いなくなっている。

のと穴水で、いったん、山間に入った列車は、また、海沿いを走る。

二十分ほどで、甲に着いたが、ここで、小学生の団体が乗って来て、急に、車内が、賑やかになった。団体といっても、十五、六人である。それでも、子供たちは、元気で、うるさい。

鵜川、宇出津と、停車したが、あや子は、降りなかった。

九十九湾小木で、小学生たちが、降りて行った。ここから、九十九湾の遊覧船が出ていて、それに、乗るらしい。

相変らず、窓の外には、水田と、その向うに、海が、見えている。水田と海の間には、自動車道路が、伸びていて、時々、走っている車が、眼に入った。

一一時二〇分。松波。

次が、恋路である。

あや子は、急に、腰を上げた。

（中原は、恋路で、降りたに違いない）

と、直感したからだった。

理屈ではなかった。松波駅で、「次は恋路」の表示を見た瞬間、中原は、恋路でと、思ったのである。

## 3

恋路は、小さな駅だった。

単線の線路に沿って、片側に、幅の狭いホームがある。

無人駅だから、もちろん駅員もいない。

連休時は、多分、若者が、沢山降りたろうが、今日は、三人だけだった。

（あれ？）

と、あや子が、眼を大きくしたのは、あとの二人のうちの一人が、例の若い男だったからである。

もう一人も、男だったが、さっさと、ホーム

から姿を消してしまった。

あの男は、カメラを、肩に下げた恰好で、あや子に近づいてくると、

「同じ駅で降りるなんて、偶然ですね」

と、声をかけてきた。

「私は、急に、降りたくなっただけですわ」

と、あや子は、いった。

「僕もですよ。恋路という名前が、気に入ってね。そこの待合室には、大学ノートが、置いてあって、ここへ来た人たちが、思い出を書きつけているらしい。見てみませんか？」

と、男は、いう。

あや子は、少しばかり、相手が、うとましくなってきた。

「失礼します」

と、わざと、切口上でいっておいて、ホームから、降りた。

国道に出ると、道の両側に、民宿や、スナックが、十二、三軒並んでいた。

恋路のメインストリートといったところだった。

旅館民宿「恋路屋」、「ニュー恋路」、スナック「ラブ・ロード」と、恋という字の大安売りに見える。

あや子は、昼食をとるつもりで、スナックに入った。

他に客はいなくて、店の主人は、週刊誌を読んでいたが、眼をあげて、あや子を見た。

あや子は、まず、ビールを注文し、それから、エビピラフを頼んだ。

あや子は、ビールを、一口飲んでから、自分から、カウンターに行って、店の主人に、中原の写真を見せた。

「十日ほど前に、この人が、ここへ来なかった

かしら?」
と、きいた。
「連休の直後だね」
「ええ。多分、ひとりで来たと思うんですけど」
「覚えがないなあ」
と、店の主人は、いった。
「そう。ありがとう」
あや子が、いったとき、ドアが開いて、新しい客が入って来た。
「のと恋路号」から、降りた三人のうちの一人だった。
三十五、六歳の、背の高い男だった。
ちらりと、あや子を見てから、男は、ビールと、焼飯を、注文している。
食べ終ったあや子は、スナックを出た。
初夏の陽差しが、眩しかった。

今日は、ここに一泊することにして、まず、旅館を決め、ボストンバッグを、部屋においてから、散歩に出た。
すぐ、そこに、海岸が、広がっている。
夏になれば、海水浴客で賑うのだろうが、今日は、ひっそりと、静かである。反対側に眼をやると、さっき降りた恋路駅が、水田の向うに見えた。
改めて、小さな、可愛らしい駅だと、思った。恋路という名前でなければ、恐らく、観光客の眼に止らない、無人駅の一つでしかないだろう。
あや子は、海岸を歩いてみる気になった。
道路から、海岸におりてすぐ、木造の小さな小屋があった。
近づいてみると、「シャワー・更衣室」と書いてあった。夏には、海水浴客が、ここで着が

えたり、シャワーを浴びたりするのだろうが、今は、閉っていて、人の気配はない。

海辺に立つと、「国定公園能登半島　恋路海岸」と書かれた大きな看板があり、その横に、何のためか、ソテツの樹が一本、立っていた。

あや子は、砂浜を、歩いてみた。

前方に、小さな島と、赤い鳥居が、見えた。

立ち止って、眺めていると、ふいに、

「弁天島というそうですよ」

と、男の声がした。

びっくりして、振り向くと、あの若い男だった。

あや子が、黙っていると、相手は、

「例の恋路物語の像を見に行きませんか」

と、いう。

あや子が、根負けした感じで、

「ええ」

と、肯くと、男は、「じゃあ、行きましょう」と、さっさと、先に立って、歩き出した。

砂浜から、一段あがった防波堤の先に、その像が、あった。

「思ったより、小さなものだなあ」

と、男は、不満気に、いった。

男のいう通り、小さな男女の像である。「恋路物語」という文字はあるが、説明もなければ、囲いもない。

石を積みあげた上に、男と女の像があるだけだった。

「このストーリーを知ってますか？」

と、男が、きいた。

「ええ」

あや子が、観光案内で、読んだところでは、次のような物語である。

鎌倉時代、この辺りの漁師、助三郎と、近く

の多田の里の娘、鍋乃は、恋仲だった。二人は、夜になると、弁天島で、会っていた。

それに、横恋慕したのが、源次という男だった。源次は、鍋乃が、浅瀬に沿ってかがり火を焚き、それを頼りに、助三郎が、会いに来るのを知って、わざと、深瀬に、かがり火を焚いておく。そのため、助三郎は、溺れて死に、鍋乃も、その後を追って入水自殺した。

その助三郎と、鍋乃の像である。

「この鍋乃という名前が、いまいち、ロマンチックじゃないんだなあ」

と、男が、大きな声でいったので、あや子は、思わず、笑ってしまった。

確かに、今の感覚だと、鍋乃というのは、ロマンチックではない。恋路という駅名が、有名なのに、肝心の悲恋物語の方が、さほど知られないのは、ヒロインの名前のせいがあるかも知れなかった。

「アベックがいますよ」

と、男が、弁天島の方を、指さした。

浅瀬伝いに、島へ行って来たらしい。若い二人連れだった。

あや子は、ふと、そのカップルに、自分と、死んだ中原を重ね合せてみた。

## 4

翌朝、眼ざめると、あや子は、朝食の前に、旅館を出て、駅へ行ってみた。

あの男がいっていた、大学ノートのことを思い出したからである。

まだ、午前六時を過ぎたばかりで、国道にも、駅に着いた人の姿はなかった。

あや子は、駅のホームに、あがって待った。

待合室をのぞくと、あの男のいった通り、

「思い出日記」と書かれた大学ノートが、確かに、ずらりと、ぶら下がっている。

よく見ると、各県別に、一冊ずつ、置いてあるのだ。

あや子は、待合室の中のベンチに腰を下し、東京の分のノートを、手に取った。

〈世田谷から来ました。
たった一人で。
旅先のアバンチュールを楽しみにして来たのに、まだ、何もない。
彼と仲直りして、一緒に来れば、よかった。
あとで、必ず、彼に電話します。仲直り出来ますように。
19歳の女子大生〉

そんな文章もある。

あや子は、ひょっとして、中原が、ここへ来て、このノートに、何か書きつけているのではないかと思った。

一ページずつ、丁寧に、眼を通していった。

急に、あや子の眼が、大きく、見開かれた。

〈5月9日
私は、今日ほど、自分の弱さを痛感したことはない。
どうしたらいいのか、私には、わからない。
このままでは、自分の周囲の人間全てを不幸にしてしまいそうだ。決心しなければと思う。
でも、なぜ、今になって、私の前に、現われたのだ！　K・Tよ。
私に、何をさせたいのだ？　N〉

その文章は、まぎれもなく、中原の筆跡だった。

彼から、何通も、ラブレターを貰っているから、間違えはしない。日付も、合っている。

中原は、五月八日に、会社を出発しているから、その翌日、この文を書いたことになる。

抽象的な文章なので、中原が、何を悩んでいたのかは、よくわからない。が、このノートに、書きつけたくらいだから、よほど、参っていたに違いなかった。

（K・Tというのは、誰なのだろうか？）

と、あや子は、考え込んだ。

彼女の知っている範囲では、心当りはなかった。

それに、「なぜ、今になって、私の前に、現われたのだ！」と、書いてあるところをみると、ずっと、音沙汰のなかった人間かも知れない。

（これが、自殺の原因だったのだろうか？）

どうしても、あや子の思いは、そこへ、いってしまう。

わからない。改めて、なぜ、自分に、相談してくれなかったのかと、口惜しくなった。

あや子は、ノートを、元に戻し、ホームを、降りた。

海岸まで歩いて行き、砂浜に、腰を下して、考え込んだ。

あや子は、かつて、中原の口から、この恋路海岸のことを、きいたことはなかった。いや、能登という言葉もである。

その中原が、なぜ、金沢支社への出張の時、わざわざ、この恋路へ来たのだろうか？

K・Tという、男か女かわからない人物に、会うためだろうという想像はつく。

ただ、この人物が、何者かわからない限り、あや子の推理は、これ以上、進まないのだ。

あや子は、砂の上に、「K・T」と、書いて

みた。

男なら、田中健一郎とか、高橋邦夫といった名前が、想像される。

女なら、田中君枝か、高橋きよ子か。姓の方は、竹井でも、竹原でも、イニシアルは、Tになる。

（あのページを、東京に持ち帰って、調べてみよう）

と、思った。

短い文章だが、K・Tという名前以外にも、何か、中原の自殺の謎を解くものが、含まれているかも知れない。

あや子は、急いで立ち上ると、スカートについた砂を払い落しながら、恋路駅へ、向った。

上りの普通が、出て行くのが、見えた。が、ホームに、人がいないところをみると、誰も降りなかったのだろう。

あや子は、ホームに上ると、待合室に、急いだ。

中に入り、東京の大学ノートを外し、さっき見た中原の文章を探した。

「あれ？」

と、思ったのは、いくらページを繰っていっても、同じ文章が見つからなかったからである。

あわてて、もう一度、今度は、慎重に見ていった。

五月九日だから、最近のページである。そう思って逆から、見ていったが、見つからない。

他にも、東京のノートはあるのかも知れないと思って、探してみたが、それも、見当らなかった。

もう一度、同じノートを調べてみて、中原の文章があったと思われるページが、きれいに、破られているのに、気がついた。

## 5

あや子は、戸惑いと、狼狽を、同時に、感じた。

誰が、何のために、破って、持ち去ったのかという戸惑いと、なぜ、さっき見たとき、自分が、破っておかなかったのだろうかという後悔である。

もちろん、中原の文章の裏側には、他の人間が、何か書いていたから、破られたのは、そっちの文章のせいかも知れないのだが、あや子は、中原の文章が、破られたと、思った。

あや子が、まだ、破られたページを見ていると、急に、人の気配がした。

こんなときなので、あや子が、はっとして、振り向くと、また、あの男だった。

「そのノートが、どうかしたんですか？」

と、男が、きいた。

「何でもありませんわ」

あや子が、そういうと、男は、

「ちょっと、拝見」

と、無遠慮に、手を伸して、ひょいと、ノートを取りあげた。

あや子が、あっけに取られていると、男は、

「なるほど、一ページだけ、破られていますねえ」

「――」

「あの男かな？」

「え？」

「昨日、われわれと一緒に、『のと恋路号』から降りた男がいたでしょう。背の高い、三十代の男ですよ」

「ええ。覚えていますけど」

「あの男が、さっき、この待合室に入るのを見

たんですよ」
と、男は、いった。
「じゃあ、あなたも、ここにいたんですか？」
と、あや子は、きいた。
男は、手を振って、
「僕は、見ていただけですよ」
「でも、何処で？」
あや子は、不思議そうに、相手を見た。
この恋路の駅の周囲は、水田や、雑木林で、これといった建物は、見当らなかったからである。
それに、道路からは、一段高いところにある。
「あの旅館からですよ」
と、男は、遠く離れた旅館の一つを、指さした。
「あそこから、見えるんですか？」
「これで、見ましたからね」
と、男は、手に持っている双眼鏡を、あや子に見せた。
あや子は、びっくりした。昨日は、カメラを持っていたのに、今日は、双眼鏡である。
「いつも、そんなものを持って、旅行をするんですか？」
「これがあると、旅が、二倍楽しくなりますよ。今朝、起きて、あの旅館の窓から、この駅を双眼鏡で、見ていたんです。別に、目的があったわけじゃありませんよ。海が見えない部屋だったんで、仕方なしに、山のあるこっちを見ていたんです。そしたら、最初に、あなたが、ホームに上って、待合室に入るのが見えましたよ。あなたが、立ち去ったあと、あの男が、駅に上って行くのを見たんです」
「それ、本当なんですか？」
あや子は、半信半疑で、相手の顔を見た。

「本当ですよ。きっと、あの男は、あなたを、見張っていたんだと思うな。あなたが、待合室を出てすぐ、あの男が現われて、入って行きましたからね」

と、男は、いった。

「彼は、今、何処に？」

「さっき、上りの普通が、出て行ったでしょ。あれに、乗って行きましたよ」

「何でも、知っていらっしゃるのね」

と、あや子は、皮肉のつもりで、いった。

が、男は、ニコリともしないで、

「破られたページには、何が書いてあったんですか？」

と、きいた。

「なぜ、そんなことを、お聞きになるの？　プライベイトなことでしょう？」

あや子は、眉をひそめた。

「なるほど。プライベイトなね」

「そうですよ」

「ということは、つまり、あなたに、何か関係のあることが、書いてあったということですね」

と、男は、いう。

「いずれにしろ、あなたに、関係のないことですわ」

「まあ、そうかも知れませんがねえ。あの背の高い男は、本当に、知らないんですか？　前に、会ったことは、ないんですか？」

「ありませんわ」

「そうですかねえ。向うは、あなたに、興味を持っているみたいでしたがねえ」

「あなたは、やたらに、私の前に現われるけど、あの男の人は、この恋路では、スナックで、一度しか会っていませんわ」

と、あや子は、いった。

男は、なぜか、急に、ニヤッと笑って、

「僕は、正々堂々と、あなたに近づいていますよ。だが、あの男は、あなたに、わからないように、尾行していたんです」

「信じられませんわ」

「スナックというのは、『ラブ・ロード』という店でしょう?」

と、男は、きく。

「ええ」

「あの男はね、あなたが出て行ったあと、店の主人に、あなたが、どんなことを聞いたかを、質問しているんですよ」

と、男は、秘密を打ちあけるように、声を落して、いった。

「そんなこと、どうして、知っているんですか?」

「昨日の夕方、あのスナックに、入ったんですよ。そして、店の主人と、世間話をしていたら、今日、面白いことがあったといって、あなたと、あの男のことを、話してくれたんですよ」

と、男は、いった。

あや子は、改めて、相手の顔を、見直した。

(この男は、いったい、何者なのだろう?)

# 第二章　刑事

## 1

「あなたは、何者なの？」
と、あや子は、声に出して、男に、きいた。
男は、微笑した。
「何に見えます？」
「わからないわ。旅に出るのに、双眼鏡なんか持って来て、変な人だとは思いますけど」
あや子は、遠慮なくいった。
「変な人ですか。それじゃあ、名乗らないと、まずいかな」
と、男は、ひとり言みたいにいってから、内ポケットに手を入れ、黒っぽい手帳を取り出して、あや子に見せた。
「警察の人？」
あや子は、びっくりして、相手の顔を、見直した。
「そうです。東京警視庁捜査一課の小山刑事です」
男も、改まった口調になっている。
人間というのは妙なもので、どこの誰かわからなかった時は、うさん臭い男にしか見えなかったのだが、刑事とわかると、急に、精悍な、頼もしい男に見えてくる。
「その刑事さんが、何をしに、この恋路に、いらっしゃったんですか？」
「仕事じゃありません。非番で、独身なので、気ままにひとり旅に出たんです。昔から、能登へ行きたかったんで、あなたと同じ恋路号に、

乗ったというわけですよ」
「双眼鏡を持っていたのは、何のためなんですか？」
「これは、野鳥の会に入っているんで、旅に出る時は、いつも、持って行くんですよ。今朝も、鳥を見るために、双眼鏡を手に取ったら、あの男が見えたということでしてね」
「私に、声をかけて来たのは？」
と、あや子がきくと、相手は、頭をかいて、
「今もいったように、僕は、まだ、独りでしてね。だから、僕の楽しみの一つに、あなたのような美人と知り合いになれるということがあるんです。だから、ちょっと照れ臭かったが、声をかけたんですよ」
「あなたが、刑事さんだとすると、あの男は、何者なのかしら？」
と、あや子は、きいてみた。
「わかりませんね。しかし、あの男が、あなたの見ていた恋路駅のノートを、破いたのは間違いないんだ」
「なぜ、そんなことをしたのかしら？」
「ノートには、何が、書いてあったんですか？」
と、今度は、小山刑事が、きいた。
「なぜ、そんなことを、おききになるんですか？」
「それがわかれば、あの男の正体も、見当がつくかも知れないからですよ」
と、小山は、いった。
あや子が、迷っていると、小山は、
「海岸へ行ってみませんか」
と、誘った。
海辺は、相変らず、閑散としていた。強い春の陽光が、海面に照り映えて、眩しい。
二人は、しばらく、黙って歩いていたが、あ

や子は、誰かにきいて貰いたい思いが、つのってきて、
「きいてくれます？」
「いいですよ。何でも話して下さい」
「私には、フィアンセがいました」
「そうでしょうね。あなたみたいに美人なら、いて、当然ですよ」
「でも、自殺したんです」
「なぜ、自殺なんか？」
「私にもわかりません。フィアンセの私にも、黙って、自殺してしまったんですもの。腹が立ちましたわ」
「当然だな。僕だって、そんな立場に置かれれば、腹が立ちますよ。なぜ、相談してくれなかったんだろうってね」
と、小山刑事も、いった。
あや子は、肯いて、
「それに、自殺の理由も知らなかったんです。それで、『のと恋路号』に、乗ったんですわ」
「乗れば、フィアンセの自殺の理由が、わかると、思ったんですか？」
「彼が、死ぬ直前に、あの列車に乗ったと、わかったからですわ」
「それも、あなたに、黙ってですか？」
「ええ」
「そして、あなたは、恋路駅で降りた」
「ええ。彼が、ここで降りたと思ったからですわ」
と、あや子がいうと、小山は、ひとりで肯いて、
「すると、あのノートに、あなたのフィアンセが、何か、書き残していたんですね？」
「ええ」
「それを、あの男が、破って、持って行ってし

まったというわけか」
「そうなんです」
「あなたのフィアンセは、ノートに、何と書いたんですか？　覚えていますか？」
「確か、K・Tという人に会って困った、どうしたらいいかわからないと、書いてありましたわ」

## 2

「そのK・Tという人間に、心当りはあるんですか？」
と、小山が、きいた。
「いいえ。全くありませんわ。第一、男か女かもわかりませんし――」
あや子は、首を横に振って見せた。
小山刑事は、黙って、しばらく歩いていたが、
「いろいろと、想像は出来ますね」
と、いった。
「どんなことを？」
「一番、妥当だと思うのは、そのK・Tが女性で、失礼だが、あなたのフィアンセと、以前、関係があったという考え方ですね」
「女性？」
「あなただって、同じことを、考えたんじゃありませんか？」
と、小山は、いった。
あや子は、一瞬、どういっていいかわからなくて、眼をしばたたいたが、正直に、
「ええ」
と、肯いた。
「多分、切れたと思っていた昔の女が、突然現われて、あなたのフィアンセ、何という名前ですか？」
「中原さん」

「その中原さんに、連絡して来たんじゃないかな。この恋路へ呼び出した。恋路が、二人にとって、何か、記念の土地だからじゃありませんかね。問題は、二人の間に、何があったかということだろうが、男女の関係の他に、中原さんにとって、公けにされれば、困るようなことがあったんじゃないかと思いますね。例えば、何か犯罪に関係したようなです。女は、自分と、よりを戻さなければ、それを、公けにすると、中原さんを脅したんじゃないかな。中原さんは、悩み抜き、東京に戻ったものの、あなたに、打ち明けられずに、自殺したんじゃありませんか？　僕は、そんな風に、考えるんですがねえ」

小山刑事は、雄弁に喋った。

「じゃあ、ノートのページを破いて行ったあの中年男は、何者なのかしら？」

と、あや子は、きいた。

「そうですねえ」

と、小山は、ちょっと考えてから、

「その女の旦那さんじゃないですかね」

「旦那さん？」

「ええ。奥さんの浮気や、犯罪に悩みながらも、忘れられない、人のいい旦那さんですよ。奥さんが、また、中原さんと、よりを戻そうとしているのを知って、あなたが、ここへ来たのと同じように、やって来た。そして、あのノートを見つけたわけです。K・Tというのが、自分の奥さんのことだと、すぐわかった。それで、あわてて、ページを破って、持ち去ったというわけです。世間の眼にさらされたら、大変だと思ったんでしょうね」

「何か犯罪って、あなたはいったけど、どんなことを、考えているんですか？」

不安になって、あや子が、きいた。

小山刑事は、彼女の心配を、打ち消すように、

「殺人みたいなことじゃありませんよ。それなら、今まで、公けになっていないわけがありませんからね。多分、バクチをやっていたとか、麻薬に手を出していたといったことだと思いますよ」

「でも、彼がそんなことに、手を出していたなんて、信じられませんけど」

「僕は、刑事の経験でいうんですが、人間なんて、わかりませんよ。人格高潔といわれた学校の教師が、麻薬に、手を出していたり、賭博にのめり込んだりしていたなんてことが、よくあるんです」

「そうだとして、私は、これから、どうしたらいいのかしら？」

「中原さんは、自殺してしまったんでしょう？それで、K・Tという女との関係は、絶ち切れてしまった筈ですよ。あなたが、K・Tを追っかけない限り、全てが終ったとみていいと思いますね」

と、小山刑事はいった。

「私は、追いかける気なんかありませんわ」

と、あや子は、いった。

「それなら、問題はありませんよ。K・Tの旦那さんも、自分の奥さんが戻って来て、ほっとするんじゃありませんか？」

小山刑事は、そういって、笑った。

あや子は、刑事にいわれて、ほっとした。が、彼の推理を、そのまま、信じていいものかどうかについて、まだ迷いが残った。

K・Tが、女だろうと、あや子も思う。その女が、中原にとって、あまり愉快ではない過去を持って、現われたということも、納得がいく

のだが。
　そんなあや子の迷いを、見すかしたように、小山は、
「僕の推理は、あくまでも、僕の勝手な想像でしかありません」
「わかっていますわ」
「だから、あなたは、納得できなければ、更に調べればいいと思いますよ。ただ、一つだけ僕が、忠告したいのは、中原さんが自殺したのは、自分の過去を、絶ち切りたいと思ったからに違いない。その気持を、尊重してあげなさいということです。あなたが、中原さんのことを、思い出の中にだけとどめておけば、もう、全て終りです。あなたは、新しい人生に、出発すればいい。中原さんの過去を追っかければ、彼の過去が、あなたを、危険な場所に連れて行ってしまうかも知れませんよ」
と、小山は、いった。
「それは、わかる気がしますわ」
「ご自分を、大切になさい。僕は、今日中に、東京へ帰りますが、あなたは、どうします？」
と、小山が、きいた。
「私は、明日、帰りますわ」
と、あや子は、いった。

## 3

　恋路の旅館に、もう一泊したあや子は、その夜、嫌な夢を見た。
　美しい、黒い絹のドレスを着た女が、ゆっくり、自分を追いかけてくる。その貌が、はっきり見えないので、見つめていると、ふいに、恐ろしい悪魔に変る夢だった。
　眼を覚まして、あや子は、自分が、汗を一杯かいているのに、気付いた。なぜ、そんな夢を

見たのか、はっきりしている。K・Tを女と考え、彼女が、中原を、死の世界へ引きずり込んだと、思っているからに違いない。

もう一度、眠って、同じ夢を見るのが怖くて、あや子は、起き上って、暗い海岸まで、出た。

月明りの中で、砂の上に腰を下し、あや子は、海を見つめ、小山刑事の言葉を思い出してみた。

中原は、自殺した。だから、彼のことを忘れてしまえば、それで、彼に関することは、全て終りなのだという小山のいうことも、よくわかる。K・Tが、何者かは、わからないが、あや子が、中原と、完全に切れてしまえば、K・Tとも、切れてしまうだろう。K・Tの正体がわからないままにである。

小山は、その方がいいと、いった。確かに、その通りなのだ。何も、好きこのんで、面倒なことを、ほじくり返すこともない。あや子にだって、新しい人生が、待っているのだから。

夜が明けてきた。

(これで、中原を含めた過去と、訣別しよう)

と、あや子は、自分に、いいきかせた。

不満だが、中原の自殺の原因らしきものも見つけることが出来た。勝手に自殺してしまった中原なのだ。それで、十分かも知れない。

あや子は、帰りは、小松から、全日空機を利用して、東京に帰った。

自宅マンションに着くと、自分の決心を、自分で、確認するように、中原と二人で撮った写真を取り出し、灰皿の上で、一枚ずつ、燃やしていった。

中原との思い出は、甘く、楽しい。もし、彼がK・Tのことを話してくれていたら、彼が自殺したあと、ずっと、彼の写真を、大事にしていただろう。

だが、中原は、それを、秘密にし、秘密にしたまま、勝手に、自殺してしまった。あや子にしてみれば、裏切られた気持になる。

結局は、自分は、信頼されていなかったのだと思うからである。

最後の一枚が、燃えつきたとき、あや子は、「さようなら」と、呟いた。これで、中原との恋は、完全に、終ったのだと、改めて、自分に、いいきかせた。

（新しい恋をしよう）

と、あや子は、思った。

次の日、彼女は、元の通り、会社へ出た。中原の勤めていたM化学の取引銀行であるM銀行新宿支店が、あや子の職場である。

（また、平和で、退屈な日常が始まる）

と思った。

その通りの日常が、戻ったのだが、一つだけ、あや子の考えと違うことが、起きた。

自分が、尾行され、見張られているような気がしたのだ。

最初は、気のせいだと思った。恋路で、あんなことがあったので、やたらに、周囲の人間が、気になるのだと、考えてみた。

恋路では、刑事が近づいて来たし、怪しい中年の男が、恋路駅のノートのページを破って、持ち去った。

それが、頭にあって、自分に近づく人間が、全て、怪しく見えるのだと、思ったのである。

しかし、気のせいではないとわかったのは、二十六、七の若い男が、どこに行っても自分のうしろに、くっついているのを、知ったからだった。

支店を出て、自宅マンションのある中野へ帰るとき、電車の中でも一緒だったし、中野の駅

から、歩いて帰るときも、彼女のうしろにいた。

小山刑事でもないし、恋路で見た中年男でもなかった。

翌日、出勤のために、マンションを出て、地下鉄の中野駅へ行くとき、歩きながら、ふと、背後を見ると、同じ男が、眼に入った。

新宿へ行く電車の中でも、一緒だった。

誰が、何のために尾行しているのか、わからなかった。

警察の筈がないと思う。小山刑事が、彼女のことを、上司に報告しているだろうから、尾行の必要など、ないだろう。

怪しい中年男だって、ノートのページを手に入れたのだから、もう、あや子を尾行する必要はない筈なのだ。

あや子は、この日は、自宅には、まっすぐ帰らず、支店の近くの喫茶店に寄ってみた。

ひょっとすると、気のせいかも知れない。たまたま、中野に住み、彼女と同じように、新宿西口にある会社へ出勤しているサラリーマンだとも考えられたからである。

だが、あや子が、店に入ると、その男も続いて、入って来た。

視線を合せずに、離れたテーブルに腰を下して、コーヒーを、注文している。

あや子は、コーヒーと、ケーキを頼み、ゆっくり、口に運んでから、その若い男を観察した。

普通のサラリーマンに見える。そのうちに、相手は、立ち上って、店を出て行った。

(気のせいだったのか?)

と、あや子は、ほっとした。

自由な気分になって、しばらく、その店にいてから、外へ出て、地下鉄に乗った。

自然に、苦笑していた。監視され、尾行され

ていると思い込んでいたが、どうやら、気のせいだったと、わかったからである。

（恐路以来、少し、神経過敏になっているんだわ）

おかしくなった。

中野で降りて、自宅マンションに向って歩き出した。

あや子のマンションは、駅から歩いて、二十分ほどの所にある。駅から出たときは、ひとかたまりの通勤客だったが、少しずつ、減ってくる。

小さな公園があって、そこを通り抜けると近道なので、あや子は、公園の入口に入って行った。この近くでは、もう、他の通勤客は、いなくなっているのだが、今夜は、一人だけ、一緒の人間がいた。

若い女だった。二十五、六歳のＯＬ風の女だった。

あや子のうしろを歩いているのだが、奇妙なことに、あや子が、ゆっくり歩くと、向うも、スピードを、おそくするのである。

あや子は、また、疑心暗鬼に捕われた。

相手が、若い女なので、恐怖感はなかったが、気味は悪い。自宅マンションが見えて来たので、あや子は、思わず、駆け出して、飛び込むと、三階の自分の部屋に飛び込んだ。

わざと、電気をつけず、そっと、窓を開けて、道路を見下した。

（いるわ！）

と、思った。

街灯の近くに、さっきの女が、立っているのが見えた。

彼女は、五、六分、あや子の入ったマンションを眺めていたが、駅の方に向って、歩き去っ

た。

## 4

あや子は、部屋の明りをつけ、小さな溜息をついた。

尾行されていると思ったのは、気のせいではなかったのだ。銀行の近くの喫茶店で、若い男が、出て行ったのは、尾行の人間が、交代したに違いない。

あや子は、布団に入ってからも、考え続けた。誰が、何のために、自分を尾行しているのだろうかということを。

あや子自身は、自分を、平凡なOLだと思っている。銀行の金を使い込んだこともないし、警察の厄介になるような真似もしていない。

何かの組織に入っているわけでもなかった。他人の秘密を知っているということもない。

探られて困るような秘密も持っていないのだ。

少女の頃は、自分がどこかの国の王女か、大金持ちの娘だったらいいなと思ったことがあるが、それは、言葉通り、少女時代の夢でしかない。

(私なんか調べたって、仕方がないのに)

と、思う。

(それとも、K・Tが、私立探偵にでも頼んで、私のことを、調べさせているのだろうか?)

とも、考えられた。

あや子は、小山刑事の忠告通りに、もう、中原のことも、K・Tのことも、忘れることに、決めた。

だが、K・Tの方は、それがわからず、あや子が、自分のことを調べるだろうと、警戒しているのかも知れない。

(そうだとすると、困ったわ)

と、また、あや子は、溜息をついた。

まさか、新聞に〈K・Tへ。あなたのことを忘れるから安心しなさい〉と、広告を出すわけにもいかなかった。

第一、K・Tは、女だろうと思っているが、正体は、全く、わからないのである。

次の日も、出勤の時は、若い男、帰りは、若い女が、あや子の後についていた。相変らず、ただ、尾行して来るだけである。

あや子は、怖さよりも、次第に、腹立たしさを感じ始めた。

例の公園を抜けて、自宅マンションに近づいたところで、あや子は急に振り向き、尾行して来た若い女に向って、小走りに近寄って行った。

相手は、狼狽し、一瞬、横の小路に逃げ込もうという素振りを見せたが、諦めて、まっすぐ、あや子を見た。

「昨日から、私を、尾行しているでしょ？」

と、あや子は、決めつける語調でいった。

顔が、こわばっているのは、怒りと一緒に、恐怖もあったからである。

「いいえ」

と、相手は、短くいって、謝る気配もない。

「じゃあ、なぜ、ずっと、私の後をつけているの？」

「別に、あなたをつけてはいませんわ。こちらの方向に、帰るんです」

「この先のどこが、あなたの自宅なの？」

と、あや子は、問いつめていった。

「×丁目――番地のマンションです」

「そんなマンションがあったかしら？」

「ありますよ。お疑いなら、一緒に、いらっしゃったら？」

と、いって、その女は、笑った。

多分、同じ名前のマンションがあるだろう。

文句をいわれた時のために、ちゃんと、逃げ道を作っているのかも知れない。

「失礼ですけど、どこに、お勤めなの？」

と、あや子は、きいた。

「新宿のK工業ですわ」

と、女は、いう。恐らく、その名前の会社も、実在するのだろう。

「お名前も、聞かせて頂けないかしら？」

と、あや子は、続けて、いった。

相手は、眉をひそめて、

「なぜ、関係のないあなたに、こちらの名前をいわなければ、いけないのかしら？」

「私を、尾行したからだわ」

「尾行はしていませんわ。あなたの疑心暗鬼よ」

「それなら、警察へ行って、判断して貰いましょうか？」

あや子は、こうなると、引くにひけなくなって、そういって、女を、脅した。

「警察？」

「そうよ。私は、警察に知り合いの刑事さんがいるの。何かあったら、相談に来なさいって、いってくれてるわ。その人のところへ行って、シロクロを、つけて貰いましょうよ」

あや子は、小山刑事の顔を、思い浮べながら、いった。相談云々は嘘だが、相手に対しては、効果があると思ったのだ。

「何という刑事さんですか？」

と、相手がきく。

「そんなこと、どうでもいいじゃありませんか。いっておきますけど、明日も、私を尾行したら、その刑事さんに、いいつけるわ。尾行だって、罪になるんですからね」

と、あや子は、脅した。

## 5

翌日、あや子は、銀行の昼休みに、警視庁の捜査一課に、電話をかけてみた。
「小山刑事さんを、お願いします」
と、いうと、電話に出た女性が、
「今、ちょっと、席におりませんが」
「今日中に、お戻りになるんですか？」
「と、思います」
「どうしようかな」
と、あや子は、呟いた。尾行のことを話したら、あの若い刑事は、何というだろう？
すぐ、信じてくれるだろうか？
「お名前を伺っておいて、あとで連絡を入れましょうか？」
と、相手が、きいた。
「井岡あや子と、いっておいて下さい。明日にでも、もう一度、かけます」
と、あや子はいい、電話を切った。
その日は、あや子の脅しが利いたのか、尾行はいなかった。朝も、夕方もである。
（これなら、小山刑事に、別に相談しなくてもいいかも知れない）
と、あや子は思った。
夜の八時頃になって、部屋のインターホンが鳴った。
テレビを見ていたあや子は、受話器を取って、
「どなたですか？」
「警視庁捜査一課の者です」
と、相手が、いった。
あや子が、ドアを開けると、中年の男が二人で立っていて、その一人が、警察手帳を見せた。
「私は、捜査一課の十津川です。こちらは、亀井刑事。今日、電話をくれましたね？」

「ええ。小山さんに、お会いしたかったんです」

と、あや子は、いった。

「小山刑事と、どこで、知り合われたんですか？」

と、亀井と呼ばれた刑事がきいた。

「私は、小山さんに、お会いしたいんですけど」

「実は、小山刑事は、今、行方不明でしてね。われわれが、探しているんです」

と、十津川は、いった。

あや子は、びっくりして、

「あの若い刑事さんが、行方不明なんですか？」

「若い？」

「ええ。二十五、六なんでしょう？　小山さんて」

「ちょっと待って下さい」

と、十津川はいい、亀井刑事と、顔を見合せていたが、また、あや子に向き直ると、

「あなたが、能登の恋路へ行ったことは、わかっているんです。報告を受けていますからね」

「きっと、小山さんが、報告したんでしょう？　話をしましたから」

と、あや子がいうと、十津川は、また難しい顔になって、

「彼と、話をしたんですか？」

「ええ」

「どんな話をしたんですか？」

「どんなって――」

「ぜひ、教えて下さい」

と、十津川は、真剣な表情で、いった。

「私のフィアンセが、自殺したんですけど、そんな話とか、恋路駅の待合室に備えつけてある

ノートのこととかですけど」
「確かに、そういう話を小山刑事と、話したんですか？」
と、十津川は、念を押した。
「ええ。そのノートに、私の自殺したフィアンセが、書き残していた言葉のことも、話しましたわ。小山さんは、私に、忠告もしてくれたんです。自殺した人のことは、もう、忘れた方がいいって。私も、その通りにしようと、思っているんです」
「あなたの話した小山刑事というのは、どんな男でした？」
「どんなって、今いったように、年齢は、二十五、六歳で、身長は、一七三センチくらいかしら。がっちりした身体つきで、いかにも、刑事さんの感じでしたわ。中肉中背といった感じで」
と、あや子は思い出しながら、十津川に、いった。
十津川は、また、亀井刑事と、顔を見合せてから、
「それは、小山刑事じゃありませんね」
「でも、警察手帳を持っていたし――」
「これが、小山刑事ですがね」
亀井が、一枚の写真を取り出して、あや子に見せた。
今度は、あや子が、あっけにとられる番だった。
「これ、違いますわ」
「じゃあ、あなたと、恋路で話をした男は、ニセモノですよ」
と、十津川は、いった。

# 第三章　失　踪

## 1

「もう一度、その写真を見せて下さい」
と、あや子はいい、十津川の手から、引ったくるようにして、小山刑事の写真を、もう一度、眼に近づけた。
「あの男だわ」
と、あや子は、呟いた。
「恋路で見たんですね？　やはり」
十津川が、あや子の顔を、じっと見つめた。
「ええ。もう一人の男なんです。小山刑事、いえ小山刑事のニセモノが、怪しい奴だといっていた男ですわ。恋路駅のノートを破いて、持って逃げたと、教えてくれたんです」
あや子は、あの時のことを思い出しながら、いった。喋りながらも、彼女の頭は、まだ、混乱したままだった。すぐには、あの若い男が、ニセ刑事だったとは、信じられなかったからである。
「その刑事を、信じたんですね？」
と、十津川が、きいた。
「ええ。警察手帳だって、持っていましたから」
「恐らく、それも、偽造したものでしょう」
「よくわかりませんわ」
と、あや子は、いった。
「何がですか？　われわれは、嘘はついていません。小山刑事は、その写真の男です」
「そこまでは、納得しましたけど、なぜ、ニセ

の刑事が、恋路で、私に近づいて来たのかわかりません。それに、東京に戻ってから、私は、尾行されましたわ。本物の刑事さんだとしたら、ずいぶん上手な尾行でしたけど」

あや子は、軽い皮肉をこめて、いった。

十津川は、微笑して、

「あの二人は、私の部下です。ただ、彼等の名誉のためにいっておきますが、もっと上手に尾行できます。私が、わざと、あなたにわかるように、尾行させたんですよ」

「なぜ、そんなことを？」

と、あや子は、十津川を見た。

「最初から、説明しましょう」

「ええ。そうして頂きたいわ」

「五月十二日に、中原雅男さんが、自宅マンションから、転落して、死亡しました。七階のベランダからです」

「そんなこと、知っていますわ。私のフィアンセですもの。でも、もう終ったことですわ」

と、あや子は、いった。

彼女自身、これで、終りにしようと思って、中原と一緒に撮った写真を、焼いたのだ。

「実は、中原さんの死は、自殺でなく、他殺かも知れないと、思ったのですよ」

十津川が、いった。

あや子は、びっくりして、

「何をおっしゃるの？　警察が、自殺だと、断定したんじゃありませんか」

「その通りです。他殺であることを証明できなかったから、われわれは、自殺と、発表したんです。しかし、自殺だという証明も、できなかったんですよ。だから、他殺の疑いも、捨て切れず、極秘に、捜査することにしました」

「――」

「正直に話しますから、怒らずに聞いて下さい」
「怒りませんわ」
「われわれは、あなたが、中原さんを殺したかも知れないと考えたんです」
「そんな――」
「怒らないという約束ですよ」
と、十津川は、微笑した。
「でも、私が、疑われるなんて――」
「警察は、誰でも、一応は、疑うのです。それが、仕事ですからね。それで、あなたの動きを、監視していました」
「いつから？」
「中原さんが死んでから、ずっとですよ」
「ずっとですって？」
「そうです。あなたが、金沢に向ったので、ベテランの小山刑事が、尾行しました。どんな状況にも対応できる男ですから、私は、安心していました。彼からの連絡で、あなたが、『のと恋路号』に乗って、恋路で降りたことも、知っていました」
「それなら、変な男が、私に近づいたことも、小山刑事さんから、報告を受けていらっしゃったんでしょう？」
と、あや子がきくと、十津川は、急に、眉をひそめて、
「それが、全くありませんでした」
「なぜ？　小山刑事さんだって、私と、あの若い男のことは、ちゃんと、見ていた筈ですわ」
と、あや子は、いった。
十津川は、一層、苦しげな表情になって、
「小山刑事を、どんな状況にも対応できるベテラン刑事といいましたが、唯一の欠点は、自分の能力を過信して、一人で、事件を解決しよう

とすることでしてね。今回は、あなたを尾行して、あなたの行動を報告するだけにしておくように、念を押しておいたのです。下手に動いて、もし、他殺だった場合、犯人を警戒させてしまうと思ったからです」

## 2

十津川は、言葉を続けた。

「ところが、突然、小山刑事は、消息を絶ってしまったのです。東京にいたわれわれには、彼の身に、何が起きたのかわかりませんでした。恋路に降りたのは、あなただけだと、報告していましたから、ひょっとすると、あなたに殺されてしまったのではないかと考えました。女だと思って、油断してです」

「そんなことを、考えていらっしゃったんですか？」

あや子は、呆れてしまった。

十津川は、「申しわけありません」と、素直に、頭を下げた。

「今になれば、とんでもない見当違いをしていたと思いますが、あの時は、他に、考えようがなかったのです。今もいったように、小山刑事が、若い男のことは、連絡して来ませんでしたからね。そこで、東京に帰って来たあなたに、圧力をかけてみようと、考えたのです」

「それで、尾行を？」

「ええ。わざと、わかるような尾行をさせました。圧力をかけて、あなたが、どう出るか見たかったからです。もし、あなたが逃げ出せば、あなたが、小山刑事を殺したんだし、あなたに共犯者がいれば、連絡をするだろうと、考えたわけですよ。ところが、あなたは、警察に文句をいいに来た。小山刑事の名前をいってです」



「当然ですわ。私は、尾行されるようなことは、していませんもの」
「それで、私は、あなたに会う必要を感じたわけです」
と、十津川は、いった。
「それで、わかって頂けました？」
と、あや子は、きいた。
「事態が呑み込めました。恐らく、小山刑事は、あなたに近づく男を見て、自分で捕えて、何とかしようと思ったんでしょう。心配していた彼の病気が出たわけです」
「それで、逆に、殺されてしまった――」
「他に、考えようがありません」
「でも、あの若い男は、小山刑事さんが、上りの列車に乗るのを見たと、いっていましたけど」
と、あや子は、いってから、自分で、首を振って、
「あの男が、ニセの刑事なら、本当のことをいう筈がありませんわね」
「そうです。小山刑事は、殺されて、恋路の海に沈められたか、近くの山に埋められたと、思っています」
「じゃあ、ノートのページを破って、持って行ったのも、あのニセ刑事だったんだわ」
と、あや子は、呟いた。
「そうでしょう」
「これから、警察は、どうなさるんですか？」
と、あや子は、きいた。
「今、向うの警察に、恋路の周辺を、調べて貰っています」
「それで、小山刑事さんの死体が、見つかったら、どうなりますの？」
「もちろん、殺人事件ですから、捜査を始めま

すよ。そして、当然、中原さんの死も、自殺ではなく、他殺の可能性が、強くなって来ますね」

と、十津川は、きっぱりと、いった。

あや子は、青白い顔になって、

「じゃあ、あのK・Tが――」

「K・Tというのは、ノートにあった名前ですね？」

「ええ。きっと、K・Tが、彼を、突き落したに違いありませんわ。彼が、ノートに、あんなことを、書き残しているんですから」

と、あや子はいい、ノートにあった言葉を、十津川に、話した。

「なるほど。事件を予感させるような言葉ですね」

十津川は、自分の手帳に、書きつけてから、感想を、いった。

「でも、このK・Tという名前に、ぜんぜん、心当りがないんです。きっと、私の知らない女だと思いますわ」

「なぜ、女性だと思うんですか？」

と、十津川が、きく。

「何となく、そんな気がしたんです。女のことだから、私に、いえなかったんじゃないかと」

と、あや子は、いった。

「なるほど。あなたとつき合う前に、中原さんが親しくしていた女性ということですか？」

「ええ」

「この文章によると、K・Tに呼び出されたことは、中原さんにとって、大変なショックだったようですね」

「ええ。私は、だから、彼が、自殺したのかと思ったんですけど」

「だが、今は、殺されたと考えざるを得ません。

K・Tも、容疑者の一人ですし、あなたが、恋路で会った男も、同じです。私は、K・Tよりも、この若い男の方に、興味がありますね」

と、十津川は、いった。

あや子は、じっと、考えていたが、

「今、思い出したんですが、なぜ、あの男は、小山という実在の刑事の名前を、いったんでしょう？」

「それは、二つの場合が考えられますね。一つは、われわれ警視庁のことを、よく知っていて、捜査本部に、小山という刑事がいると、わかっていたのか、或いは、小山刑事を殺して、警察手帳を奪い、そこにあった名前を使ったのかのどちらかだと思いますね。とにかく、その男は、われわれと同じように、あなたの動きに関心を持っていたことだけは、間違いありません」

「でも、私には、何もしませんでしたわ」

「中原さんの死について、あなたが、疑問を持って、恋路へ来たと思い、心配していたと思いますね。ところが、あなたは、ノートの文章を見て、かえって、自殺を納得した形になった。それを知ったので、彼は、安心したんでしょう」

と、十津川は、いった。

「でも、私は、K・Tという名前を、知りましたわ」

と、あや子は、いった。

「それで、あなたは、K・Tという人間を、捜そうと思いましたか？」

「いいえ。中原さんのことは、もう終ったと思いましたわ、あの時で」

「だから、よかったんですよ。あなたが、あの男に、K・Tを捜すつもりだといっていたら、殺されていたかも知れませんよ」

「本当に？」

「あなたは、K・Tを、女性と思っているが、その男が、K・Tかも知れないからですよ」

と、十津川にいわれて、あや子は、改めて、背筋が、寒くなるのを覚えた。

「これから、私は、何をしたら、いいんでしょうか？」

と、あや子は、十津川に、きいた。

「その男のことや、中原さんのことで、何か思い出したことがあったら、すぐ、私か亀井刑事に連絡して下さい」

「ええ」

「その他には、何もしない方が、いいと思いますね」

「なぜですの？」

「例の男は、東京にいて、まだ、あなたの動きを、気にしているかも知れないからです。あなたが動き廻ると、あなたが危険だし、その男も、警戒してしまうからです」

「でも、小山刑事さんの死体が見つかれば、いやでも、警察は動くから、あの男は、警戒するんじゃありません？」

「そうですが、それまでは、油断させておきたいのですよ」

と、十津川は、いった。

## 3

十津川と亀井が、帰ってしまうと、あや子は、しばらくの間、じっと、考え込んでしまった。

恋路で会ったあの男が、ニセ刑事だったことは、ショックだったが、それ以上に、彼女を悔やませたのは、写真を焼いて、別れを告げた中原が、また、自分の気持の中に、舞い戻って来たという思いである。

勝手に自殺し、その上、恋路で、K・Tとい

う女と会っていたと思い、これで、中原のことを完全に忘れられると考えたのに、自殺でなく、殺されたのだとすると、話は、違ってくる。それが、自分にとって、幸福なことなのか、それとも、不幸なことなのか、今は、あや子自身にも、わからないのだ。

翌日、いつもの通り、銀行に出勤したが、一日中、ぼんやりしていた。仕事が、手につかなかった。

中原のことを、改めて、考えた。

自分の知らなかった中原のことをである。殺された理由は、そこにあると思ったからだった。

K・Tのことがわかれば、中原が殺された理由も、自然に、わかってくるだろう。

十津川は、K・Tが、あの若い男かも知れないと、いった。

その言葉を思い出した。あや子は、昼休みに、あの男の似顔絵を描いてみた。十津川にも、顔の特徴をきかれて、話したからである。

何とか、特徴をとらえた絵が出来た。それを、十津川に渡そうと思い、銀行が、終ってから、電話すると、亀井刑事が出て、

「警部は、能登へ行きました」

と、いった。

「じゃあ、小山刑事さんの死体が――」

と、あや子がいいかけると、亀井は、

「その件で、お会いしたいと思いますが」

「ええ」

と、あや子は肯き、会う場所を、決めた。

新宿ステーション・ビルの最上階にある喫茶店で、会った。

中原と、時々、デイトした店である。

亀井は、先に来て、待っていた。

あや子が、作りあげた似顔絵を見せると、亀

井は、ニッコリして、
「どうも、ありがとうございます。助かります」
「それで、小山刑事さんは――？」
と、あや子がきくと、亀井は、さっと厳しい表情になった。
「恋路の近くの海で、死体が見つかりました。どうも、小山刑事と思われます。あなたを信用して、これは、申しあげるんですが、実は、われわれとしては、このことを、当分の間、内密にしておきたいのです。小山刑事は、失踪したまま、行方不明で、手掛りはないということにしておきたいのです」
「犯人を、油断させるためですか？」
と、あや子は、きいた。
「そうです。それに、小山刑事を殺した犯人は、いつか、死体が見つかるとは思っている筈です。それが、なかなか見つかったというニュースがないと、不安になってくると思うのですよ。なぜ、見つからないのだろうかとね」
「でも、犯人は、見つからないように、海に、沈めたんじゃありませんの？」
と、あや子は、きいてみた。
亀井は、肯いた。
「その通りです。しかし、人間の心理というのは、おかしなものでしてね。見つからないように、海に沈めたり、山中に埋めたりするくせに、いつまでも見つからないと、不安になってくるものなんですよ。殺したと思ったのに、本当は、死んでいなかったんじゃないかと考えたりしてですよ」
「それを、期待していらっしゃるんですか？」
「もちろん、それだけで犯人を逮捕できるとは、思っていませんが、取りあえず、犯人に、圧力

をかけてやろうというのです。それで、あなたも、黙っていて欲しいのですよ」

と、亀井はいった。

「わかりましたわ」

「警視庁の刑事が一人、失踪したというニュースは、明日の新聞にのる筈です。これは、家族もいて、捜索班も出来ていますので、隠しようがありません」

「小山刑事さんには、ご家族がいらっしゃるんですか」

「ええ。子供も一人います」

と、亀井はいった。

三十代も半ばの刑事なのだから、妻子がいて、当然なのだが、改めてそれを知らされると、あや子は、ショックを受けた。自分が、中原というフィアンセを、殺されているからだろう。

亀井のいった通り、翌日の朝刊を広げてみると、

〈警視庁捜査一課の刑事が失踪・行方不明〉

の見出しが、大きく躍っていた。

あや子は、コーヒーで、トーストを食べながら、新聞の記事に、眼を通していった。

〈警視庁捜査一課の小山刑事（三七）が、五月十九日から、行方不明になっていることがわかった。警視庁の説明によると、小山刑事は、能登方面に出かけたが、今日になっても連絡もなく、帰宅していないという。家族から捜索願が出されているが、いまだに、手掛りがつかめていない。警察では、もし、小山刑事を見かけた方があれば、連絡して欲しいといっている〉

（亀井という刑事がいった通りだ）

と、あや子は、思った。

しかし、こんな嘘で、果して、犯人が、圧力を受け、尻尾を出すものだろうかと、不安にもなった。

（それにしても、中原は、誰に、なぜ、殺されてしまったのだろうか？）

4

あや子は、その日、中原のマンションに行ってみた。

中原が死んだあと、鹿児島から両親が上京してきた。彼の兄も一緒だった。

東京で、葬儀が行われたあと、彼の兄が、中原の部屋にあった調度品などのうち、二、三点を、持って帰っている。

あや子は、管理人に断って、七階の部屋にあがって行った。

今月分の部屋代が払ってあるので、それまでは、残った調度品などは置いたままでいいと、いわれていた。

あや子は、部屋に入って、電気をつけた。

2DKの部屋である。

中原が、生きていた頃は、少し狭いなと感じていたのだが、誰もいなくなってしまった部屋に立って見廻すと、いやに、だだっ広く見えた。

何回、この部屋に来ただろうか？

最初に、中原に抱かれたのは、この部屋のベッドでだった。

あのベッドは、まだ、部屋に置かれてある。

あや子は、奥の六畳に入り、そのベッドの上に、腰を下して、考え込んだ。

自分の知らなかった中原がいたことは間違いない。多分、中原が殺されたのは、その部分だ

と思う。

あや子の知っている中原に、殺される理由があったのなら、何かしら、思い当ることがある筈だからである。それに、K・Tという人物にも、心当りがないし、小山刑事と名乗って近づいて来た男も、初めて見る顔だった。

K・Tも、あの男も、あや子が知り合う前の中原と、何かの関係があったに違いない。

あや子は、自分が、どれだけ、中原のことを知っていたかを、考えてみた。

彼が、M化学の社員だということは、知っていた。

彼の両親にも、一度、会ったことがあった。

彼の兄には、今度初めて会ったのだが、平凡なサラリーマンタイプで、弟を殺すような人間には見えなかった。中原は、兄のことを、あまり喋らなかったが、男の兄弟というのは、そんなものだろう。

中原は、鹿児島市で生れ、地元の高校を卒業したあと、上京し、S大の物理に入った。

S大を卒業したあと、M化学に入社しているのだが、あや子は、その頃の中原は知らない。

S大卒というのも、中原が、いうのを信じているだけだが、まさか、そんなことで、嘘はつかないだろう。

M化学に勤めて、七年目に、あや子と知り合った。

そして、七ヵ月後に、彼は死んでしまった。

あや子が、中原とつき合っていた期間は、わずか七ヵ月である。

その間に、中原は、彼女にプロポーズし、あや子は、イエスと肯き、結婚が約束された。

知り合った翌日にプロポーズし、一週間で結婚したというカップルもいるから、七ヵ月が、

早いとはいえない。が、今になって、考えてみると、中原の性格からみて、すごく、性急だったような気がしてくる。

あや子は、そのことを、中原にいったことがある。その時の彼の返事は、「それだけ君に参っているんだな」だった。

あや子は、単純に、喜んでしまったが、あれは、本心だったのだろうか？

中原が、自分のことを愛してくれていたことは、本当だったと思う。

だが、性急なプロポーズには、他にも、理由があったのではないだろうか？

何かから逃れるために、いや、何かを忘れるために、しゃにむに、あや子との生活に賭けたのではないだろうか？

それらしいことを、中原が、いったことがあったのだ。

（あれは、何という言葉だったろうか？）

確かに、それらしいことをいったのだ。

あや子は、じっと考え込み、そして、思い出した。

結婚したら、どんな家庭を作るかという、他愛のない話をしている時だった。中原が、突然、

「君と二人で、どこか全く知らない土地へ行って、新しい仕事をしてみたいな」

と、いったのだ。

「折角、係長になったんだから、今の会社はやめない方がいいわ。M化学は、大企業だしね」

と、その時、あや子は、いった。

中原も、「そうかな」と、いって、転居と転職の話は、おしまいになってしまったのだ。

あれは、何だったのだろう？

男は、どんなに恵まれた境遇にいても、バカげた冒険をしたがるものだというから、中原の

あの言葉も、そんな他愛ない夢を口にしたのかも知れない。

その証拠に、あのあと、同じことを口にしてはいない。

中原が、生きていたら、他殺でなく自殺だったら、そう考えて、忘れてしまうだろう。

だが、中原は殺された。それも、あや子の知らない理由でである。とすれば、どんなことでも、疑問に思って、考え直してみる必要がある。

## 5

二十九歳でM化学の係長なら、一応、エリートコースだろう。

それに、中原は、自分の持っている専門技術を、生かせる職場にいる。ただの事務屋ではなく、技術者なのだ。

それが、なぜ、結婚を機会に、転職したいといったのだろうか？

M化学という会社に、不満があったのだろうか？

どんな大企業でも、面白くないことはあるに違いない。例えば、人間関係でである。

だが、だからといって、殺されはしないだろう。

それに、中原の葬儀は、M化学が、盛大にやってくれたし、上司も、参列してくれている。会社との関係が、よくなければ、もっと冷たく扱われただろう。社用で死んだわけではないし、あの時点では、自殺になっていたのだから。

そう考えてもやはり、中原のあの言葉は、引っ掛ってくる。

一度、不自然だと思うと、やたらに、気になってしまった。

おかしいと思えば、今まで、自殺に見えたこ

とまで、不自然に見えてくる。

中原の葬儀を会社が、盛大にやってくれたことも、おかしいと思えば、おかしく思える。

何といっても、自殺だからである。

新聞にも、〈M化学のエリート社員、自殺〉と、書かれた。会社にしてみれば、迷惑を受けた感じだろう。

それなのに、なぜ、会社が、盛大に、葬儀をやってくれたのだろうか？

翌々日、あや子は、銀行を午前中だけで早退し、M化学に足を運んだ。

中原が働いていたのは、中野にあるM化学研究所である。

葬儀の時には、大野という所長も、顔を見せていた。

あや子は、その所長に会った。

所長室に通されたあや子は、まず、葬儀の時の礼をいった。

五十六歳だという所長は、微笑んで、

「上司として、参列するのは、当然でしょう。とにかく、中原君は、優秀な人間でしたからね」

と、いった。

「なぜ、会社で、葬儀をして下さったんですか？」

あや子がきくと、大野は、おだやかな調子で、

「今もいったように、中原君は、M化学にとって、優秀な人材だったからですよ。わが社の誇りでしたからね。会社が、葬儀をするのは、当然じゃありませんか」

「でも、彼は、会社の仕事の上で亡くなったのではなく、個人的な理由で、自殺したんですが」

「確かに、その通りですが、うちの社の社長の

考えは、社員は全て、子供のようなものだということでしてね。子供が、どんな死に方をしようが、親が、葬儀をするのは、当然だということなんです。本来なら、社長も参列すべきところですが、所用で外国に行っていたので、失礼したと、詫びていたくらいですよ」

と、大野は、いった。

「彼は、そんないい会社にいながら、何が不満で、自殺したんでしょうか？」

「全く、見当がつきませんねえ。中原君は、会社にも、仕事にも、満足していたようですから、恐らく、個人的な悩みだったんじゃないかと思いますよ」

「でも、それなら、私に、なぜ、その悩みというのを、打ち明けてくれなかったんでしょうか？」

「あなたに、何も話さなかったんですか？」

と、大野が、きいた。

「ええ。だから、ただ、驚いてしまったんです」

「それは、当然ですね。実は、私も、彼の同僚も、思い当ることがなくて、みんな、びっくりしていますよ。中原君が自殺するなんて、考えてもみませんでしたからね」

「仕事の上で、何か、面白くないことが、あったんじゃないでしょうか？」

「どういうことですか？　それは」

大野は、眉をひそめて、あや子を見た。

「会社で、ケンカをしたとか、同僚の方と意見が合わなかったとかですけど」

「それは、ありませんね。人間関係の悩みといっても、彼は、小さな研究班のリーダーですから、一般の事務員のような悩みは、なかったと思いますよ」

と、大野は、いった。

やはり、自殺する理由も、殺される理由もないのだろうか？

# 第四章　捜査会議

## 1

小山刑事が殺されたことで、警視庁は、中原雅男の死を、他殺と断定し、捜査本部を設けた。

五月二十七日である。この日の午後二時に、第一回の捜査会議が、開かれた。

その前に、西本と日下の二人の刑事を、十津川は、恋路に、派遣していた。この二人には、向うの県警と協力し、ひそかに、恋路海岸周辺に、張り込むように、指示してあった。

小山刑事の死体が見つかったことはマスコミには、伏せてあるから、犯人が、不安にかられて、再び、殺人現場である恋路に現われるかも知れなかったからである。

こちらの計画が適中すれば、小山刑事のニセモノを、逮捕できるだろう。

「今度の事件ですが、二つの見方が、出来るような気がします」

と、十津川は、捜査本部長の三上刑事部長に、いった。

「二つというと、何だね？」

「中原雅男のフィアンセ、井岡あや子の証言によりますと、中原は、殺される直前、恋路に行き、K・Tという人間に、会っています。多分、中原は、その人物に恋路に呼び出されたんだと思います」

「井岡あや子は、そのK・Tを、女と、思っているんだね？」

「そうです。多分、自分より前に、中原がつき

合っていた彼女だろうと、考えているようです。もし、この考えが正しいとすると、K・Tは、女で、その女は、中原を恨んでいて、マンションに押しかけて来て、彼を突き落して殺したことになります」

「つまり、痴情のもつれが、殺しの動機というわけか？」

「そうです」

「君は、違うと思うのかね？」

と、三上部長が、きいた。

「いえ。そうは、いっていません。K・Tが、女だという線も、捨て切れません。ただ、小山刑事が、恋路で殺されたことで、別の線も、出て来たと、思っているのです」

「別の線というと？」

「はっきりとは、わかりませんが、犯人は、一つの組織ではないかと、考えることも、出来ると思うのです」

「組織？」

「何しろ、相手は、平気で、警視庁の刑事を、殺しているからです。それだけではありません。小山刑事になりすまして、井岡あや子に近づき、恋路へ来て、何を知ったかを、聞き出そうとしました。それを考えると、単なる痴情のもつれで、中原雅男が殺されたとは、思えなくなってくるのです」

と、十津川は、いった。

三上は、当惑した顔になって、

「しかし、痴情の線も、捨て切れないんじゃないのかね？」

「そうです。単に、女二人と男一人の三角関係だとすると、女の一人が、カッとして、男を、突き落すことは、あり得ますが、現職の刑事までは、殺さないと思います。ただ、その女が、

例えば、暴力団の組長の女だったりすれば、話は、違って来ます。女にとっては、恋の恨みですが、それに、組の面子が、絡んで来ますから」

と、十津川は、いった。

「なるほど。中原雅男が、昔、若気の至りで、暴力団の組長の女に手を出してしまった。何とか、手を切って、井岡あや子という素敵なフィアンセも、手に入れた。そんな時、忘れていた問題の女から、呼び出しを受けたということか？」

「悪女の深情けというやつです。中原は、今度こそきっぱりと、手を切ろうと思い、恋路へ出かけて行き、女に会いました」

「その女が、K・Tか」

「そうです」

「そのあとは？」

「中原は、きっぱりと、もう、二人の仲は、終ったと宣言したと思います。結婚を約束した女性もいると、いったかも知れません。だが、女は、笑って、取り合わない。いや、脅したかも知れません。私と、別れられると思うのかぐらいいってです」

「なるほどね」

「中原は、恋路駅のノートに、相手のことを、書きつけていますが、その文章に、当惑と、腹立たしさが、よく、出ていると思うのです」

「しかし、K・Tとは、恋路で、別れたんだろう？」

「そう思います。K・Tが女だとすると、彼女が、中原に会いに東京にやって来て、また、中原に絶交を宣言されて、カッとして、殺したのか、組の若い奴が、組長の恥になると思って、殺したのか、どちらかだと思います」

「小山刑事を、殺したのも、やはり、組の若い

連中ということかね？」
「そうです」
「K・Tが、女ではないとすると、相手は、どんな人間か、組織になるのかね？」

## 2

「それが、見当がつかないんです。中原雅男という人間を、くわしく調べていけば、何か出てくるかも知れないと、考えていますが」
と、十津川は、いった。
「中原は、M化学の技師ですが、そのことが、何か関係ありませんか？」
と、いったのは、亀井だった。
「まさか、君は、M化学が、中原を殺したというんじゃあるまいね？」
三上部長が、眉をひそめて、亀井を見た。
「M化学は、大会社です。私も、そんなことは、考えていません」
「では、どんな風に、関係してくると、思っているのかね？」
「M化学は、現在、ハイテク技術の最先端を行っている会社で、中原は、そこの研究員でした。そのことが、殺されたことと、何か関係があることも、考えられます」
と、十津川は、いった。
「つまり、技術の流出ということかね？」
「最新の技術を、買いたいという人間なり、グループがいるかも知れません。その人間か、グループが、中原に、狙いをつけたということも、考えられます」
「それを、中原が、断ったので、相手は、彼を殺したか？」
「そうです」
「恋路のノートにあったK・Tは？」

「グループの一員ということになります」
「しかし、中原は、なぜ、会社なり、警察へなり、連絡しなかったのかね？　彼が、君のいうような買収工作を、断ったのなら、当然、会社へ連絡した筈だよ。また、買収に応じたのなら、殺されたのは、おかしいんじゃないかね？」
と、三上がきく。
「確かに、本部長のいわれる通りですが、こんな風にも、考えられると思うのです。中原は、前に一度、買収に応じたことがあったんだと思います。M化学が開発した最新技術を、ライバル会社か、或いは、技術のブローカーが、買おうとして、中原に接触し、彼は、つい金欲しさに、応じてしまった。その相手が、K・Tというわけです」
「なるほどね。それですんだと思っていたら、また、K・Tが現われて、また、M化学の新しい技術を買いたいと、いったわけか？」
「そうです。中原は、今度は、拒絶しただけでなく、前の買収事件のことを、警察に喋るとでも、相手に、いったのかも知れません」
「それで、相手は、中原を、自殺と見せかけて、殺したということかね？」
三上は、興味を持った眼で、十津川を見た。
「可能性はあると思います。最新技術のブローカーのようなグループがあるとすると、かなりの組織だと思うのです。彼等が、自分たちの組織を守るために、小山刑事まで、殺したと、考えられます」
と、十津川は、いった。
「そんな組織が、実在するのかね？」
「今は、どんなものでも、金に出来る。また、しようとする時代です。ハイテク技術は、特に、金になると思うので、そうした組織があっても、

おかしくはありませんし、一つの企業がそんなことをすれば問題になり、社会の指弾を受けた筈ですが、関係のないブローカーから買えば、平気という感じがするじゃありませんか」

と、十津川は、いった。

「それでは、今度の事件は、二つの面から、捜査を進めていくことにする。三角関係のもつれと、組織犯罪の二つの線だ」

三上は、やや、甲高い声で、決めつけるようにいった。

正直にいって、十津川も、どちらの線が正しいか、わからない。

最初、中原雅男の自殺に、疑問を持ち、殺人ではないかと思ったときは、てっきり、愛情のもつれと、推理したのである。

だからこそ、ベテランの小山刑事に、容疑者の井岡あや子を、尾行させたのである。彼女に、中原以外の男がいれば、その男と共謀したということも、考えられた。

ところが、小山刑事が殺されたことで、十津川は、自分の推理に、疑いを持つようになった。

恋路海岸に現われた男は、明らかに、小山を刑事と知っていた筈なのだ。小山を殺したあと、自分が、小山刑事と名乗り、小山の警察手帳を見せて、井岡あや子に、近づいているからである。

愛情のもつれで、ライバルの男を殺した人間が、刑事まで殺すだろうか？

もちろん、絶対に、殺さないとは、断定できない。だからこそ、いぜんとして、三角関係のもつれの線も、捨て切れずにいるのである。

ただ、普通なら、刑事に出会えば、逃げ出すか、恐れ入って、罪を認めてしまう筈である。愛情のもつれからの犯罪も、その瞬間は、ただ

の小さな事件になってしまうだろうと、思うからである。

十津川は、清水と三田村の二人の刑事に、殺された中原雅男の女性関係を、調べさせ、自分は、亀井と、M化学に行き、会社での中原の様子を、聞くことにした。

JR中野駅から、バスで、十五、六分のところにあるM化学の研究所に行き、所長の大野に、会った。

十津川が、中原は、殺されたのだと告げると、大野は、当惑した表情になって、

「それは、本当なんですか？」

と、きいた。

「間違いありません。何者かに、自殺に見せかけて、殺されたんです」

「しかし、自殺と発表されたし、そのつもりで、会社として、葬儀もやりましたが」

「われわれも、最初は、自殺、他殺、どちらか、わからなかったのです」

「なぜ、他殺ということになったんですか？」

と、大野は、きいた。当然の質問だが、十津川は、今は、恋路で、小山刑事が殺されたからとは、いえなかった。

「実は、中原さんが亡くなった日ですが、彼の部屋から、あわてて逃げて行く人影を見たという目撃者が出たんです。それは、まだ、マスコミには、伏せてありますが」

と、十津川は、嘘をついた。

「それは、男だったんですか？　それとも、女ですか？」

「わかりません。暗かったので、男女の区別はつかなかったと、いっていましたね」

「驚きましたね。中原君が、殺されたというのは」

「この会社で、中原さんに、敵はいませんでしたか？」

と、亀井が、きいた。

「いや、敵なんかいませんでしたね。優秀な人間だったし、みんなから、好かれていました。私は、もし、彼が殺されたとすれば、愛情のもつれじゃないかと思いますがねえ」

と、大野は、いう。

「なぜ、そう思われるんですか？」

十津川が、きいた。

「中原君は、あの通り、ハンサムだし、女性に優しかったですからね。よくもてましたよ。バレンタインデイのとき、男の部員で、一番沢山、チョコレートを貰っていたんじゃなかったですかね」

「しかし、中原さんには、井岡あや子さんという恋人がいた筈ですが」

と、十津川がいうと、大野は、

「彼女は確かに、美人だし、中原君も、結婚するつもりだったようです。ただ、彼女の前に、彼には、何人か、関係のあった女性がいた筈ですよ。そんな女性が、中原君に未練があって、彼を殺すようなことになってしまったんじゃないか、私は、そんな風に、考えたんですがねえ」

と、いった。

「具体的に、そんな女性が、いるんですか？」

亀井が、きいた。

「井岡あや子さんには、いわなかったんですが、私も、一人知っています」

「どんな女性ですか？」

「前、この研究所にいた女性でしてね。名前は、小野寺ひろみといった筈です。彼女が、中原君に、熱をあげていたのを、知っていますよ」

「今、どこにいるか、ご存知ですか？」
「去年の十月に辞めましてね。ちょっと待って下さい」
と、大野はいい、キャビネットから、退職者の名簿を取り出した。
「小野寺ひろみ。自宅は、三鷹ですね。今、何をしているかわかりません。結婚したんじゃないかと、思っていますが」
「住所を、控えさせて下さい」
と、十津川はいい、自分の手帳に、書き写した。そのあと、
「ここでは、どんなことを、研究されているんですか？」
と、大野に、きいた。
「あらゆることを研究していますよ。今は、何が、次に必要になってくるかわかりませんからね。一時はやった超伝導の研究も、続けていますし、フロンガスに代る物質の研究もやっています。バイオの技術の研究も、進めていますしね」
「中原さんは、そのうちの、何の研究を担当していたんですか？」
「超伝導の研究をやって貰っていました。何度もいいますが、優秀な人間でしたよ」
「超伝導というと、確か、それが可能な物質の発見が、カギになっていましたね？」
「そうです。少しでも常温に近い温度で、超伝導が可能な物質を見つけることが、勝負になっています」
「もし、M化学が、それを発見したら、大変な力になりますね。この部門では、先鞭をつけることが、可能になる」
「そうでしょうが、残念ながら、まだ、発見されていません」

「これは、単なる推測ですが、もし、中原さんが、その物質を発見したとします。とすると、大変に、値打ちがあるわけでしょう？」

と、十津川は、きいた。

大野は、微笑して、

「常温でその働きをする物質が見つかればね。一種の革命が、起きるでしょうね。無限の可能性が、生れますからね。送電のロスがゼロになるから、電力の節約が可能になるし、リニアモーターカーも、もっと簡単に出来ます。スクリューを使わずに走る船も出来てくるでしょう」

「とすると、何億円もの値打ちがあるわけですね？」

「ええ。その物質が、見つかればですがね」

「中原さんが、見つけて、その成果を、誰かに、売ったということは、ありませんか？」

と、十津川が、きいた。

大野は、肩をすくめて、

「そんなことは、あり得ませんね」

「なぜですか？」

「彼は、M化学を、愛していましたよ」

「それだけですか？」

と、十津川がきくと、大野は、むっとした表情になって、

「それで、十分じゃありませんか」

と、いった。

## 3

二人は、研究所を出ると、JR中野駅に戻り、三鷹行の電車に乗った。

小野寺ひろみのマンションは、すぐわかった。

所長は、結婚したのではないかといったが、彼女は、まだ独身で、新宿の芸能プロダクションで、働いているということだった。

小柄で、気の強そうな女である。
十津川は、彼女を、近くの喫茶店に誘って、話を聞いた。
「中原さんと、親しかったのは、本当ですわ」
と、小野寺ひろみは、いった。
「それでは、彼が死んだときいて、びっくりしたでしょう？」
と、亀井が、きいた。
「ええ。自殺だと、新聞に出ていたので、余計、びっくりしましたわ」
「彼には、井岡あや子という恋人がいたんです。知っていましたか？」
「いいえ」
「しかし、中原さんに、あなた以外に、女が出来たというので、失望して、M化学を辞めたんじゃないんですか？」
と、亀井が、きいた。
ひろみは、肩をすくめるようにして、
「そんなことは、ありませんね。辞めるときは、もう、お互いに、熱がさめていたし、私は、もっと、自分を生かせる仕事をやりたくて、あの会社を、辞めたんですわ。私も、彼みたいな研究員だったら、仕事が面白かったでしょうけど、ただの事務でしたから」
「今の仕事の方が、面白い？」
「ええ。ずっと、面白いですわ」
「中原さんのことですが、あなたが、M化学にいるとき、何か、変な噂をききませんでしたか？」
と、十津川が、きいた。
「変なって、どんなことかしら？」
「そうですね。例えば、ライバル会社に、M化学の新しい技術を、流したとか――」
「中原さんは、そんなことを、していたんです

か？」

ひろみが、びっくりした顔で、十津川を見た。

「あくまで、例えばの話ですよ。何か、それに似たような噂を聞いたことはなかったですか？」

と、十津川は、いった。

「そうねえ」

と、ひろみは、コーヒーとケーキを前に置いて、考えていたが、

「私がいったなんて、いわないで下さいね」

「それは、大丈夫です」

「私が、あの会社を辞める頃だったと思うけど、中原さんが、車を買ったの」

「車？　亡くなったとき、車は持っていなかった筈ですがね」

「でも、新車を買ったのは、本当ですわ」

「しかし、今は、若いサラリーマンでも、車は買うから、別に、不思議はないんじゃないかな」

と、亀井が、いった。

「でも、ポルシェの新車なら、誰もが、簡単に、買えないんじゃないかしら？」

「ポルシェねえ」

「ポルシェの中では、安いんだということだったけど、それでも、七百万近くはするんじゃないかしら」

「あなたは、その車を見たんですか？」

「ええ。一度、乗せて貰いましたもの」

「ほう」

「研究所には、乗って来てなかったけど、休みの日に、一度、乗せて貰いましたわ。真っ赤なポルシェ。きっと、彼女も、あの車に乗せてたんじゃないかしら」

と、ひろみは、いった。

## 4

十津川と亀井は、小野寺ひろみと別れると、井岡あや子に、会いに行った。

十津川は、すぐ、赤いポルシェのことを、きいてみた。

あや子は、「ああ」と、肯き、

「覚えていますわ。二、三度、乗せて貰いましたけど、すぐ、彼が、お友だちに、返してしまいましたわ」

と、いう。

「友だちの車だったんですか？」

「ええ。お友だちに医者の息子がいて、その人から、借りたんだと、いっていましたわ」

「中原さんが、自分で買ったように、きいたんですがねえ」

と、十津川がいうと、あや子は、笑って、

「あんな高い車、彼に、買える筈がありませんわ。彼が、ポルシェを好きなのは、知っていましたけど」

「その友人の名前を、知っていますか？」

「いいえ。ただ、医者の息子で、車を、二台も持っているんだとは、いっていましたけど」

「そうですか」

十津川は、軽い失望を覚えながら、肯いてから、

「中原さんは、M化学が、好きでしたか？」

「どういう意味でしょう？」

あや子は、戸惑いの色を見せて、き返した。

「脱サラを希望しているようなことは、いっていませんでしたか？」

と、十津川は、き直した。

「それなら、一度、自分は、M化学を辞めるから、二人で、どこか、遠い所へ行かないかと、

いったことがありましたわ」
「M化学を辞めたい——と、いったんですね？」
「ええ」
「なぜ、そんなことを、いったんですかね？」
「わかりませんけど、誰でも、一度や、二度は、今の仕事が面白くなくて、辞めたいと思うんじゃないでしょうか？」
「そうかも知れませんが——」
「私だって、時々、銀行を辞めたいと、思いますわ」
「中原さんが、いつ、いったんですか？」
「はっきりとは覚えていませんけど、今年になってからでした。お正月の休みの時だったような気がします」
「M化学を辞めたいといったのは、その時だけですか？」
「ええ」
「あなたは、辞めるなと、いったんですか？」
「ええ。いったと思います。M化学は、いい会社ですから」
「中原さんが、M化学で、何を研究していたのか、知っていますか？」
「いいえ」
「彼は、仕事のことを、喋らなかったんですか？」
亀井が、きいた。
「一度、私がきいたら、彼は、仕事のことは、話したくないと、いったんです。それで、ききませんでしたし、彼も、話しませんでしたわ」
と、あや子は、いう。
「それは、どういうことなんだろう？　中原さんが、古いタイプの男で、男の仕事に、女が、口を出すなということだったんですかねえ」
と、十津川は、きいた。

「いいえ。彼は、そんなタイプじゃありませんわ」
「しかし、仕事のことは、話したくないと、いったんでしょう？」
「ええ。それは、多分、彼が、最先端の研究をしていて、会社から、外の人間に、洩らしてはいけないと、いわれていたからじゃないかと、思いますわ」
「なるほど」
「他には、考えられませんわ。彼は、古いタイプじゃありませんでしたもの」
と、あや子は、いった。

## 5

西本と日下の二人の刑事は、恋路にいた。
県警の刑事も、二人、張り込みに、加わっていた。
井岡あや子の証言で作られた、ニセ刑事の似顔絵を、持ってである。
西本と日下は、観光客という感じで、カメラを持ち、恋路駅近くの旅館に、泊った。
井岡あや子が泊った旅館である。窓を開けると、小さな恋路の駅が見えた。
県警の刑事たちは、別のペンションに、泊っている。
二十七日は、とうとう、相手は、姿を見せなかった。
二十八日の朝になった。
朝食のあと、西本は、東京の十津川に、連絡の電話を入れてから、日下と、朝の散歩に、出かけた。
恋路駅を、見てから、海岸に向って、歩いて行った。
降り注ぐ太陽は、すでに、初夏の眩しさだが、

海をわたってくる風は、まだ、冷たい。

二人は、時々、立ち止って、カメラのシャッターを切りながら、ゆっくり、海岸を、歩いた。

「痴情と、組織犯罪の両面から、調べるそうだ」

と、西本は、歩きながら、日下に、いった。

「組織犯罪ね」

「刑事を殺すくらいだから、もし、組織犯罪とすれば、手強い相手だろうと、警部は、いっていたよ」

「しかし、暴力団とは、思えないがね」

と、日下が、いった。

「なぜ？」

「連中は、利口だから、刑事は、よほどじゃなければ、殺さんだろう？」

「よほどのことがあったのかも知れないよ」

「そうは思えないな。井岡あや子は、ここへ来て、死んだ恋人が、恋路駅のノートに、K・Tという名前を、書いていたことを知った。彼女が知ったのは、それだけなんだ。小山刑事だって、それ以上のことが、わかったとは、思えない。それで、殺すかな？」

「ひょっとすると、小山さんは、相手の男を、知っていたのかも知れないよ。何々組の誰とね。相手は、だから、小山さんの口を封じたんじゃないかね？」

と、西本が、いった。

「そうかな」

「いずれにしろ、その男が、現われてくれれば、何もかも、わかるんだがね」

と、西本は、いった。

旅館に戻り、県警の刑事に、電話をかけてみた。が、向うも、まだ、問題の男を、見ていないという返事だった。

昼になっても、同じだった。
「本当に、現われるんだろうか？」
と、西本は、開けた窓から、恋路駅を見やった。
列車が着いても、ほとんど、降りて来る客はいない。
二人は、午後、外に出ず、旅館の窓から、双眼鏡で、恋路駅を、監視した。
相手は、車で来ることも考えられたが、それは、県警の刑事が、見つけてくれるだろう。
「静かだねえ」
と、日下は、双眼鏡から眼を外して、呟いた。
「こんなところで、殺人があったなんて、信じられないよ」
と、西本が、いった。
だが、小山刑事は、この恋路で殺されたのだ。
ぽつんと、上りの列車が、恋路駅に着いた。
男が、下りに乗って来るとは限らないので、日下は、また、双眼鏡で、見つめた。
降りたのは、地元の人間らしい中年の女性が、一人だけである。
列車は、あわただしく、発車して行った。
「現われないね」
と、日下はいい、眼をこすった。
西本は、煙草に、火をつけた。
夕食の時間になった。が、同じだった。相手は、姿を見せない。
夜になると、雨が降り出した。
男が現われる気配は、なかった。

# 第五章　K・T

## 1

十津川は、決断を迫られていた。

小山刑事の死を、いつまで、秘密にしておくべきなのかということだった。

秘密にしておけば、彼を殺した犯人が、不安になって、恋路海岸に、また現われるのではないかと考えたのだが、いっこうに、姿を見せないのである。

石川県警からも、これ以上、恋路周辺を監視するのは、無意味ではないのかという意見が出されていた。

小山刑事の遺族の心情も、考えなければならない。

十津川の上司の本多捜査一課長や、三上部長も、これ以上は、内密にできないということで、意見が、一致したようだった。

五月三十一日になって、小山刑事の死体が、恋路の海で、発見されたことが、発表された。

警察にとっては、一種の敗北だった。十津川刑事が考えたような、甘い犯人ではなかったことになるからである。

同じ日の夕刊に、小山刑事の死体が、〈失踪以来十二日ぶりに発見された〉と、のった。

同時に、殺人事件と見て、捜査が開始されたこともである。

十津川は、井岡あや子から、話をきき、M化学の社員からも、死んだ中原雅男について、いろいろときくのだが、いっこうに、犯人が、浮

んで来ない。

容疑者として、小山刑事の名をかたった男のモンタージュがあるのだが、この方も、空振りが、続いているのである。

「簡単な事件だと思ったんですがねえ」

と、亀井は、溜息をついた。

「男女の痴情関係からの殺人かね？」

と、十津川が、いう。

「そうです。それなら、死んだ中原雅男の周辺を調べて行けば、自然に、犯人の女が、浮んでくると思っていました。それが、どうも浮んで来なくて」

「K・Tが、その女だと思ったこともあるんだがねえ」

と、十津川は、いった。

もし、それなら、簡単な図式である。

中原は、井岡あや子と結婚を約束した。ところが、そこへ、突然、昔の女K・Tが現われた。K・Tは、今でも、中原のことを好きだといって迫り、とうとう、東京へ押しかけて来て、口論の末、中原を、マンションのベランダから、突き落した――。

こんな、ありふれたストーリイが、考えられる。

だが、そのK・Tが、いっこうに、浮んで来ないのである。

K・Tが、もし、男だとなると、ストーリイも、当然、変ってしまう。

念のために、中原に、ホモの傾向があったのではないかと考え、その線も調べてみたのだが、不発に終ってしまった。

壁にぶつかり、打つ手を失い始めていたとき、石川県警から、電話が入った。

「例のK・Tと思われる女が、見つかりまし

た」

と、県警の坂本という警部が、弾んだ声でいった。

「それで、中原雅男との関係を、認めましたか？」

と、十津川は、きいた。

「いや、彼女は、自殺していましてね。ただ、東京の中原雅男からの手紙は、見つかりました。相当、深い仲だったようですね」

「どんな女性ですか？」

「金沢市内のクラブのホステスです。なかなかの美人ですよ」

と、坂本は、いった。

「すぐ行きます」

と、十津川は、いった。

十津川は、その日のうちに、飛行機で、小松に飛び、空港からは、北陸本線で、金沢に向った。

同行した亀井は、「意外でしたね」を、繰り返していた。

十津川も、こんなに簡単に、K・Tが、見つかるとは思っていなかったのが、本音だった。

金沢駅には、車で、坂本警部が、迎えに来てくれていた。

三十代の若い警部である。

「やはり、ありふれた三角関係だったんですよ」

と、問題の女性のマンションに向う車の中で、坂本が、妙に明るい声で、いった。東京の警視庁が、手を焼いた事件を、あっさり解決したことが、嬉しいのかも知れない。

市内のはずれにある五階建てのマンションだった。

午後四時頃なのに、ひっそりと静かなのは、

住人に、家族連れが、少ないからしい。
「単身者が多いマンションのようです」
と、エレベーターで、五階に上りながら、坂本がいった。
最上階の角部屋の前に、制服警官が一人、見張に立っていた。
中に入ると、死体は、もう運び出されてしまっている。
「彼女の名前は、田代恭子、三十歳です」
と、坂本が、いった。

## 2

2LDKの広い部屋である。
寝室の枕元に、中原雅男の写真が、飾ってあった。
「井岡あや子にも、知らせましたか？」
と、亀井がきくと、坂本は、
「これから、連絡します。その前に、警視庁にと、思いましてね」
と、いった。
「自殺というのは、間違いないんですか？」
十津川が、中原の写真を見ながら、いった。
「遺書がありましたから、間違いありません」
坂本は、その遺書を、十津川に見せた。
白い封筒の裏に、「恭子」とだけ、書いてある。
中身は、便箋一枚に、次のように、書かれてあった。
〈私は悪い女です。自分でいけないことだと思いながら、あの人を、追いかけてしまいました。あの人を失った今、生きるだけの勇気も消えました。疲れました。死ぬことが、自分を解放することのような気がします。あの人との恋路の思い出を胸に抱いて、死にます。



お母さん、わがままばかりで、ごめんなさい。

恭子〉

「この、あの人というのが、中原雅男だというのは、どうしてわかったんですか？」

と、十津川は、坂本に、きいた。

「手紙が、大切に、しまってあったからですよ」

坂本は、相変らず弾んだ声でいい、三面鏡の引出しから、手紙の束を取り出し、十津川に見せた。

封書が、五通である。

いずれも、差出人の名前は、中原雅男である。

四通は、一年以上前のもので、最後の一通は、五月十一日の東京中央の消印になっていた。

中原が、死んだのが、十二日だから、その前日に、投函された手紙ということである。

十津川は、その手紙から、眼を通してみた。

〈なぜ、今頃になって、君は、私の前に、現われたのだ。

わざわざ、私を、恋路に呼び出して、またつき合ってくれというのは、どういう気なのか、私には、わからない。

確かに、一時は、君を愛したことは否定しない。君との結婚を考えたこともある。しかし、君の方から、二人の関係を止めたいと、いって来たんじゃないのか。

それなのに、突然、また、関係を復活したいという。私は、もう君を愛してないし、結婚を約束した女性もいるのだ。だから私が、拒否すると、君は、鬼のような眼になって、それなら、絶対に、私は、彼女との関係を、ぶちこわしてやる、彼女を殺してやると、いった。君ならそ

のくらいのことはやりかねないから、心配なのだ。

君は本当は、優しい女性なのだ。暖かい気持で、私とあや子のことを見守ってくれるか忘れてくれるかして欲しい。お願いする。

五月十一日　　中原〉

十津川は、読み終ると、それを亀井に廻してから、坂本に、

「二人の関係は、証明されたんですか？　中原は、東京で、この女性は、金沢の人間なんでしょう？」

と、きいた。

「それが、どうも、二年半ほど前に、中原雅男が、出張で、金沢へ来たとき、こちらの支社の人間が、彼を、夜、田代恭子の働くクラブに、連れて行ったらしいんです。そのとき、中原が、一目惚れしたんじゃないですかね」

と、坂本は、いった。

「そのことは、確認されたんですか？」

「ええ。支社の原田という社員ですが、電話で確認しました。間違いなく、二年半前頃、出張して来たとき、クラブへ連れて行ったと、いっていました」

「その社員に、会いたいですね」

と、十津川は、いった。

「わかりました。自宅の住所もきいていますので、あとで、ご案内しますよ」

と、坂本は、いってくれた。

十津川は、他の四通にも、眼を通してみることにした。

最初の手紙は、二年半前である。

三年前の十月二十八日の消印である。さすがに、白い封筒が、かすかに黄ばんでいる。

〈一緒に、恋路へ行ってくれてありがとう。原田君に連れられて、君の店へ行ったときから、君に参ってしまっている。断られるのを承知で、能登を案内してくれといったのだが、君が承知してくれたときは、文字通り、天にものぼる気持だった。

恋路の素敵な景色も、君のことも、一生忘れないだろうと思う。

君は、原田君が好きじゃないのか？　心配はそれだけだ。電話する。君もしてくれ。

中原〉

他の二通も、短期間に集中していた。

四通目は、一年前の三月十六日の消印だった。

〈今、恋路の写真を見ながら、これを書いている。男らしく、きっぱりと思いながら、自分でも情けないほど、君のことが忘れられないのだ。

しかし、いくら、未練がましいことをいっても、君の心は戻って来ないのだから、諦めるより仕方がないね。

何を書いたらいいのかわからないが、これから、君を忘れるように努めよう。君も、幸福になってくれなどと、きれいごとは書けない。

多分、もう、金沢や、能登に行くこともないと思う。君の手紙も、全部、焼き捨てるつもりだ。

サヨウナラ

中原〉

他の二通を、最後に読んだが、恋愛の真最中という感じで、甘い言葉が、書きつらねてあった。

恐らく他にも、何通もの手紙が、中原から、出されたに違いない。それは、田代恭子が、焼き捨ててしまったのだろうか？

3

十津川と亀井は、夕食のあと、中原に田代恭子を紹介したことになっている支社の原田という社員を訪ねた。

支社の近くのマンションに、坂本警部に案内されて、行った。

結婚したばかりだという原田は、話が話なのでと、三人の刑事をマンションから歩いて五、六分の喫茶店に連れて行った。

「別に、僕が、紹介したわけじゃないんですよ」

と、原田は、当惑した顔で、三人の刑事にいった。

「しかし、田代恭子のクラブに、中原雅男を連れて行ったことは、間違いないんでしょう？」

と、十津川が、きいた。

「ええ。あの頃、僕は、本社から来た人の接待係みたいなことを、していましたから。中原さんが来た時も、夕食のあと、クラブへ案内したんです。『あじさい』という、まあ、金沢では、高級クラブです。僕たちのテーブルへ、彼女が来ましてね。僕は、何回か行っていましたから、中原さんに紹介しました。M化学の優秀な研究者だといってね。でも、翌日、二人で、恋路へ行ったなんて、全く知りませんでしたよ」

「二人が、愛し合っていたことも、知らなかったんですか？」

と、亀井が、きいた。

「全く知りませんでしたね。彼女は、店では、ミドリと呼ばれていたんですが、ミドリちゃん

に、いい人が出来たみたいな噂はありましたが、それが、中原さんだなんて、知りませんでした。中原さんは、東京の人ですからね」

原田は、肩をすくめるようにしていった。

「あなたも、彼女を好きだったんじゃありませんか？」

と、十津川が、きくと、原田は、頭をかいて、

「そりゃあ、あれだけの美人ですからね。好きでしたよ。でも、それだけのことですよ。お店の客の中にも、彼女に参っていた人が、何人もいたんじゃありませんか」

と、いった。

「最近の彼女のことは、知りませんか？　どんな生活をしていたのかといったことですが」

「知りません。あの店も、去年の暮に、潰れてしまいましたからね」

と、原田は、いう。

「潰れたの？　あの店」

びっくりした顔で、県警の坂本警部がきいた。

「潰れました。今、中国料理の店になっています」

と、原田は、いった。

「なかなかいい店で、美人のホステスが、いるというので、有名だったんですよ」

と、坂本が、十津川に、説明してくれた。

「店が、潰れてから、彼女は、どうしていたんですかね？」

十津川が、きくと、坂本が、

「それは、調べてみましょう」

と、約束してくれた。

## 4

翌日、井岡あや子が、東京から、駆けつけた。

彼女は、金沢の警察署で、坂本から、五通の

手紙を見せられた。
　そのあと、十津川と亀井は、あや子に会った。
「どうでした？　中原さんの手紙に間違いありませんか？」
　と、十津川は、念のために、あや子にきいてみた。
　あや子は、少しばかり、青ざめた顔で、
「ええ。彼が書いたものだと、思いましたけど」
「あなたに会う前のことですね」
　と、十津川は、なぐさめるように、いった。
「ええ。ですから、彼に、他に女の人がいても、仕方がないんですけど、それでも、平静では読めませんでした」
「わかりますよ。中原さんが、あなたと知り合う前、好きな女が、金沢にいたということを、話したことは、ありませんでしたか？」
「いいえ」
「中原さんが、働いていたのは、中野のM化学の研究所でしたね？」
「はい」
「所長は大野さんでしたね」
「ええ。そうですけど」
　と、あや子が、いう。
　十津川は、その大野所長に、電話をかけてみた。
「三年前の十月に、中原さんは、金沢支社へ出張しているかどうか、調べて貰えませんか？」
　と、十津川は、いった。
「なぜ、そんなことを？」
　と、大野が、きいた。
「金沢で、中原さんと関係があったという女性が見つかったのですよ。それでです」
「ちょっと待って下さい」

と、大野はいい、二、三分、待たされたが、
「確かに、三年前の十月二十三日から二十五日まで、金沢支社に、出張しています」
「その三日間、全部が、仕事ですか？」
「そうです。ただ、二十六日は、日曜日ですから、適当に、金沢で遊んで来たかも知れません」
と、大野は、いった。
どうやら、中原雅男と、田代恭子の問題は、間違いなかったようである。
「やはり、ありきたりの三角関係ということになりましたか」
と、亀井が、小声でいった。
「しかしねえ。小山刑事が、殺されているんだ。ただの三角関係で、なぜ、現職の刑事が、殺されたりするんだ？」
十津川は、首をかしげた。
「そうですね。小山刑事を殺した男が、何者なのかわからないし、三角関係のもつれには、不似合いですね」
「田代恭子は、いったん、中原と別れている。そのあと、つき合っていた男が、小山刑事を殺したのかな？」
「しかし、殺す理由がありませんよ」
「いや、その男が、嫉妬から、東京で、中原を、殺したのかも知れない。それを知られるのを恐れて、井岡あや子を、尾行して、恋路までやって来た。そして、小山刑事に会い、怪しまれたので、殺してしまった。考えられないことじゃないよ」
と、十津川が、いったとき、坂本警部が近寄って来て、
「田代恭子の解剖の結果が、わかりました。死因は、睡眠薬です。これは、マンションの隣室

の女性の話なんですが、田代恭子は、眠れないといって、いつも、睡眠薬を持っていたというのです。それを、多量に飲んで、自殺したものと思われます」

と、教えてくれた。

「死んだのは、いつなんですか？」

「六月一日の午後十時から十二時の間ということです」

「見つかったのは、昨日、六月三日の朝でしたね？」

「そうです。丸一日以上、発見されなかったことになります。あのマンションは、独り者が多くて、他人のことに無関心ですから、ありがちのことです。今は、昔の金沢ではなくなりました」

坂本は、残念そうに、いった。

「それで、発見者は、誰だったんですか？」

と、十津川は、きいた。

「あのマンションの管理人です。男の声で、電話があって、五階の田代恭子の知り合いだが、いくら電話しても、返事がない。心配だから、見て来てくれないかといったそうです。それで、あの部屋を開けたら、彼女が、死んでいた。あわてて、一一〇番したということです」

と、坂本は、いう。

「電話の男の正体は、わかったんですか？」

「わかりません。仏さんは、男関係が派手だったようですから、その中の一人だと思いますが」

と、坂本は、いった。

## 5

ひょっとして、田代恭子も、殺されたのではないかと、十津川は、疑ったが、どうやら、自

殺は、事実のようだった。

田代恭子と同じクラブで働いていて、その後も、時々、彼女とつき合っていたという女性を、坂本警部が、見つけてくれたからである。

名前は、井上はる子。現在も、ホステスをしているという女に、十津川も、会った。

「確か、五月三十日だったと思うわ。久しぶりに、彼女に、電話してみたの。何をしてるかと思って。そしたら、すごく、沈んじゃってたわ。もう、何もかも終りだって」

と、はる子は、十津川の質問に、答えた。

「その理由を、いいましたか？」

と、十津川は、きいた。

「酔っ払ってるらしくて、はっきりしないんだけど、好きな男に、振られたとか、別れたとかいっていたわ。だから、男なんか、いくらでもいるじゃないのって、励ましておいたんだけど」

と、はる子は、いう。

「好きな男が、死んだとは、いいませんでしたか？」

「死んだ？　いったかも知れないけどね。とにかく、べろべろに、酔ってたわ。だから、ロレツが廻らなくて」

「自殺とすると、睡眠薬でということは、考えられますか？」

と、亀井が、きいた。

「ええ。よく、彼女いってたわ。死ぬのなら、睡眠薬にするって。気持よく眠ったまま、死ねるからですって」

と、はる子は、いった。

「クラブが、潰れてから、田代恭子さんが、何をしていたか、知りませんか？」

十津川が、きいた。

「あれから、二度ばかり会ったかしら。何やってるのって、きいたんだけど、笑ってたわ。だから、よく知らないのよ」
「二年半前に、彼女は、M化学の社員の一人と、愛し合っていたんだが、知っていましたか？　クラブで、働いていた頃です」
と、十津川がきくと、はる子は、ニッと笑って、
「知ってるわ」
「彼女が、話したんですか？」
「そう。何かのときに、きいたのよ。M化学とはいわなかったけど、大会社の平凡なサラリーマンだとは、いってたわ」
「それについて、あなたは、どういったんですか？」
と、亀井が、きくと、はる子は、また、笑って、
「もちろん、止しなさいって、いってやったわ」
「なぜですか？」
「第一、サラリーマンなんかと一緒になったら、ぜいたく出来ないもの。安月給でしょ。そのくせ、水商売出身の女を、本当は、バカにしてるのよ。特に、一流企業の社員ってね、自分は、部長か、重役の娘と結婚して、出世するのが一番と思ってるじゃないの。だから、一時的には、あたしたちを好きになっても、すぐ、後悔するものなのよ」
はる子は、こういうのは、よくあるケースだと、いった。
「しかし、彼女の場合は、彼女の方から、相手を捨てたようなんですがね」
と、亀井が、いった。
「そうなの？」

「その点は、どう思います?」
「きっと、安月給が、嫌になったんじゃないのかな。彼女に惚れてた金持ちの爺さん連中が、何人もいたから、そっちが、よくなったんじゃないかな。愛情より、お金っていうときもあるもの」
「それが、最近になって、また、サラリーマンの彼と、よりを戻そうとしていたんだが、その点は、どう思います?」
と、十津川は、きいた。
「そうねえ。いったん、金持ちの方に走ったけど、女って、気まぐれだから、また、若くて、ハンサムな男の方が、よくなったんじゃないかしら。彼女の相手って、美男子なんでしょう?」
と、はる子は、逆に、きいた。
「ああ、背の高い、美男子ですよ」
「それなら、ゆれ動いたって、仕方がないわ。金持ちのお爺さんもいいけど、金はなくても、若くて、ハンサムなのもいいからね。あたしなら、適当に、両方ともつき合うけど、彼女は、変にまじめだったから、それが、出来なかったのかも知れないわねえ。だから、きっと、自殺しちゃったのよ」
と、はる子は、いった。

## 6

更に、田代恭子の部屋から、中原雅男のライターや、パイプ、万年筆なども、見つかった。
それぞれに、中原の名前が入っていた。井岡あや子の話では、中原は、小さな物にも、自分の名前を入れていたというから、これらは中原のものといって、いいだろう。
あや子が、一番、辛そうになったのは、中原のネームの入った皮ジャンパーを見つけたとき

だった。

もちろん、あや子と知り合う前に、中原が買ったか、恭子が、買ったものだろう。

「どうも、わかりませんねえ」

と、亀井は、ぜいたくな調度品の置かれた部屋の中に立って、十津川に、いった。

「何がだい？」

と、十津川も、部屋の中を、見廻していた。

「自殺した田代恭子という女の心理ですよ。二年半前に、彼女は、中原と知り合って、愛し合ったわけでしょう。そして、突然、冷たくなった。中原は、いってみれば、振られたわけです」

「それが、なぜ突然また、中原との関係を、元に戻そうとしたかということかね？」

と、十津川は、きいた。

亀井は、小さく、首を横に振って、

「それは、いろいろと、理由が考えられるから、別に、不思議じゃありません。仲間のホステスが、いってたみたいに、金持ちの爺さんに走ったものの、また、金はないが、若い中原の方がよくなったのかも知れませんし、欲張りタイプということも考えられます」

「欲張りタイプ？」

「ええ。正確には、何というのか知りませんが、よくいるじゃありませんか。子供みたいに何でも欲しがるんです。オモチャが、二つあって、大きい方を取って遊んでいるのに、誰かが、小さい方を取ると、急に、その方も欲しくなってしまう。そんなタイプです。女にも、男にも、いますよ」

「なるほどね。いったん、中原を捨てたのに、中原を好きになった女がいると知ると、また、取り戻そうとするという、それかね？」

「そうです」

「じゃあ、カメさんのわからないというのは、どんなことなんだ？」

「田代恭子は、ともかく、いったん、中原を捨てたわけです。それなのに、なぜ、中原の手紙とか、ジャンパーとか、ライターなんかを、大切に、取っておいたんでしょう？　それが、わからんのですよ」

と、亀井は、いった。

「それは、多分、彼女の気まぐれじゃないかね」

と、十津川が、いう。

「まあ、それしか考えられませんが、どうも、私には、納得できなくて」

「しかし、現実に、中原雅男のラブレターが見つかり、彼のジャンパーや、ライターなんかも、この部屋にあったんだ。彼女が、気まぐれで、残しておいたと見るより仕方がないし、残しておいたからこそ、また、よりを戻す気になったんじゃないかな」

と、十津川は、いった。

だが、これで、解決したのでないことは、十津川も感じていた。

小山刑事を殺した男の問題が、残っていたからである。

その男は、まだ、見つかっていないし、どこの誰ということもわかっていないのである。

一番考えられるのは、自殺した田代恭子の男ということだった。

彼女が、また、中原雅男と、よりを戻そうとしていることを知り、カッとして、中原を殺したということである。

だが、それだけでは、小山刑事を殺した理由までは、説明できない。

「とにかく、田代恭子の線で、問題の男を、探

してみます」
と、県警の坂本警部は、いった。
十津川と亀井は、東京に帰ることにした。
だが、井岡あや子は、もう少し、金沢に残る、といった。
「何かあったら、すぐ、連絡して下さい」
十津川は、彼女に、そういっておいた。

# 第六章　雨の金沢

## 1

井岡あや子は、市内の旅館で、朝を迎えた。

昨夜は、ほとんど眠れなかった。十津川や、石川県警の刑事に頼んで、中原が、田代恭子に出した手紙のうちの二通を預かって、何回も、読み返していたのである。

窓のカーテンを開けると、雨だった。すでに、梅雨に入っているのだ。

あや子は、もう一度、二通の手紙に、眼をやった。

筆跡は、どう見ても、中原のものである。あや子も、彼から、同じようなラブレターを貰ったことがあるからわかるのだが、文章も、彼のものだと思う。

田代恭子という名前は、中原から、一度も聞いたことがなかった。

中原とつき合い始めた時も、彼が死ぬ間際にも、である。

中原とのつき合いが始まった時、二人の間では、隠し事はしないと約束した。この約束は、中原が、いい出したことである。特に、異性問題では、絶対に、嘘はつかないと、お互いに約束した筈だったのに、中原は、見事に、その約束を破ってしまった。

田代恭子が、突然、現われて、問題が起きていたのなら、なぜ、正直に、話してくれなかったのだろうか？　中原が、苦しかったとすれば、それは、あや子の問題でもあった筈である。

無性に、腹立たしい。

裏切られたと思いもする。そんな他の女との間のラブレターなど、徹夜で、読み返したりせずに、さっさと、破り捨てて、東京に帰り、新しい恋を探すべきなのだ。

あや子の胸の中で、そんな思いが、大きくなっていく。にも拘らず、踏み切れず、金沢に、ぐずぐずと、残ったりしているのは、まだ、心のどこかに、中原を信じたいという思いと、田代恭子という女と彼との間の愛は、まやかしではないのかという思いが、あるからなのだ。

それに、このまま、中原との思い出を捨て去れば、後悔するのではないかという気もしている。

更にいえば、田代恭子との愛よりも、自分との愛の方が、強かった筈だという自負もある。

それなのに、弱い筈の愛に、中原が負けて、死んでしまったことが、信じられないのだ。

(おかしいわ!)

と、降りしきる雨に向って、あや子は、大声で、叫びたかった。

自分が愛してきた中原が、こんなことで死んでしまうなんて、断じて、おかしいのだ。

朝食をすませると、あや子は、旅館で傘を借り、田代恭子のマンションへ行ってみることにした。

行って、どうするという考えがあったわけでもない。第一、当の田代恭子は、もう、死んで、この世にいないのだ。

金沢の地理は、よく知らなかったし、雨も振っているので、あや子は、タクシーを拾った。

市の郊外にある洒落たマンションに着き、タクシーを降りると、あや子は、傘をさして、しばらく、眼の前のマンションを見上げていた。

一階の入口のところを見ると、まだ、五〇二号室の郵便箱には、「田代」の札が、貼ってあった。

あや子は、エレベーターで、最上階の五階にあがった。

一つ、二つと数えて、五〇二号室の前まで行った。ドアは閉っていたが、耳をすますと、中で、人の気配がする。

突然、ドアが開いたので、あや子は、びくっとして、飛びのいた。

若い女が、顔を出した。

一瞬、田代恭子？　——と思ったのは、新聞にのっていた彼女の写真に、よく似ていたからである。

だが、田代恭子の筈がなかった。彼女は、自殺してしまったのだし、眼の前の女は、三十歳より、ずっと若かった。

「どなた？」

と、その女が、咎めるような調子で、きいた。

## 2

「東京から来たんです。井岡あや子といいます。田代恭子さんのことを、いろいろと、知りたくて」

と、あや子は、いった。

相手は、当惑した眼で、あや子を見ていたが、

「姉を、知っていらっしゃるんですか？」

と、きいた。

「じゃあ、妹さん？」

あや子は、何となく、ほっとして、笑顔になった。

「ええ。田代みどりですけど」

まだ、相手は、当惑の色を、隠さずにいる。

あや子は、正直に、自分の立場を話した。

田代恭子の恋人といわれている中原を、自分も愛していたこと、彼が亡くなったこと、そして、恋路のノートのことなどをである。

田代みどりは、黙って聞いていたが、

「私も、外に出ますわ」

と、いい、ハンドバッグを持って、マンションから出て来た。

二人は、雨の中を、並んで、傘をさして、歩いた。

「お茶でも飲みながら、お話したいんですけど、私は、金沢の町を、よく知らないんです」

と、みどりが、いう。

あや子は、微笑して、

「私も」

「それじゃあ、その辺で」

と、みどりがいい、近くにあった喫茶店に入った。

金沢らしい、和風の喫茶店だった。中庭があり、そこに植えられた樹が、雨にぬれている。

あや子は、しばらく迷ってから、ハンドバッグに入れて来た二通のラブレターを取り出して、みどりに見せた。

「これは、本来、田代恭子さんのものなんですけど、警察に、無理にお願いして、借りていたんです。お返ししますわ」

と、あや子は、いった。

みどりは、運ばれて来たコーヒーは、そのままにして、二通の手紙を読んでいた。

「この手紙の中原さんが、あなたとも、つき合っていたんですか？」

と、顔をあげて、みどりが、きいた。

若い、それだけに、きつい眼だった。

「恭子さんとは、中原が、私とつき合う前の関係だったみたいなんです。ただ、恭子さんは、

また、中原のところへ戻ろうとして、おかしくなってしまったんですわ」

あや子は、うまく説明できなくて、口ごもった。

みどりは、あっさりと、

「姉と、あなたと、中原さんの三角関係ということだったんですか？」

と、きいた。

あや子は、そんなに簡単に図式化されてしまうと、今までの心の苦しさが、馬鹿みたいに思えてくる、と思いながら、

「そのために、中原が死に、恭子さんも、自殺してしまったんです。それが、どうしても、納得がいかなくて」

と、あや子は、いった。

名古屋の大学に行っているというみどりは、

「中原という人も、自殺したんですか？」

と、大きな眼で、あや子に、きいた。

「最初は、自殺と思われていたんですけど、今は、殺されたんじゃないか、という疑いが、持たれています」

「じゃあ、姉が、無理心中みたいにして、中原さんを殺し、自分も、自殺してしまったんでしょうか？」

「そんな風に考えたこともありますわ」

と、あや子は、正直に、いった。

「じゃあ、あなたは、姉を恨んでいるんですか？」

みどりは、若さからくる直截さで、きく。

「恨んでいないといえば、嘘になりますけど、今もいいましたけど、何かおかしいような気もしてきているんです」

と、あや子は、いった。

「どこが、おかしいんですか？」

「恭子さんという人のことを、何も知らないので、妹さんに、おききしたいんです。いいですか？」

と、あや子は、遠慮がちに、いった。

みどりは、相変らず、強い眼で、あや子を見て、

「私も、中原という人のことを、教えて頂きたいと、思います」

「お姉さんから、何も聞いていませんの？　中原について」

と、あや子は、きいた。

「姉とは、あまり連絡がありませんでしたから」

と、みどりは、いう。

「でも、お姉さんに、好きな人がいることは、知っていたんじゃありません？」

「ええ。ただ、中原という名前を聞いたことは、ありませんでしたわ」

「お姉さんは、好きな人のことを、何といっていました？」

「大きな会社のエリートサラリーマンだといっていましたわ。だから、心配だったんです」

と、みどりは、いう。

「なぜ？　お姉さんが、クラブで働いていたから？」

「ええ。日本の男って、口では、進歩的なことをいっても、本質は、封建的だから」

と、みどりは、いう。

「それは、彼の方が、本気ではないからということ？」

「ええ。姉も、うすうすは、感じていたと思うんです。電話したら、とても、沈んでいることがありましたわ。彼が、上司のすすめで、見合いをしたとかいって」

「お見合い？」
「ええ。だから、私、姉にいったんです。そんな男の人は、信頼できないから、早く、諦めなさいって、一見すると、姉は、男を手玉に取るような感じなんですけど、意外に、男に甘いんです」
「本当に、相手の人が、お見合いをしたって、いったんですか？」
「ええ。一週間ぐらいは、ずっと、落ち込んでいたみたいですけど」
（中原は、上司のすすめで、お見合いをしたのだろうか？）
「それ、いつ頃のことですか？」
と、あや子は、きいてみた。
「確か、半年ぐらい前でしたわ」
と、みどりは、いう。
それなら、あや子は、もう、中原と、知り合っていた。中原さんは、田代恭子には、見合いをしたと、いっていたのだろうか？
「でも、恭子さんにも、お金持ちのパトロンがいらっしゃったわ」
と、あや子は、いった。みどりが、しきりに、中原のことを、冷たいエリートサラリーマンのようにいうことへの、反撥だった。

## 3

怒るかな、と思ったが、みどりは、冷静な口調で、
「ええ。うすうす、知っていましたわ。だから、姉は、迷っていたんだと思います」
「そんな迷いが、中原を苦しめたんじゃないかしら？　それと、東京と、金沢では、離れていて、自然に、気持も、離れていくでしょうし――」

「中原さんって、東京の人なんですか？」
みどりは、びっくりしたように、あや子を見た。
今度は、あや子の方が、驚いて、
「お姉さんは、恋人は、東京の人だといわなかったんですか？」
「ぜんぜん。なぜ、いわなかったのかしら？」
「それに、お姉さんの方が、お金持ちのパトロンに心変りして、中原を、捨てたんですよ。それなのに、また、中原の方へ戻って来たので、こんなことになってしまったんです。中原は、死んでしまうし、恭子さんも、自殺しなければならなくなってしまったんです」
あや子の説明には、自然に、非道なひびきが、入ってしまった。
中原の死が、自殺にしろ、他殺にしろ、恭子の気まぐれが、引き起こしたのだという気持が、あや子には、ある。
「そこが、よくわからないんです」
と、みどりが、いう。
あや子は、いささか、むっとしながら、
「あなたが、お姉さんのことを、よく思いたい気持は、わかりますけど」
「私は、姉の好きな人が、結婚してしまって、それで、絶望して、自殺したと、思っていたんです。確かに、姉には、お金持ちのパトロンがいたみたいですけど、中原さんに、夢中だったと思いますわ。だから、絶望したんだと。東京の人だということや、もう死んでいると聞いて、わけがわからないんです」
と、みどりは、いう。
確かに、みどりのいうことにも、一理あると、あや子は感じた。
恭子という女が、金持ちのパトロンと、中原

との間を、行ったり、来たりしているいい加減な女だったら、なぜ、あんな遺書を残して、自殺したのか、わからなくなってくるのだ。

中原が死んだら、さっさと、パトロンのところへ、戻ればいいのだから。

それとも、パトロンにも、捨てられたのだろうか？

しかし、あれだけ美しければ、いくらでも、パトロンは、見つかるのではないか。

「中原さんは、よく、金沢に、来ていたんですか？」

と、みどりが、きいた。

あや子は、一瞬、「え？」と、きき返してから、

「彼も、サラリーマンだから、そんなに、金沢へは、行けなかったと思いますわ」

「そうね。東京からだと、飛行機を使っても、時間が、かかりますものね」

「ええ。だから、手紙のやりとりを、していたんだと思います」

「姉も、よく手紙を、出したんでしょうか？」

と、みどりが、きく。

もちろん、一方的に、中原が書いていたとは思えないから、恭子の方も、出していたろうが、彼の部屋からは、一通も、見つかっていない。

「出したんだと思いますわ」

と、あや子は、いった。

「それも、よくわからないんです」

と、みどりが、いう。

「何が？」

「一度、姉は、こんなことをいってたんです。相手は、エリートサラリーマンだから、ちょっとした噂が、出世にひびく。だから、なるべく、手紙のやりとりは、しないようにしていると、

いっていたんです」
と、みどりは、いうのである。
あや子の疑惑は、更に、大きくなっていった。
みどりと話をしていると、田代恭子がつき合っていた男が、どうも、中原と違う人間のように、思えてくるのである。
だが、田代恭子宛の中原の手紙がある。
それに、恭子が持っていた中原の身廻品だ。
「あなたは、お姉さんの恋人に、会ったことが、ないんですか？」
と、あや子は、みどりに、きいた。
「ええ。一度も、会ってないんです。中原さんという名前も、姉が亡くなって、初めて知ったくらいなんです」
「でも、大きな会社のエリートサラリーマンとは、きいていたんでしょう？」
あや子は、確認するように、きいた。
「ええ。姉は、嬉しそうに、いっていましたから」
「会社の名前も、ききました？」
「いいえ。でも、姉の働いていたお店に、よく来る人といいましたから、M化学の人だというのは、確かですわ」
「年齢も、わかります？」
「同じ年ぐらいみたいに、いってましたけど」
と、みどりは、いう。
それなら、二十九歳の中原は、該当するが、考えてみれば、三十歳前後で、エリートサラーマンで、独身というのは、意外に多いだろうとも、思った。
「他に、何か、男の人の癖といったものは、わかりませんか？」
と、あや子は、きいた。
みどりは、変な顔をして、

「姉の恋人は、中原という人じゃなかったんですか？」
「彼だと思うんだけど、あなたの話をきいていると、ひょっとすると別人なんじゃないかという気もしてくるんです。だから、それを、はっきりさせたくて」
と、あや子は、いった。

4

「姉が、一番楽しそうにしていたのが、去年の冬でした。二月の末でしたわ。ところが、半年前、彼が、見合いをして、姉が、がっかりするんですけど」
と、みどりは、いった。
「なぜ、その頃、一番、楽しそうだったんですか？」
と、あや子は、きいた。
「あの時、久しぶりに姉に電話をかけて、遊びに行きたいって、いったんです。そしたら、悪いけど、三日間、彼と、旅行に行ってくるといったんです。嬉しそうに」
「三日間？」
「ええ。あとで、お土産を貰ったんですけど、山中温泉のものでしたわ」
「正確な日は、わかりませんか？」
と、あや子は、きいた。
「確か、二月二十五日から、三日間、ウィークデイだったと思うんです。彼が、休暇をとってくれたって、いっていましたから」
と、みどりが、いった。
「それを、調べてみますわ」
と、あや子は、いった。M化学へ行って、去年の二月二十五日から三日間、中原が、休暇をとって、金沢へ行っているかどうか、調べれば、

はっきりするだろう。
思い立って、あや子は、すぐ、東京に戻ることに、決めた。
「何かわかったら、教えて下さい」
と、みどりはいい、名古屋の住所を、教えてくれた。
あや子は、金沢から列車で、小松に出ると、小松空港から、羽田行の飛行機に乗った。
東京も、雨だった。
あや子は、まっすぐ、中野のM化学の研究所に向った。
どうにか、退社前に着き、所長の大野に会った。
「去年の二月二十五日から三日間、中原が、休暇届を出しているかどうか、調べて欲しいんです」
と、あや子がいうと、大野は、眉をひそめて、
「そんなことを調べて、どうするんです？」
「彼が、その時、金沢方面に行っているかどうか、調べたいんです」
「井岡さん」
と、大野は、急に、厳しい表情になって、
「あなたが、亡くなった中原君のことを、いろいろと、思い出すのは、もっともなことだと思いますが、そろそろ、止めて、そっとしておいた方が、いいんじゃありませんか？　中原君にだって、知られたくないことだってあったに違いない。それを、無理矢理、表沙汰にするのは、あまり感心しませんがねえ」
「でも、これは、単に、休暇を取って、旅行したということですから」
と、あや子は、いった。
「そりゃあ、そうかも知れませんがねえ」
「調べて頂けないでしょうか。中原が、二月二

十五日から三日間の休暇届を出しているかどうかだけなんです」

あや子は、必死に頼んだ。

大野は、やっと、肯いて、

「休暇届だけで、いいんですね？」

「はい」

「ちょっと待っていて下さい。人事課に、保存されていると思うから、調べてみますよ」

と、大野はいい、あや子を、研究室に待たせておいて、出て行った。

三十分は、待たされたろう。大野は、戻ってくると、

「どうも、うちの人事課は、書類の整理が悪くてねえ」

と、文句をいいながら、一枚の休暇届を、見せてくれた。

間違いなく、中原雅男の名前の休暇届である。

提出日は、二月二十日。

休暇は、二月二十五日から二十七日までの三日間、理由は、「旅行のため」と、書いてあった。

中原の印鑑も、ちゃんと、押してあった。

「これ、お借りしていって、構いませんか？」

と、あや子は、きいた。

大野は、急に、難しい顔になって、

「井岡さん。あなたは、M化学の人間じゃないんですよ」

「わかっていますわ」

「それに、亡くなった中原君の正式の奥さんでもない」

「それも、わかっていますわ」

「この休暇届は、一枚の紙切れだが、M化学の書類です。部外者のあなたに、貸すわけにはいかんのですよ。それは、わかって貰いたいと、

思いますよ」

と、大野は、いった。

確かに、あや子は、M化学の人間ではない。

「わかりました」

と、あや子は、肯くより仕方がなかった。

ともかく、休暇届は、あったのだ。

大野は、また、優しい表情に戻って、

「中原君は、優しい男だったから、あなたが、忘れ難いのも、無理はないと思いますがね。あまり、つきつめて、考えない方が、いいと思いますよ」

「ありがとうございます」

「それから、田代恭子という女性のことは、金沢の支社の方から、知らされました。びっくりされたでしょう？」

「ええ」

「考えてみると、私が、中原君に、金沢支社へ行って貰ったりしたことが、悪かったのかなと、思ったりしてね。私も、寝覚めが、よくないんですよ」

「中原は、そんなに度々、金沢へ行っていたんでしょうか？」

と、あや子は、きいた。

「仕事で、出張させたことは、あまり多くないと思いますがねえ。東京から、金沢まで、特急で、六時間余りでしょう。飛行機を使えば、もっと早く着けます。だから、休みの日に、行っていたかも知れないですよ。プライベートな行動については、上司の私でも、わかりませんからねえ」

と、大野は、いった。

## 5

翌日、あや子は、もう一度、金沢に出かけた。

相変らずの雨である。
みどりは、まだ、姉のマンションにいたが、遺品の整理もすんだので、明日にも、名古屋に帰るといった。
あや子は、みどりに、お姉さんの写真を一枚貸して欲しいと、いった。
「中原と、恭子さんの写真を持って、山中温泉へ行って来ようと思っているんです」
と、あや子は、いった。
「去年の二月二十五日から三日間、姉と中原さんが、本当に行ったかどうか、調べるんですか？」
みどりが、大きな眼で、あや子を見た。
「ええ」
「でも、中原さんは、その時、三日間の休暇を取っているんでしょう？」
「ええ」
「それなら、間違いなく、姉と、山中温泉へ行ったと思いますけど」
「それでも、一度、調べてみたいんです」
と、あや子は、いった。
「姉が、三日間、中原さんと旅行したことが、許せないんですか？」
と、みどりが、きく。
「そんな気で調べるんじゃありません」
あや子は、きっぱりと、いった。が、みどりの指摘は、当っていないこともないと、心の隅では、感じていた。
自分と知り合う前のことでも、二人だけで温泉へ行ったということが、妙に、生々しいのだ。死んだ人間に、嫉妬しても仕方がないとわかっていながら、中原が、なぜ、休暇までとって、温泉へ行ったのだろうと思う。自分とは、そんな旅行をしないまま、中原は、死んでしまった

のだ。

あや子は、その日のうちに、山中温泉へ行ってみることにした。

ＪＲの金沢駅前から、粟津温泉や、片山津温泉を経て、山中温泉行のバスが出ている。

山中温泉まで、約二時間である。

あや子は、一四時二〇分に出るバスに乗った。

座席は、半分ほど、埋っている。

バスは、小雨の中を、出発した。しばらくは、北陸本線に沿うようにして、走る。

北陸本線の小松駅前で、停る。三人ほど乗って来た。次は、粟津駅で、また、乗客が降り、ここから、加賀温泉郷に、入って行く。

あや子は、ここ何日間かの疲れが出て、バスにゆられながら、眠ってしまった。身体も疲れていたが、それ以上に、精神的な疲労も、強かったと思う。

中原が、まだ生きていて、彼と、どこかのクラブで、飲んでいる夢を見た。あや子が、彼が浮気をしたといって、なじり、それに対して、中原が、もごもごと口ごもる。そんな夢であった。

――はっきりして！

と、叫んだところで、眼がさめ、あや子は、思わず、周囲を見廻してしまった。

（ひょっとして、大きな声を出してしまったのではないか）

と、思ったのだが、他の乗客は、知らん顔をしている。

山中温泉には、一六時一五分に着いた。

雨のせいか、もう、周囲は、薄暗くなっていた。

予約していなかったし、女の一人旅ということで、心配していたのだが、最初に当ったホテ

ルで、あっさりと、泊れることになった。
とにかく、部屋に案内して貰い、温泉に入ってから、布団を自分で敷いて、横になった。
窓ガラスに、雨滴が、ゆっくり流れてゆくのが、見えた。
ふと、こんなことをして、いったい、何になるのだろうかという気がした。
この山中温泉のホテルの一つに、去年の二月末、中原が、田代恭子と二人で、泊ったことを、確認したところで、いったい、何になるのだろう？
それで、何かのふんぎりがつくというのだろうか？
あや子自身にも、わからないのだ。わかっているのは、とにかく、山中温泉に来てしまったということだし、来た以上は、二人のことを、聞いて廻ることになるだろうということだった。

夕食は、七時に、階下の食堂でということなので、あや子は、部屋を出て、降りて行った。
十五、六人の客だった。老人が、多かった。
夕食をすませると、あや子は、フロントへ行き、中原と、田代恭子の写真を見せ、去年の二月二十五日に、泊りに来なかったかどうか、きいてみた。
フロント係は、お手伝いの何人かにも当ってみてくれたが、心当りはないということだった。
あや子は、念のために、二月二十五日から二十七日までの宿泊者カードを見せて貰ったが、中原と田代恭子と思われるカップルが、泊った形跡はなかった。
（明日、他のホテルや、旅館に、当ってみよう）
と、あや子は、思った。
雨は、やみそうもなかった。

# 第七章　山中温泉

## 1

あや子は、雨の中を、ホテル、旅館と、当っていった。

疲れ切って、やっと、八軒目の旅館で、

「その方たちなら、確かに、お泊りになりましたよ」

と、いわれた。

あや子は、ほっとしながらも、同時に、中原が、一層、遠い存在になっていくような気がした。思い出までが、遠くなっていくのだ。

「宿泊者カードを、見せて貰えませんか」

と、あや子は、いった。

フロント係は、カードの束を持って来て、一枚ずつ、調べていたが、

「これですね」

と、その中の一枚を抜き出して、あや子に見せた。

去年の二月二十五日のものだった。

中原雅男
恭子

二人の名前が、まるで、夫婦のように、並べて書いてあった。宿泊は、二月二十五日から二十七日になっている。

中原が、書いたものと思われた。

「この二人のことを、覚えていますか？」

と、あや子は、きいた。

四十五、六歳に見えるフロント係は、「そうですねえ」と、眼を、宙に遊ばせていたが、
「とても、仲のいいカップルでしたよ。確か、女の方が、夫婦だと、おっしゃっていましたがね」
「ここに、三日間、いたんですか？」
「はい。私どもに、二泊されました」
「どこかに、出かけました？」
「それが、あの頃は、雪に埋っていましてね。遊びに行くといっても大変で、ずっと、部屋におられたみたいでした。男の方は、こんなに、沢山の雪を見たのは、初めてだと、おっしゃって、窓の外の雪景色を、楽しんでいらっしゃいましたねえ」
「二人の泊った部屋に、私も、今日、泊りたいんですけど」
と、あや子は、いってみた。
「どうぞ」
と、フロント係はいい、女の従業員が、あや子を、二階の部屋に、案内してくれた。
部屋には、それぞれ、花の名前がついていて、ここは、「桜の間」で、八畳の広さだった。
「あなたは、去年の二月二十五日に泊った、この人たちのことを、知らないかしら？」
と、お茶をいれてくれている女に、あや子は、中原と田代恭子の写真を見せた。
相手は、笑って、
「わたしは、先月から、臨時に働いているんで、去年のことは、わかりません」
「誰か、古くからいる人はいないかしら？」
と、あや子が、きくと、相手は、急に、声をひそめて、
「これは、内緒なんですけど、この旅館、危いんですよ」

「危いって？」
「社長さんがいってたんですけどね、あんまり、うまくいってないらしいんです。新しいホテルや旅館が増えてきて、ここみたいな古い旅館は、経営が、難しいんだと思いますよ」
と、お手伝いは、いった。
「そういえば、あまり、お客さんが、いないみたいね」
「ええ。今日も、お客さんと、あと、フルムーンのお客さんだけですよ。そんな具合で、古くから働いていた人たちは、やめてしまったんですよ。そのうちに、どこかへ身売りするんじゃないかという噂ですけどね」
お手伝いは、そんなことまで、教えてくれた。アルバイトで働いていることの気安さからだろうか。
とにかく、去年の二月二十五日から三日間、この旅館に泊ったことは、間違いないのだ。
恐らく、この頃が、中原と、田代恭子の一番、うまくいっていた時だったのだろう。
今は、すでに初夏で、この辺りが、雪に埋っていた光景を、想像するのは、難しい。ただ、積雪で、旅館に閉じ込められ、二人だけで、雪を眺めていた景色は、想像できるのだ。
二人で、コタツに入って、将来の生活設計でも、語り合っていたのだろうか？
一人は、大きな会社のエリート研究員であり、女の方は水商売の人間である。二人の将来が、うまくいく感じはなかったのではないか。
中原は、エリートといっても、地味な研究員である。金がなかったことは、あや子も知っている。
田代恭子は、やはり、中原が、豊かでないことが、物足りなくなって、彼と別れて、金持ち

のパトロンと、親しくなっていった。それで、二人の仲が切れ、中原は、あや子と愛し合うようになった。

今までのことを考えると、そんな図式になってくる。このあと、田代恭子は、また、中原に対して、未練がわいてきて、近づき、あの悲劇が生れたことになる。

多分、恭子は、未練のあまり、東京に行き、中原を、マンションのベランダから、突き落したのだろう。

そして、金沢に逃げ帰ったが、今度、遺書を残して、自殺してしまった。

あや子は、人間の運命が、ひどく、はかないものに思えてきた。

男と女の愛情というのは、いったい、何なのだろうかとも思う。去年の二月末には、中原と、田代恭子の愛は、きっと、輝きに満ちていたと思うのに、一年たった今は、二人とも、死んでしまっているのだ。それも、裏切りと、未練の中でである。中原だって、田代恭子だって、去年の二月には、そんなことになるとは、思ってもいなかっただろう。

あや子は、明日は、もう、東京に帰ろうと思った。

調べるべきことは、もう、調べつくしてしまった。中原が、田代恭子と、一時にしろ、愛し合っていたことが、確認できた。これで、もういいと思うからだった。

あや子は、旅館を出て、近くをぶらぶらしてみることにした。

フルムーンらしい老人のカップルの姿が、眼につく。日本でも、老人に、余裕が出て来たのか、それとも、一時的な流行なのか。あや子には、わからないながら、もし、中原と結婚でき

ていれば、いつか、こんな温泉に、フルムーンで、来ていたかも知れない。

（中原の霊は、今、どこにいるのだろうか？）

歩きながら、ふと、そんなことを、あや子は、考えた。

死ぬ瞬間、中原が、あや子を、あや子だけを愛してくれていたのなら、死んだ中原の霊は、彼女の近くにいるだろう。

しかし、少しでも、田代恭子に未練があったのなら、彼女が死んだ今は、彼女が、再び、中原を捕えてしまっているのではないか？

歩き疲れて、小さな喫茶店を見つけて、あや子は、中に入った。

カウンターに、一人、中年の女性の客がいて、店の主人に、お喋りをしている。客は、その女だけだった。

あや子は、テーブルに腰を下して、コーヒーを注文した。

運ばれてきたコーヒーを飲みながら、あや子は、ぼんやりと、店の主人と、中年の女のお喋りを聞いていた。

女も、地元の人間らしく、あれこれ、罪のない噂話をしていたが、そのうちに、店の主人の方が、

「泉水館も、とうとう他人手に、渡るんだってねえ」

と、いい、その言葉に、あや子は、耳をそばだてた。泉水館というのが、今、彼女の泊っている旅館だったからである。どうやら、お手伝いのいっていたことは、本当らしい。

「そうなのよ。前から、あの旅館は、二重抵当に入っていたんですって」

と、女が、相槌を打っている。

「そういえば、ユキちゃんは、あの旅館で、働

いていたんだってねえ」
「そうなの。お給料も、おくれがちになったから、辞めちゃったんだけど」
「それで、これから、どうするの？　そろそろ、結婚したら、いいんじゃないかと、思うけどねえ」
「マスターが、貰ってくれる？」
「おれには、奥さんがいるよ」
「冗談よ。実は、東京に行ってみようと思ってるの」
そんな会話が、続いている。
あや子は、カウンターに座っている女を、改めて見た。
年齢は、三十五、六歳だろう。小柄で、ちょっと、色っぽいところがある女だった。
店の主人と、その女の話が、一区切りついたところで、あや子は、
「失礼ですけど」
と、女に、声をかけた。
「え？」
と、女が、あや子を見た。
あや子は、自己紹介をしてから、正直に、この山中温泉に来た理由を、話した。
「それで、去年の二月二十五日から二十七日まで、泉水館に泊った二人のことを、あなたが覚えていないかと思って」
と、あや子はいい、中原と、田代恭子の写真を、相手に見せた。
女は、ちらりと、写真を見たが、
「泊ったことはわかったんでしょう？」
「ええ。宿泊者カードには、のっていました」
「それなら、もういいんじゃないの？」
女は、眉をひそめて、いった。
店の主人が、傍から、

「この人は、きっと、その時の二人の様子を知りたいんだよ」
と、いってくれた。
「でも、去年の冬のことでしょう？　一年以上も、前だと、お客さんの一人一人を、覚えているかといわれても、困るのよ」
女は、首をすくめるようにして、いった。
「その時は、積雪が多くて、二人とも、外に出られず、ずっと、旅館に籠っていたということなんですけど」
と、あや子は、いった。
「そういえば、去年の二月頃は、雪が多かったねえ」
と、店の主人が、いう。
女は、「そうねえ」と、いった。
「お客が、あまりない時だったかも知れないわ」
「ええ。宿泊者カードを見ると、二月二十五日頃は、他に、泊り客はいなかったみたいなんです」
と、あや子は、いった。
「それなら、あの二人かしら」
と、やっと、女は、いってくれた。
「覚えていらっしゃるんですね？」
「ちょっと、ちぐはぐな感じのカップルだったわね」
「ちぐはぐだったんですか？」
「ええ。ご夫婦だということでしたけどね。男の人は、普通のサラリーマン風でしたわ。ただ、女の人の方は、水商売の感じで、ちぐはぐだなと、思ったのよ」
と、女は、いった。
「じゃあ、二人は、うまくいっているようには、見えなかったんですか？」

と、あや子は、きいた。
女は、当惑した表情になったが、
「そこまでは、お客さんだから、わかりませんよ。ただ、男と女が、何となく、生きてる場所が違うみたいだなって思ったの。うまくいえないんだけど」
「何となく、わかるよ」
と、店の主人が、いった。
女は、今度はあや子に向って、
「本当に、この二人、亡くなったの？」
と、きいた。
「ええ。亡くなりました。心中みたいなものだという人もいるんです」
「そうなの――」
と、女は、急に、しんみりした口調になってから、
「じゃあ、あたしは、他に用があるから」
と、あや子にとも、店の主人にともなくいって、出て行った。

## 2

店の主人は、女が飲んでいたコーヒーカップを、片付けながら、あや子に向って、
「幸枝さんといって、いい人なんですよ」
「ここの人なんですか？」
「ええ。この土地の生れでね、私は、子供の時から、よく知ってるんです」
「東京に行くとか、いってらっしゃいましたけど」
「両親が亡くなって、ひとりだからでしょうね。頭のいい人だから、東京へ行っても、何とか、やっていくと思いますがねえ」
「あの泉水館で、長いこと働いていたんですか？」

と、あや子は、きいた。
「そうねえ。五、六年、働いていたんじゃないかな」
「最初、私には、あまり、話したがらなかったみたいでしたけど」
と、あや子がいうと、店の主人は、
「多分、泉水館が、潰れかけているんでしょうね」
「つまり、馘になったからということでしょうか？」
「それも、あるかも知れませんねえ」
「どうして、他のホテルとか、旅館で、働こうとなさらないのかしら？　今は、人手不足なんでしょう？」
と、あや子は、きいた。
詮索好きと、思われるかなと、思ったが、店の主人は、別に、気にした気配はなく、
「いろいろと、考えるところがあるんじゃないですかねえ。東京に行きたいというのも、その表われの一つと、思っていますが」
と、いった。
それ以上、聞くこともなくて、あや子は、礼をいって外に出た。
旅館に戻ると、ひどく、疲れたような気がした。
もう、これ以上、調べることもないと、思った。
中原の過去の思い出の中には、結局、入っていけないのだ。
これで、東京に帰ったら、もう二度と、ここへ来ることはないだろう。この山中温泉だけではない。金沢へ来ることも、なくなるような気がした。
あとは、警察に委せるより仕方がない。東京

に帰ってしまえば、それで、中原との関係も、完全に、切れるような気がしていた。

（死者は、死者として葬らしめよ――）

あや子は、ふと、そんな言葉を思い出していた。

中原は死に、彼と関係のあった田代恭子も、自殺した。彼女が、中原への未練から、自殺したのなら、中原を、彼女のもとへ返してやってもいいと、ふと、思った。

あや子は、まだ、生きているから、中原のことを忘れられれば、また、新しい生活を始められるだろう。

あや子は、旅館に戻ると、今日は、泊らずに、帰ることに決めた。もう、知りたいことは、全て、知ってしまったと、思ったからである。

車を呼んで貰い、あや子は、金沢に向って、山中温泉を、後にした。

金沢に着いたのは、夕方である。

東京に戻るのは、明日の「白山2号」でと思い、市内のホテルに、チェック・インした。

もう一度、田代恭子の妹にも、会いたかったのだが、彼女は、すでに、名古屋に帰ってしまっている。

あや子は、M化学の金沢支社に、あいさつに廻ってみたが、もう閉っていた。

翌日、あや子は、金沢発一一時三〇分の特急「白山2号」に乗った。

来た時のように、小松から飛行機にしなかったのは、帰りは、ゆっくりと、乗りかえのない、直通列車で、帰京したかったからである。

「白山2号」は、六時間以上かかるが、上野まで、直通である。

今日も、雨が降っていた。窓際の座席に腰を下し、雨に煙る景色を、ぼんやりと、眺めた。



何か、ひどくむなしい気分になっていた。何のために、金沢へ行き、山中温泉に行ったのだろうか？

田代みどりから、彼女の姉と中原が、去年の冬、三日間、山中温泉で過したと聞いたとき、そのまま信じて、東京へ帰った方が、よかったのではないか。

なぜ、山中温泉まで、確かめに、行ったのだろうか？

心の隅に、それを、信じないという気持があったのだろう。

「井岡さん」

と、ふいに、名前を呼ばれて、窓から、顔をあげると、通路に、M化学中野研究所の大野が、微笑していた。

「あ、所長さん」

「いいですか？」

と、大野は断ってから、空いている隣の席に、腰を下した。

「さっきから、あなたじゃないかと思っていたんですが。ひどく、疲れているようですね」

と、大野が、いった。

それに答えるのが億劫で、あや子は逆に、

「所長さんは、金沢支社へ？」

と、きいた。

「昨日、支社へ行きましてね、これから帰るところです。井岡さんは、例の中原君の休暇のことで、調べに行ってたんですか？」

「二月二十五日から三日間、彼が山中温泉へ行っていたのがわかりましたわ」

「山中温泉へねえ」

と、大野は、呟いてから、

「なぜ、彼は、休暇を取って、そんな所へ行ったんだろう？　何かわかりましたか？」

と、きいた。
「ええ」
「そうか。例の田代恭子という女性も一緒だったんですね。つまらないことを質問してしまって、申しわけない」
大野は、あわてて、詫びた。
「いいんです。いろいろとわかって、私も、気持の整理がつきましたから」
と、あや子は、いった。
本当に、そうだったのかどうか、彼女自身にも、わからないのである。気持の整理をつけたいという願望なのかも知れない。
大野は、単純に考えたのか、
「それは、良かった。あなたも、若いんだから、もう、過去は忘れて、ご自分の人生を楽しんだ方がいい」
と、いった。

## 3

東京に帰ってから、疲れのせいもあるのか、あや子は、二日ほど風邪をひいて、寝てしまった。
勤め先の銀行にも、中原の死以来、迷惑をかけている。
その風邪も、どうやら治って、明日から勤めに行こうと思っているところへ、十津川から、電話が入った。
十津川は、いきなり、
「申しわけないが、池袋まで、来てくれませんか」
と、いった。
「池袋のどこですか？」
「池袋警察署を、知っていますか？」
「いいえ」

「じゃあ、これから、迎えにあがります」
と、十津川はいい、電話を切ってしまった。
そんな一方的ないい方に、何か、重大なことらしいと、あや子は想像した。
十津川は、自分で、覆面パトカーを運転して、やって来た。
「あなたに、確認して欲しいことが出来たんですよ」
と、十津川は、あや子の顔を見るなり、いった。
あや子は、車に乗ってから、
「どんなことでしょうか？」
「今朝、豊島園の近くで、死んでいる中年の女性が、見つかりましてね。身元は、まだわからないんですが、あなたの名前を書いたメモを持っていたんです」
と、十津川は、車を走らせながら、いった。
「本当に、私の名前なんですか？」
「そうです。井岡あや子と、書いてありました。同名異人の場合もあると思いますが、とにかく、あなたに、見て貰おうと、思いましてね」
「どんな女なんですか？」
「年齢は、三十五、六歳ですかね。どちらかといえば、小柄かな。平凡な顔立ちで、左腕の上の方に、傷痕があります。所持品でもあれば、身元がわかるんですが、何もないんですよ」
「でも、私の名前を書いたメモは？」
「女のスカートのポケットの中に、くしゃくしゃになって、入っていたんですよ」
「その女は、殺されたんですか？」
「首を締められていました。明らかに、殺人です。所持品がないのは、多分、犯人が、持ち去ったんでしょうが、スカートのポケットの中までは、見なかったらしい」

と、十津川は、いった。
車で、池袋警察署に着いた。
十津川は、まず、メモというのを、見せてくれた。
くしゃくしゃになっていたのを、丁寧に広げた、手帳ぐらいの大きさの紙だった。なるほど、それは、稚拙な文字で、「井岡あや子」と、書いてあった。
「では、仏さんを、見て下さい」
と、十津川が、いった。
遺体には、白い布が、かけられていた。身元が確認されたら、すぐ、解剖のために、大学病院に運ぶのだという。
十津川が、白い布をとった。
顔全体が、むくんだ感じなのは、首を締めつけられたためだろう。
最初、あや子には全く、見覚えのない顔に見えた。
「知りません――」
と、いいかけて、「あッ」と、声をあげた。
「この人――」
「知っているんですか？」
「名前は、確か、ユキエ――」
と、呟いているうちに、はっきりと、思い出してきた。
「山中温泉で、会った人ですわ」
「それを、くわしく、話して下さい」
と、十津川はいって、あや子を見た。
あや子は、中原と田代恭子のことを確かめたくて、山中温泉へ行って来たことを、話した。
「二人が、去年の二月に、泉水館という旅館に泊ったことはわかったんです。この人は、そこで、働いたことのあるユキエさんという人ですわ。喫茶店で会って、いろいろと、話をして貰

ったんです」
「その時、あなたも、自分の名前を、いったんですね？」
「ええ。東京へ行くと、いっていたんです、彼女――」
「すると、上京して、すぐ、殺されたということですかね」
「まさか、私と向うで話したことが、原因で――？」
「そんなことは、ないと思いますが、なぜ、あなたの名前を、紙に書いて、わざわざ、持っていたんですかね。あなたに、何か、連絡したかったのかな？」
「でも、向うで、話は、全部、聞いたと思ったんですけど」
「彼女は、どんなことを話したんですか？」
「間違いなく、去年の二月二十五日から二十七日まで、二人が泉水館に泊ったと、証言してくれましたわ。その時、女性の方は、水商売風だったので、うまくいくのかと、心配になったとも、いっていましたけど――」
「そんな証言のことで、殺されたとは、思えませんがね。気になるとすれば、中原さんは殺され、田代恭子が、自殺してしまっていることです」
と、十津川は、いった。
あや子は、山中温泉で会った、ユキエのことを、思い出していた。
店の主人が、「若いんだから」と、彼女を励ましていた。
東京へ出て、何とかしようと思って、山中温泉から、やって来たのだろう。
あや子が、話をした日から、四日しか、たっていない。

その時間の短さが、あや子を、悲しませた。
十津川は、あや子を一階の応接室に案内し、コーヒーを、注文してくれた。
「中原さんを殺した犯人は、わかりましたの？」
と、あや子は、きいてみた。
「金沢で自殺した田代恭子が、犯人だという考え方もあります」
十津川は、冷静な口調で、いった。
「警部さんは、そうは、思っていらっしゃらないんですか？」
「いえ、辻褄は合いますが、これでは、能登の恋路で殺された小山刑事のことが、説明できません」
と、十津川は、いった。
「ニセの小山刑事は、まだ、見つからないんですか？」
「残念ながら、全く、手掛りがありません。恐らく、個人的に、小山刑事を恨んでいたのではなく、小山刑事が、恋路で調べていたことが、原因だったと、思いますね」
「でも、恋路の駅のノートにあった、K・Tが、原因だったとすれば、K・Tの正体は、もう、わかったわけでしょう？」
「田代恭子ということでね」
「ええ」
「だが、証拠はありません」
と、十津川は、いう。
「証拠？」
「K・Tが、田代恭子だという証拠です」
と、十津川は、いった。
「でも、他に、考えられませんわ」
と、あや子が、いったとき、応接室に、亀井刑事が、入って来た。

「今、泉水館に電話してみました。確かに、前に働いていた原田幸枝という女性のようです。向うのいう人相に、一致していますから」

と、亀井は、十津川に、いった。

「それで、いつ、東京に出て来たか、わかったかね？」

「泉水館では、前にやめた人なので、わからんそうです。石川県警で、調べて貰うことにしました」

と、亀井は、いった。

十津川は、あや子に、

「やはり、あなたのいった通りでしたね。助かりましたよ」

「中原さんが、殺されたことと、幸枝さんの殺されたことと、何か、関係があるんでしょうか？」

と、あや子は、きいた。

「今は、何ともいえませんね。だが、直感で、これは、ただの殺しではないと思うのですよ」

と、十津川は、いった。

あや子は、車で送ってくれるというのを断って、池袋警察署を、出た。

山中温泉から帰って、これで、中原とのことは、結着がついたと思ったのに、また、向うから、「ノー」という声が聞こえてきたような感じがする。

（いったい、これは、何なのだろうか？）

と、思う。

死んだ中原が、あや子に対して、何か、訴えようとしているのだろうか？

そうだとすると、あの原田幸枝が、殺されたのは、あや子が、山中温泉へ行って、中原と田代恭子のことを調べたためなのだろうか？

# 第八章　ハワイ

## 1

十津川が、すぐ、山中温泉へ行こうと決意したのは、今度の原田幸枝の死も、全て、前の事件に連続しているに違いないと思ったからだった。

中原雅男が、自宅マンションから墜死した時、最初は、自殺と思われた。

それを、十津川たちは、他殺ではないかと疑い、恋人の井岡あや子も、不審に思った。

その結果かどうかわからないが、彼女を尾行した、能登の恋路に行った小山刑事は、何者かに、殺されてしまった。

続いて、金沢で、K・Tと思われる田代恭子が、自殺し、そして、今度の原田幸枝の死である。

十津川は、この四つの事件を、連続したものと、考えていた。

もし、十津川たちが、最初の中原雅男の死を、全く疑わなかったら、どうだったろうかとも、考える。井岡あや子を、尾行することは、当然、しなかったから、小山刑事が、殺されることも、なかった筈である。

恋路駅のノートに、K・Tの記入があっても、井岡あや子は、心を痛めたろうが、十津川たちが、問題にしなければ、次の田代恭子の自殺も、なかったのではないか。

最後に、今度の原田幸枝である。

もちろん、今のところ、原田幸枝が、なぜ殺

されたのか、わからない。
だが、十津川は、直感的に、第一の中原雅男の死につながっていると、思ったのだ。
正確にいえば、中原雅男の死を、自殺でなく、他殺と、十津川たちが考えたことに、つながっているのではないかと、思ったのである。
とすれば、十津川は、小山刑事の死にも、田代恭子の死にも、そして、今度の、原田幸枝の死にも、責任を感ぜざるを得ないのだ。
十津川と亀井は、山中温泉に、飛んだ。
小松空港で、石川県警の坂本警部に会い、彼と一緒に、県警のパトカーで、山中温泉に向った。
「原田幸枝が、山中温泉の泉水館で、働いていたことがあるのは、確認しました」
と、車の中で、坂本は、十津川たちにいった。
「それで、彼女が、働いていた時、中原雅男と田代恭子が、泉水館に、泊っているんですね」
「そうです」
と、坂本は、肯いてから、
「原田幸枝が殺されたのは、本当に、今度の一連の事件との関係ででしょうか？」
と、十津川に、きいた。
「証拠はありませんが、私も、この亀井刑事も、関係があると思っています」
「すると、同一犯人ということも、考えられるわけですか？　田代恭子は、自殺だと信じていますが、東京の中原雅男、恋路の小山刑事、そして、金沢の原田幸枝は、他殺ですから」
「私は、そう思っているんですがね」
「しかし、動機がわかりませんが」
と、坂本は、いった。
「そうですね。今度の一連の事件で、私が一番、わからないのは、動機なんです。もし、これが、

男と女の問題が、根にあるとすれば、田代恭子の自殺で、完結していると思うのです。それなのに、また一人、殺されました。だから、急いで、亀井刑事と、来てみたんですよ」

と、十津川は、いった。

「中原雅男が殺されたのは、われわれは、三角関係のもつれと思っていたし、今でも、思っていますがねえ」

坂本は、難しい顔で、いった。

「中原雅男、田代恭子、井岡あや子の三角関係ですか？」

「そうです」

「われわれだって、最初は、そう思いましたよ。だが、それでは、小山刑事まで殺された理由がわからないし、今いったように、原田幸枝が殺された理由が、説明がつきません」

「原田幸枝は、井岡あや子の名前を書いた紙片を、持っていたそうですね？」

「そうです」

「すると、そのために、殺されたということになりますか？」

「多分、そうでしょう」

「しかし、なぜ？」

「それを、知りたくて、ここへやって来たんです」

と、十津川は、いった。

「井岡あや子は、何といっているんですか？」

坂本は、当然の質問をした。

「彼女は、びっくりしていますが、電話がかかったことも、原田幸枝が、訪ねて来たこともなかったと、いっています」

と、十津川は、いった。

## 2

十津川は、車を、問題の泉水館につけて貰った。

普通の温泉旅館だったが、入口が閉ざされ、〈館内改造のため十月一杯まで、休ませて頂きます〉の貼紙がしてあった。

十津川は、この旅館が、借金のため、他人手に渡ることになっているらしいことは、井岡あや子から、聞いていた。

しかし、こんなに早く、改造工事に入るとは思っていなかった。

「今日は、ここに、泊れそうもありませんね」

と、亀井が、ぶぜんとした顔で、いった。

「どうしますか？」

坂本警部が、きいた。

仕方がないので、十津川たちは、近くの旅館に、泊ることにした。

坂本警部には、礼をいって、帰って貰ったあと、十津川は、旅館のおかみさんに、泉水館のことを、聞いてみた。

「なんでも、大手の観光会社が、買い取ったので、鉄筋七階建てのホテルにするそうですよ」

と、五十歳前後のおかみさんは、教えてくれた。

「じゃあ、単なる改造じゃありませんね」

と、亀井が、いった。

「そうですよ。うちもそうなんだけど、木造二階建てじゃあ、今は、なかなか、採算が、とれませんからね」

「前から、泉水館で働いていた人たちは、どうしているんですか？」

と、十津川が、きいた。

「ほとんど、辞めたみたいですよ」
「なぜですか？　今年の十月末には、その七階建てのホテルに、生れ変るんでしょう？　そこで、働こうという人は、いないんですか？」
「新しいオーナーの方針で、全く新しい人間でやりたいということらしいんですよ。その代り、前の古い従業員には、沢山の退職金を払ったみたいですけどねえ」
と、おかみさんは、いう。
「前の泉水館には、何人の人が働いていたんですか？」
「出入りはあったでしょうけど、せいぜい、十人ぐらいじゃないかしら」
「そのうちの何人かに、会えませんかねえ」
と、十津川は、頼んでみた。
おかみさんは、調べてみましょうと、いってくれたが、夕食の時に、申しわけなさそうな顔で、
「駄目みたいですよ」
「一人も、見つからなかったんですか？」
亀井が、不審そうに、きいた。
「私の知っている人が、五、六人いたんですけどねえ。皆さん、今、ハワイに行ってしまっているんですって」
と、おかみさんは、いった。
「ハワイですか？」
「ええ。沢山、退職金を貰ったので、昨日、団体で、出かけてしまったんですよ」
「おかしいな」
と、十津川は、呟いた。
「何がですか？」
と、おかみさんが、きく。
「あの旅館で働いていた女の人で、原田幸枝さんというのがいるんですが」

「幸枝さんなら、知っていますよ」
「彼女は、新しい仕事を見つけようと、東京へ出て来て、殺されたんですが――」
「幸枝さんが殺されたって、本当なんですか？」
おかみさんは、びっくりしたらしく、十津川を見つめた。
「残念ですが、本当です。もし、退職金が、沢山出て、ハワイへ行くほど呑気なら、今、東京へ出て、新しい仕事を探すこともなかったんじゃありませんかね」
「私も、くわしいことは、わかりませんけど、皆さんで、ハワイへ行ったのは、間違いないみたいですよ」
と、おかみさんは、いった。
「昨日、出かけたんですか？」
十津川は、念を押した。
「ええ」
「妙に、あわただしいですねえ」
「でも、何日か前から、出かけることにしていたみたいですわ」
「いつ帰って来るんですか？」
「一週間ほどだそうですよ」
「退職金を払ったのは、元のオーナーじゃなくて、あの旅館を買い取った新しいオーナーですか？」
と、十津川は、きいた。
「ええ。そうみたいですよ」
「その新しいオーナーというのは、大手の観光会社だと、いいましたね？」
と、十津川は、きいた。
「ええ。東京に本社のあるS観光だそうですよ」
「名前は、聞いたことがありますよ。ハワイや

オーストラリアにも、ホテルを持っている会社です」

と、亀井が、いった。

（それで、前の従業員たちが、ハワイに遊びに行ったのか？）

と、十津川は、思いながら、一方で、突然のハワイ行に、どうしても、引っかかるものを感じた。

二人は、夕食のあと、旅館を出ると、派出所に足を運んだ。

中年の警官が、観光客らしい家族連れに、道を教えていた。それがすむのを待ってから、十津川は、警察手帳を見せた。

「泉水館のことで、ちょっと、教えて貰いたいんだよ」

「どんなことでしょうか？」

と、警官は、やたらに、緊張した顔で、十津川を見、亀井を見ている。

「あの旅館は、今、S観光の持ち物になって、工事をやっているが、前のオーナーは、どんな人だったのかね？」

と、十津川が、きいた。

警官は、手帳を見ながら、

「あそこのオーナーは、吉田修という人で、土地の人間です。いい人なんですが、経営の才能は別なんでしょうか、父親から引き継いだあの旅館を、他人手に、渡してしまったんです」

「S観光のものになったのは、いつ頃のことなのかね？」

「その前から、銀行の借金の抵当に入っていたようですが、S観光のものになったのは、五月十日だと聞いています」

「じゃあ、最近のことなんだな？」

「そうです。急に、S観光の名前が出て来たん

です。銀行が、買い手を探していましてね。あまりいい物件ではないんで、なかなか難しいんじゃないかと思っていたら、急に、S観光が、名乗り出たんです。それは、あの旅館を、抵当に取っていた銀行の人が、話してくれたんですが」

と、警官は、いった。

「あまりいい物件じゃないというのは、どういうことなのかね？」

「あの場所が、山中温泉では、一番、地盤が悪いんです。それに、肝心の間口が、少しばかり、狭いですから」

「それを、知っていて、S観光は買ったのか」

「ですから、S観光としては、何か、考えがあるんだろうと、みんな、いっているんです」

「去年の二月頃、あの泉水館で働いていた従業員の名前は、わかるかね？」

「わかります」

と、警官はいい、各ホテル、旅館の従業員の名前を書いた名簿を、キャビネットから、取り出して、十津川たちに、見せてくれた。

去年の一月一日現在になっている。

泉水館は、社長以下、十二人という小所帯である。

原田幸枝の名前も、その中にあった。

「この中の一人に会いたいんだが、ハワイに行かずに、ここに残っている人は、いないのかね？」

と、十津川は、警官に、いった。

「わかりました。すぐ、調べてみます。今日中には、見つけられると思います」

と、警官は、約束した。

## 3

わかり次第、連絡してくれるように頼んで、十津川と亀井は、旅館に帰った。

すぐには、布団に入れず、二人は、旅館の中の喫茶室で、コーヒーを飲みながら、派出所の警官の連絡を待つことにした。

「泉水館の元従業員たちが、なかなか、つかまらないというのは、何かあるんでしょうか？それとも、偶然でしょうか？」

と、亀井は、首をかしげながら、十津川を見た。

「偶然でないとすると、何者かが、彼等を、ハワイ旅行に行かせ、ひとりで、東京に出た原田幸枝を、殺したことになってくるよ」

「特に、私は、原田幸枝に拘わりますね。彼女は、井岡あや子に対して、去年の二月、中原雅男と田代恭子が、泉水館に泊ったことを話したわけです。もし、そのために、殺されたんだとすると、この話が、嘘ということになってくるんじゃありませんか？」

「しかし、その時期、中原が、休暇を取って旅に出ていることは、M化学の人事担当者が、認めているんだ。それを、原田幸枝が、なぜ、二人で泊ったと、嘘をつく必要が、あるんだろう？」

と、十津川は、逆に、質問した。

「わかりませんが――」

「その夜、二人が泊ってないのなら、泊っていないといえば、すむことだよ」

「そうなんですよ。しかし、警部。原田幸枝は、井岡あや子の名前を書いた紙を持って、殺されていたんです。原田幸枝と井岡あや子をつなぐものは、中原と田代恭子が、去年の二月に、泉

水館に泊ったという証言しかありません」
「原田幸枝は、井岡あや子に、どんなことを話したんだっけね。去年の二月に、二人が泊ったと、いっただけだったんだろうか？」
「井岡あや子は、原田幸枝が、そんな話をしてくれたといっていました。去年の二月に、二人が泊ったときは、大雪で、外に出られなかったこと、それに、男はサラリーマン風で、女は水商売の感じで、ちぐはぐに見えたことの二つです」
「別に、おかしいことはないね。確かに、中原は、M化学のサラリーマンだし、田代恭子は、クラブのホステスだからね」
「しかし、それでは、なぜ、原田幸枝は、殺されなければ、ならなかったんでしょう？」
と、亀井が、きく。
十津川は、「そうだねえ」と、コーヒーカップを、手の中に入れて、考え込んでいたが、
「原田幸枝は、井岡あや子に会って、何かいいたかったんだと思うね。いい忘れたことがあったんじゃないかな。それも、大事なことで」
「どんなことでしょうか？」
「例えば、二人が泊っていたとき、泉水館に、もう一人、泊り客がいた。しかも、その人間は、やたらに、中原たちの様子を窺っていたといったことだったかも知れない。それをいわれると、中原を殺した犯人は、困る。あくまでも、田代恭子を犯人にしておきたいからだよ。だから、上京し、井岡あや子に会おうとした原田幸枝を、あわてて殺した――」
「なるほど。納得させる推理ですよ」
と、亀井は、眼を輝かせた。が、十津川は、あくまで慎重に、
「原田幸枝が殺されてしまった今となっては、



それが、何なのか、永久に、わからなくなったよ」

と、いった。

「彼女を殺した犯人は、知っているわけですね」

「だがねえ、カメさん。犯人が、わざわざ、警察に電話をかけて来て、教えてくれるとは、思えんよ」

と、十津川は、笑った。

午後十一時近くなって、派出所の警官が、旅館まで、来てくれた。

「申しわけありません」

と、警官は、十津川たちに向って、まず、ペコリと、頭を下げた。

「見つからなかったみたいだね？」

と、十津川が、きいた。

「そうなんです。当時の社長吉田修は、行方不明です。五十歳の男ですが、あの旅館を抵当にして、銀行から、融資を受けていたんですが、その他にも、友人、親戚などから、五千万近い借金をしていて、それが、返せずに、姿をくらませてしまっています」

「従業員の方は？」

「それが、原田幸枝をのぞく全員が、ハワイへ行ってしまっています。家族のある者は、家族を連れてです」

「従業員が、社長と、原田幸枝を除くと、十人だね？」

「そうです。家族も入れて、二十三人のグループのようです」

「帰国は、一週間後か？」

「はい」

「その時は、すぐ、私たちに、教えて貰いたいんだがね」

「わかりました。とにかく、連中が帰国したら、従業員たちを、何とかおさえておいて、連絡します」

と、警官は、いった。

「それにしても、全員が、家族を連れて、よく一緒に、ハワイへ行ったねえ」

亀井が、感心したように、いった。

「原田幸枝一人が、同行を断って、東京へ行っています」

「なぜ、彼女が、ひとりだけ、ハワイへ行かなかったんだろう？」

と、亀井が、きく。

「理由は、わかりません。それから、ハワイ行ですが、やはり、S観光が、お膳立てをしています。早見というフロント係の友人が、いっているんですが、彼は、S観光のハワイのパンフレットを見せ、タダで、一週間行ってこられるんだと、大喜びしていたそうです」

「タダねえ」

「一人五十万としても、二十三人ですから、一千百五十万円です。S観光も、思い切ったことをする。さすがに、大会社は違うと、みんな感心していたようです」

と、警官は、ちょっと、羨ましげな顔をした。

「その慈善事業について、当のS観光は、どう説明しているんだろう？」

と、十津川が、きいた。

「くわしくはわかりませんが、君たちを饒にしたのは、申しわけないと、S観光の社長が、いっていたようですから、一種の罪滅しの気持だったんじゃないでしょうか？」

「罪滅しに、一千百五十万円か」

と、十津川は、呟いた。

## 4

翌日、十津川は、朝食のあと、旅館から、S観光の東京本社に、電話をかけた。

山中温泉の泉水館のことで聞きたいというと、最初、責任者がいないとか、金沢支店に聞いてくれとかいっていたが、こちらが、警察とわかると、急に、福田英一という、業務部長が、電話口に出てきた。

「当社としても、石川県内に、ホテルを持ちたいと思い、買収し、現在、改造に着手したわけです」

と、福田は、いった。

「あれは、改造というより、こわして、新築するんじゃありませんか？」

十津川は、皮肉を、いった。

「まあ、そうかも知れませんが――」

「あなたのところでは、泉水館の元の従業員は、使わないということですね？」

「そうです」

「理由は、どういうことです？」

「もう泉水館ではなく、ホテル『やまなか』として、今年の末にオープンするということもありますし、元従業員の皆さんは、いい人ですが、現在のホテルマンとしての訓練を受けていないこともあります。一番の理由は、新しい出発は、新しい人間でということです」

「元従業員とその家族を、一週間のハワイ旅行に、招待していますね。理由は、何ですか？」

と、十津川は、核心の質問に、移った。

「一つは、再雇用しないことのお詫びです。もう一つは、何年も、泉水館で働いて来た方々ですから、この際、のんびりとハワイで過して、新しい仕事に、ついて欲しいということです」

「それだけですか？」
「それだけです。他に、理由はありませんよ」
「原田幸枝という元従業員が、一人だけ、断って、ハワイに行きませんでしたね」
「ああ、彼女ですか」
と、福田は、肯いたが、
「断ったというのは、違いますよ。私どもが、ハワイへご招待の話を持って行ったとき、もう、上京してしまっていて、どうしても、行方がつかめなかったんですよ。私どもでは、全員に、行って頂きたかったんですがね」
と、いう。
「彼女が、今、どうしているか、知っていますか？」
「いや、知りません。住所をご存知なら、教えて下さい。今からでも、ハワイへ行って貰いますし」
「死にました。殺されたんですよ」
「まさか――」
「池袋の豊島園近くで、首を締められて、殺されていました」
「そうですか。私どもが、もっと、探せばよかったですねえ」
「犯人に、心当りは、ありませんか？」
と、十津川が、きくと、福田は、「とんでもない！」と、大きな声をあげた。
「全然、ありませんよ」
「泉水館は、七階建ての鉄筋のホテルになるんだそうですね？」
十津川は、話題を変えた。
福田は、ほっとしたらしく、また、落ち着いた声に戻って、
「そうです。若者から老人にまで、楽しんで貰えるホテルにしたいと、思っています」

「泉水館の前のオーナーが、今、どうしているか、知っていますか？」
と、十津川はきいた。
「行方がわからないことは、知っています。私どもとしては、新しいホテルの開業パーティには、吉田さんにも、来て欲しいと思い、探してはいるんですが」
「今、ハワイに行っている人たちですがね、連絡を取りたいんですが、何というホテルに、泊っているんですか？」
と、十津川が、きくと、福田は、
「それが、わからないんですよ」
と、いう。
「しかし、S観光が、招待しているんでしょう？」
「そうなんですが、皆さん、自由な観光がしたいと、おっしゃるので、ハワイでの行動は、拘束しないことになったんです。失礼だと思いましたが、ハワイ滞在中は、どこでお泊りになっても、どこで食事されても、全額、私どもで、持たせて頂くという約束になっています。それで、どこで泊られているのか、わからないのですよ。一週間後には、皆さん帰国されるので、それまで、待たれたらどうですか？」
福田は、そんなことをいった。
（本当だろうか？）
と、疑いながらも、十津川には、反論するだけのものがなかった。

## 5

十津川と亀井は、何の収穫もないままに、東京に帰ることになった。
収穫ゼロというのは、或いは、当っていないかも知れない。泉水館の件について、疑惑が増

したことを、収穫といえば、いえるからである。
東京に戻ると、十津川は、S観光についてのデータ集めに、取りかかった。
社長の生野敬一郎は、六十二歳。一時、政界にも進出したことがあったが、二年前の選挙で、落選している。
だが、政界との結びつきの強い男であり、会社自体も何かと噂がある。
S観光は、生野のワンマン経営といわれ、御用組合しかない。副社長でも、生野の機嫌を損じると、馘になるともいわれていた。
生野は、ケチということでも、有名だったし、それを、自慢にしているようなところが、あった。
「私は、損になるようなことは、絶対にやりませんよ。その代り、利益があると思えば、他人をはね飛ばしても、突進する。それで、今のS観光を創りあげたんだ」
と、生野は、週刊誌で、語っている。
十津川には、それが、不思議だった。
今度の、泉水館の買収や、元の従業員に対する接し方は、それまでの生野のやり方や、S観光の経営と、食い違うのだ。
これは、十津川の勝手な判断とばかりは、いえなかった。
「中央新聞」の社会部にいる友人の田口も、十津川の質問に対して、
「山中温泉の件については、みんな不思議がっているんだ。今までのS観光なら、というのは、今までの生野敬一郎ならということだが、泉水館みたいな物件は、買い叩いて、手に入れるよ。ところが、いやに、あっさりと、買い取っているんだ。まるで、あわてふためくみたいにね。それも、相手のいい値でだよ」

と、いった。

「理由は、何なんだろう？」

「わからないねえ。第一、S観光で、なぜ、山中温泉に、眼をつけたのかも謎なんだ。あの辺りに、直営のホテルを持ちたかったといっているが、本当とは、思えないね。何か、思惑があるに違いないんだが、それが、さっぱりわからん」

「元従業員に対する奇妙な温情については、どうだね？」

「それは、君に教えられて、初めて、知ったんだが、驚いたよ。前に、S観光は、北海道のホテルを買収したことがあるが、従業員を、全部馘にして、しかも、雀の涙ほどの退職金しか払わなかったんだ。生野敬一郎が、突然、変身したとも、思えないね。これも、謎だねえ」

「なぜなのか、想像がつかないかね？」

「生野は、計算高い男だからね、今もいったように、何か思惑があっての行動だと思うよ。考えられるのは、誰かに恩を売ったんじゃないかと思うんだが」

「恩をねえ」

「そうだ。他には、ちょっと考えられないね」

と、田口は、いった。

十津川にも、見当がつかない。

（S観光が、泉水館を買収したことと、今までの事件が、何か関係があるのだろうか？）

とも、考えるのだが、中原雅男の死にも、小山刑事の死にも、今までは、S観光の名前は、全く、浮んでいなかったのである。

「一週間たって、泉水館の元従業員たちが、ハワイから帰って来るのを、待つより仕方がありませんか？」

と、亀井が、きいた。

と、十津川は、いった。
結局、わからないのだ。

十津川は、難しい顔で、
「一週間で、洗脳されてしまうんじゃないかな」
「洗脳ですか？」
「何か、元従業員たちに、証言されては困ることがあって、強引に、ハワイへ連れて行ったのかも知れないと、思うんだよ。そうなると、向うでの一週間で、洗脳されてしまうかも知れない」
「不利な証言というと、去年の二月に、中原と田代恭子が、泉水館に三日間、泊ったことでしょうか？」
「それしか私にも、思い浮ばないんだがね」
「本当は、二人とも、泊っていないんじゃないでしょうか？」
「それなら、二人は、泊らなかったといえばすむことじゃないかね」

# 第九章　伝　言

## 1

井岡あや子は、小松行の飛行機に乗った。

東京で殺された原田幸枝の葬儀が、金沢で行われると、聞いたからだった。

彼女は、肉親の縁のうすい女だった。両親は、すでに亡く、姉妹もいない。それで、金沢市内に住む叔父夫婦が、遺体を引き取って、葬式を出すという。

幸枝が、自分の名前を書いた紙を持っていたことで、あや子は、彼女が何をいいたかったか、知りたいと思ったのである。

それに、原田幸枝を死なせた責任が、自分にあるような気がしていた。もし、自分が、山中温泉に行かなかったら、もし、彼女に、二人のことを聞かなかったら、彼女は死なずに、すんだのではないか。その思いが、絶えず、あや子を、苦しめていた。

恋人、中原の突然の死以来、自分は、迷い続けて来たと、あや子は、思う。

いや、迷わされて来たという方が、正確だろう。

中原は、自殺したと思い、それが、他殺らしくなって来たと思えば、彼に、田代恭子という女がいたことがわかった。

その女も、自殺してしまい、もう、これで、中原への思いも、絶ち切れたと考えたのに、また、原田幸枝という女の死が、追いかけて来たのである。

彼女が、なぜ殺されたのか。それが解決しない限り、今度の事件は、終らないような気がしてくるのだ。

自分の胸の中で、結着をつけたと思っていたのに、本当は、まだ、つけていなかったのではないのか。

金沢に着くと、あや子は、警察が教えてくれた住所に、タクシーを、走らせた。

市内の建売住宅が並ぶ一角に、原田幸枝の叔父夫婦の家があった。

長井という家である。

葬式は、もう終っていて、「忌中」の札だけが、まだ、残っていた。

叔父の長井の方は、会社に出ていて、叔母に当る長井正子に、会うことが出来た。

二階に招じ入れられ、お茶をすすめられた。

「本当なら、今頃、幸枝ちゃんは、ハワイに行っている筈だったんですよ」

と、正子は、いい、

「本当に、運の悪い娘なんです」

と、溜息をついた。

「ハワイって、泉水館の従業員と一緒に、ということですか？」

と、あや子は、十津川に聞いた話を思い出しながら、正子に、きいた。

「ええ。新しく、ビルを建てる会社が、招待して下さるという話が、あったみたいなんですよ」

「その話は、幸枝さんから、お聞きになったんですか？」

「そうですよ。いい話だから、行って来なさいよって、私も、主人も、すすめていたのに、急に、やめて、東京へ行ってしまったんですよ」

「幸枝さんが、なぜ、ハワイへ行かなかったか、

わかりますか？」

と、あや子は、きいた。

「あなたは、確か――」

「東京の井岡あや子です。幸枝さんが、私の名前を書いたメモを持っていたと聞いて、何を、私にいいたかったか、それを知りたいんです」

と、あや子は、いった。

「本当に、井岡あや子さん？」

と、正子は、念を押した。

「はい」

と、あや子は、肯いて、運転免許証を、相手に、見せた。

正子は、もう、しまってくれというように、手を振ってから、

「幸枝ちゃんが、東京へ行く時、電話をくれたんですよ。どうしても東京へ行って、井岡あや子という人に、会わなくてはいけないってね。ただ、行きちがいになって、この人が、金沢なり、山中温泉の方へ訪ねて行ったときには、困るから、もし、来たら、伝言を、お願いしますと、いったんですよ。山中温泉の何とかいう喫茶店のご主人にも、頼んでおいたそうですけど」

「その店なら、知っています」

と、あや子は、いった。

幸枝の相談にのっていた、あのマスターのことだろう。

「それで、幸枝さんは、どんな伝言を、頼んでいったんですか？」

と、あや子は、きいた。

「それが、よくわからないんですけどねえ。『あれは、人違いだ。男の人は別人』と、いってくれと、いわれたんですよ。それで、わかるのって、きいたら、わかる筈だって、いってま

したけどねえ」
「男の人は、別人と、いったんですか？」
「ええ。そうですよ。それが、何のことか、わかります？」
正子は、本当にわかるのだろうか心配だという顔で、きいた。
「わかりますわ」
と、あや子は、いった。

2

男の人は、別人というのは、去年の二月に三日間、泉水館に、中原と田代恭子の二人が泊ったことになっていたが、男の方は、別人なのだという意味だろう。
幸枝は、それをいいたくて、ハワイへの招待を断り、東京に出て来てくれたのだ。そして、殺されてしまった。
あや子は、礼をいって、長井家を出た。まだ、幸枝の伝言を、どう受け取っていいのか、よくわからないでいた。
去年の二月の三日間、田代恭子と山中温泉の泉水館に泊った男は、中原ではなかったとして、それなら、いったい、誰だったのか？
それに、旅館の従業員まで、なぜ、その男のことを、中原だと、いったのだろうか？
もう一つ、中原は、山中温泉へ田代恭子と行かなかったとしたら、何処へ行っていたのだろうか？　同じ時に、彼は、三日間の休暇を取ったことになっているからである。
謎は解けたという感じより、謎は、かえって、深くなった感じだった。
その足で東京に戻ると、羽田空港から、十津川に、電話をかけた。自分一人では、どう結論づけていいかわからなかったからである。



幸い、十津川は、山中温泉から、帰っていた。
あや子の話を聞くと、十津川は、
「それは、面白い話ですね。確かに、面白い」
「それで、どう解釈したらいいのか、警部さんと、お会いして、お聞きしたいんですけど」
「それなら、新宿で」
と、十津川は、いった。
新宿西口の高層ビルの中の喫茶店を、会う場所に決めて、あや子は、電話を切った。
東京モノレールと、山手線を乗りついで、約束の店へ行くと、十津川は、先に来て、待っていた。
あや子が、改めて、金沢で聞いて来た話をすると、十津川は、
「それで、あなたは、どうお考えなんですか？」
と、きいた。
「原田幸枝さんが、そのために殺されたと考えると、彼女のいったことは、本当だと思うんです」
「それは、同感ですね」
「ただ、それを、どう解釈していいかわからなくて、困っているんです。中原が、田代恭子さんと一緒に、山中温泉に行かなかったとしても、彼も、同じ時に、休暇を取っているんです」
「他にも、わからないことが、ありますか？」
「なぜ、誰が、去年の二月のことを、隠そうとしていたのかもわかりません」
と、あや子は、いった。
「しかし、必死になって、中原さんと、田代恭子が、一緒に、山中温泉に行ったことにしようとしていたことは、間違いありませんよ。何しろ、泉水館の元従業員全員を、ハワイへ連れて行っているわけですからね」
「それも、事実を隠すためでしょうか？」

「そう考えざるを得ませんね」
と、十津川は、いう。
「でも、誰が、そんなことを？」
「一つだけ考えられることが、ありますよ」
「どんなことでしょうか？」
「去年の二月、田代恭子と、実際に、山中温泉に行った男がいる。その男は、どうしても、彼女との関係を、隠したかったんじゃないかな。それで、元の泉水館の従業員たちに、去年の二月に来たのは、中原だと、いってくれと、頼んだんじゃないでしょうかね。中原さんは、田代恭子と関係があったことに、なっていますからね」
と、十津川は、いった。
「泉水館を買収したS観光も、それに、関係があるんでしょうか？」
と、あや子は、きいた。
「あるかも知れません。問題の男が、S観光に関係があるということだって、考えられるし、ひょっとすると、S観光の幹部の一人かも知れません」
「でも、わかりませんわ。その男の人に、妻子があるとしても、そんなにまでして、田代恭子さんとの関係を、隠そうとすることが」
と、あや子は、いった。
「問題は、そこです」
「え？」
「なぜ、そんなにまでして、田代恭子との関係を隠そうとしたかです。それが、わかれば、今度の事件の不明の部分が、わかってくると、思いますがね」
「もし、去年の二月に、田代恭子さんと山中温泉に行ったのが、中原じゃないとして、同じ日に、彼が、休暇を取ってるのを、どう考えたら、

いいんでしょうか？」

と、あや子は、きいた。

「それは、旅行に行くといって、休暇を取っているんですか？」

「ええ」

「全く同じ日なんですか？」

「ええ。休暇届は、同じ日になっていましたわ」

「あなたと、どこかへ行ったわけじゃありませんね？」

と、十津川が、きいた。

「いいえ。私と知り合う前ですから」

「そうですか。偶然ですかねえ」

十津川は、また、考え込んだ。

「それに、中原が、田代恭子さんに出したラブレターがありますわ。だから二人が関係があったことは、間違いないんです。山中温泉へは行ってなくても、そのせいで、彼は死に、彼女も、自殺したんだと思いますわ」

と、あや子は、いった。

「それなら、なおさら、山中温泉のことで、嘘をつく必要は、誰にもないと思うんですがねえ」

「まさか――」

と、あや子は、急に、顔色を変えて、十津川を見た。

「まさか、何です？」

「中原は、田代恭子さんとは、何もなかったということはないと、思うんですけど――」

「そう思うんですか？」

と、十津川が、きいた。

「それならいいと思いますけど、でも、それなら、彼は、なぜ殺されたのか、わからなくなってしまいますわ」

あや子は、言葉を、もつれさせた。
「それに、恋路駅のノートにあったK・Tのことも、わからなくなるし、田代恭子の部屋にあった中原さんのラブレターの説明もつかなくなってしまいますよ」
「彼女は、中原を愛していて、一時、他の男のところに、走ったと思われていますね。多分、中原のようなサラリーマンじゃなくて、大変なお金持ちだと、思うんです。その人が、中原を、殺した。と考えれば、お金の力で、手を廻して、自分の名前を、必死になって、消そうとしたのかも知れませんわ」
「つまり、山中温泉で、彼女と一緒に泊ったのは、その男だと？」
「ええ。それ以外には、考えられませんわ」
と、あや子は、いった。
彼女にしてみれば、中原が、田代恭子と関係がなかったと思いたいのだが、それは、無理だとも、思っている。
「石川県警に連絡して、田代恭子の男関係を、もう一度、洗い直して貰いますよ。あなたのいうお金持ちの名前が、浮んでくるかも知れない」
と、十津川は、いった。
「お願いします」
と、いったが、あや子は、重い口調で、
「もし、そのお金持ちが、山中温泉へ、初めて一緒に行った男だったとしても、中原が、田代恭子さんとの関係で殺されたことには、変りはありませんわね」
「そうかも知れませんが、今度の事件のわからない部分は、はっきりすると、思いますよ」
と、十津川は、いった。

## 3

十津川が、石川県警の坂本警部に、調査を依頼して、五時間後に、電話が、かかった。

「田代恭子について、もう一度、調べてみましたよ」

と、坂本は、あまり、熱のない声で、いった。

多分、新しいことは、何もなかったのだろうと、十津川は、感じながら、

「何かわかりました？」

と、きいた。

「新しいものは、出て来ませんね。美人で、クラブでは、ナンバー・ワンでしたから、男関係は、一杯ありました。だが、彼女は、M化学のサラリーマンとの結婚を、希望していた」

「中原雅男ですか？」

「そうです」

「他にも、男がいた筈です。金持ちの」

「金持ち？」

「そうです。それも、かなりの金持ちです。山中温泉の旅館を、一つ、買えるぐらいの金持ちでなければならないんですが、田代恭子の男で、そんな人間は、いませんか？」

と、十津川は、きいた。

「旅館というのは、泉水館のことですか？」

「まあ、そうです」

「そうですねえ」

と、坂本は、電話の向うで、考えていたが、

「金子という医者がいます。五十六歳で、病院の院長です。もちろん、妻子があります」

「資産家ですか？」

「何しろ、総合病院の院長で、金沢の名士でもあります。金沢では、一、二を争う大病院です」

と、坂本は、いう。

「田代恭子と、関係があったことは、間違いありませんか？」

「間違いないでしょう。ホステス仲間が、証言しています。ただ、今もいったように、彼女と中原雅男は、結婚したがっていたと思われます。だから、自殺したんですよ」

「金子という医者ですが、去年の二月二十五日から二十七日まで、田代恭子と一緒に、山中温泉の泉水館に泊っていましたかね？」

「調べてみましょう」

と、坂本は、いった。

更に、三時間ほどして、坂本は、また、電話で、回答してくれた。

「金子医師は、去年の二月二十五日から三日間、山中温泉には、行っていませんね」

と、坂本は、いった。

「それ間違いありませんか？　行ったことを隠すために、泉水館まで買収し、従業員の一人を、殺した相手なんです。本当のことは、いわないと、思いますがね」

「わかっています。裏を取りましたよ」

と、坂本は、いった。

「どんな証言がとれたんですか？」

「金子という医者は、外科が専門でしてね。脳外科です。二月二十五日の午後三時に、金沢市議会の議長が自宅で、クモ膜下出血で倒れましてね、金子病院に運ばれ、この金子医師が、手術を行っているんです。二時間半におよぶ手術で、そのあと、二十六日の昼頃まで、金子医師は、経過を見守っていたことが、看護婦や、議長の家族の証言で、わかっています」

「それは、間違いありませんか？」

大事なことなので、十津川は、念を押した。

「間違いありません。それに、金子医師は、田代恭子との関係を、隠していないんです。二度ばかり、関係したといっています」

と、坂本は、いった。

「この医者以外に、金持ちで、彼女と、関係のあった人間は、いませんか？　関係を隠したがる有名人でも、いいんですが」

「いませんね。この金子医師だけですよ。該当するのは」

と、坂本は、いった。

## 4

十津川は、当惑した。

原田幸枝が残した伝言で、事件の解決に、一歩、踏み出せると思ったのだが、これで、一層わからなくなってしまった。

去年の二月に、三日間、田代恭子と泉水館に泊った男は、何者なのだろうか？

それに、なぜ、中原ということにしたがるのだろうか？

この三日間、中原は、休暇届を出して、何処へ行ったのだろうか？

「カメさんの意見を聞かせてくれないか。私には、わからなくなったよ」

と、十津川は、亀井に、声をかけた。

「その男は、三日間、田代恭子と二人だけで、泉水館に泊ったわけでしょう？」

「そうだよ」

「男は、彼女に惚れていたことになります。彼女の方もです」

「だろうね」

「それに、男は、その時、独身だったんじゃありませんか？　妻子があると、三日間も、浮気旅行は、出来ませんよ」

と、亀井は、いった。
「だから、中原だと、思っていたんだがねえ」
「男は、別に、金持ちでなくても、いいんじゃありませんか？　資産家の娘と結婚することになったので、過去の女性関係を隠したいと思ったということでも」
と、亀井が、いった。
「彼女の親が、大金を出して、過去の女性関係を、もみ消したというのかね？」
「そうです」
「しかし、殺人までやるだろうか？」
と、十津川は、いった。
「そうか。原田幸枝を、殺していたんですねえ」
と、亀井は、小さな溜息をついた。
「そうなんだよ。泉水館を買収しただけでなく、二月の宿泊を隠すために、殺人まで、やっているんだ」
「婿のために、娘の両親が、そこまでは、やりませんね」
と、亀井は、肯いてから、
「S観光の何といいましたっけ――？」
「福田業務部長か」
「その男に、もう一度、聞いてみたらどうでしょうか？　S観光は、恐らく、問題の人間に頼まれて、泉水館を買収したんだと思います」
「行ってみるか」
と、十津川は、いった。
翌日、十津川と亀井は、S観光の東京本社に、福田業務部長を、訪ねた。
電話の声から、太った男と勝手に思っていたのだが、痩身の神経質そうな中年の男だった。
「S観光が、泉水館を買収した件ですが、黒幕は、誰なんですか？」
と、十津川は、直截に、きいた。

「この前、電話で申しあげたように、うちの社の方針で、買収したもので、黒幕なんか、おりませんよ」

福田は、笑った。

「おかしいですねえ。誰かが、表面に出たくないので、S観光の名前で、買収したという、もっぱらの噂なんですがねえ」

と、十津川は、いってみた。

「それこそ、根も葉もない噂話ですよ」

「S観光は、今、海外進出を、目ざしているんじゃないんですか？　ハワイや、グアム、或いは、オーストラリアへ。そんな方針で動いている時に、なぜ、山中温泉の小さな旅館を、買収したりしたんですか？」

「今もいったように、会社の方針ですよ」

「社長さんは、何ていいましたかね」

と、十津川は、きいた。

「生野といいます。生野敬一郎です」

「S観光は、社長さんのワンマン会社でしたね？」

「何のことですか？」

福田は、警戒するように、十津川を見、亀井を見た。

「会社の方針ということは、社長の生野さんの方針ということに、なりますね？」

「どちらでも、同じことでしょう」

「社長は、今、どこですか？　ぜひ、お会いしたいんだが」

「今、アメリカに行っています」

「いつ、お帰りですか？」

「さあ、半月ぐらいは、向うに、おると思いますが」

と、福田は、いった。

（生野社長も、アメリカへ逃げたか？）

と、十津川は、思った。
これ以上、粘っても、この部長は、同じ言葉を繰り返すだけだろう。
十津川は、亀井を促して、いったん、外へ出ると、今度は、S観光の株主を、調べることにした。
S観光は、一部上場したばかりの会社である。
その主要株主の名前を調べてみて、十津川は、おやっと思った。
社長の生野敬一郎が、三五パーセントの株を持っている。
問題は、二位の株主だった。
二位は、一八パーセントなのだが、そこに、M土地の名前を、見つけたからだった。
M土地は、M化学と同じ系列の会社である。
「これは、偶然だろうか」
と、十津川は、亀井を見た。
「M土地というのは、M化学が、工場建設などを行う場合、用地の買収に使っている会社ですね？」
「そうだ。それに、今の企業は、多角経営だから、土地そのもので、利益をあげていることもあると思うね」
「S観光の大株主ということは、レジャー産業にも、進出する気だったんでしょうか？」
と、亀井が、きいた。
「そういうことも、あるかも知れないな。M化学の系列会社に、M興業という会社もあるからね。M興業は、確か、ゴルフ場の経営もしていた筈だよ」
と、十津川は、いった。
「しかし、M化学が、S観光の名前で、泉水館を買収したとは、思えませんが」
「そこなんだよ。第一、中原雅男は、M化学の

社員だからね。クラブのホステスと、山中温泉で、泊ったことを、隠すというのならわかるが、実際には、別人だったというのに、中原が、泊ったことにしているわけだからね。わけがわからないんだ」

「こういうことは、考えられませんか。実際に泊ったのは、M化学のお偉方だった。妻子持ちのです。そんな人間が、浮気旅行をしたというのは、スキャンダルになる。そこで、死んでしまった中原が、泊ったことにした」

と、亀井は、十津川を見た。

「M化学の重役か」

「そうです」

「面白い考えだがね。それなら、去年の二月には、誰も泊らなかったことにしてしまえば、いいんじゃないかね。中原も、田代恭子も、泊らなかったことにすればいい。どうせ、買収して、従業員に、嘘の証言をさせるんならね」

と、十津川は、いった。

「すると、これを企んだ人間は、どうしても、中原雅男が、去年の二月二十五日から三日間、田代恭子と、山中温泉に泊ったことにしたかったことになりますね？」

「そうだよ。本当は、彼女と泊った男の名前を隠すのも、目的だったろうが、それ以上に、中原が、泊ったことにするのが、目的だったんじゃないか。そう思わざるを、得ないんだがね」

「なぜですかね？」

と、亀井が、きいた。

「なぜかな」

と、十津川は、また、考え込んだ。

個人的な恨みをもったものではないような気がするのだ。

それなら、S観光を使って、泉水館を買収し

たり、原田幸枝を、殺したりは、しないだろう。
「私が気になるのは、同じ三日間、中原が、休暇を取っていることですね」
と、五、六分、間を置いて、亀井が、いった。
「だが、山中温泉には、行っていなかったんだ」
「何処へ行っていたかが、問題ですね」
「彼の上司に、聞いてみるかね」
と、十津川は、いった。

## 5

中野に行き、M化学の研究所で、大野所長に会うと、大野はうんざりした顔で、
「また、中原君のことですか？　全て、お話した筈ですが」
と、いった。
十津川が、去年の二月の三日間について聞くと、大野は、その時の休暇届を見せて、
「この通り、届が出ています。田代恭子という女性と、山中温泉に、行ったんじゃないんですか？」
「それが、実際には、行ってないと、わかったんですよ」
と、十津川は、いった。
大野は、眉を寄せて、
「しかし、泉水館という旅館で、彼女と一緒に泊ったと、聞いていますが」
「そういわれているんですが、田代恭子と泊ったのは、どうも、別人に思われるんですよ」
「別人？」
と、大野は、眼をむけて、
「いったい、誰なんですか？」
「それは、まだ、わかりません」
「わからないのに、中原君じゃないと、決めつけるんですか？」

「彼ではないということだけは、わかったんです。本当は、この時、何処へ行ったのか、わかりませんか？」

と、亀井が、きいた。

「私は、山中温泉へ、田代恭子という人と一緒に行ったものと思っていますからね。今だって、そう信じていますよ」

大野は、怒ったような声で、いった。

「本当に、知らないんですか？　例えば、会社の命令で、どこかへ行ったということは、ないんですか？　会社としては、秘密なので、わざと、山中温泉へ行ったことにしているんじゃありませんか？」

と、十津川は、きいた。

大野は、顔色を変えて、

「会社が、そんなことをする筈がないでしょう。第一、会社の用件なら、そんな休暇届は、出さ

せませんよ」

と、いった。

「そうでしょうね」

と、十津川は、肯いた。

それ以上、聞かずに、十津川と亀井は、研究所を出た。

「あの部長の様子は、何か、おかしかったですよ」

と、パトカーに戻りながら、亀井が、いった。

「過剰反応か」

「そうですよ。これは、何かありますよ」

と、亀井は、いう。

「いったい、何なんだろう？」

十津川は、宙を睨んだ。何人もの人間が、殺されている。

そんなことをして、誰が、何を守っているのだろうか？

# 第十章　セブ島にて

## 1

中原雅男は、去年の二月に、三日間、休みを取ったが、山中温泉には、行かなかった。

これだけは、はっきりした。

では、実際に、この三日間、田代恭子と、山中温泉の泉水館に泊ったのは誰か、という疑問がわくが、十津川は、今は、そのことには、構っていられなかった。

十津川が、今、知りたいのは、次の二点だった。

一つは、中原が、休暇を取って、どこへ行ったのか、ということである。三日間の休暇を取ったのが事実なら、彼は、山中温泉以外のどこかへ行っていたに違いないのである。

もう一つは、M化学が、なぜ、そのことを隠すか、ということだった。

「私は、中原が、去年の二月に、三日間、休暇を取ったかどうか、怪しいものだと思いますよ」

と、亀井は、いった。

「つまり、田代恭子が、二月二十五日から三日間、誰かと、山中温泉に行っているので、それに合せて、中原が、その時、休暇を取ったことにしたというのかね？」

「そうです」

「しかしね、中原が、その頃、ずっと、M化学の研究所にいたら、いくら会社ぐるみでも、休暇を取っていたとは、いえないんじゃないかね」

と、十津川は、いった。
「とにかく、去年の二月頃、中原が、どうしていたか、調べてみましょう」
と、亀井は、いった。
「しかし、M化学では、絶対に、何も話してくれないだろうし、話してくれても、二月二十五日から二十七日まで、休暇を取ったというに決っているよ」
「わかっています。だから、去年、M化学の研究所なり、人事関係で、辞めた人間を見つけ出して、聞くことにします」
と、亀井は、いった。
そんな都合のいい人間がいるかどうかは、わからなかったが、亀井は、西本たち若い刑事を連れて、聞き込みに出かけて行った。
だが、二十四時間かかっても、亀井たちに、適当な人間は、見つけられなかった。
去年の二月から今日までに、M化学を辞めた人間は、六人だった。
他に、定年退職者が、三人いるのだが、この三人は、M化学の子会社に、再就職していて、亀井たちが、いくら頼んでも、M化学の人事については、話してくれなかったという。
途中退職した六人を、亀井たちは、追いかけてみたのだが、研究室にいた男は、現在、ニューヨークに行っていて会うことが出来ず、他の五人は、研究室のことを、よく知らなかったし、もちろん、中原の名前も、覚えていなかった。
手掛りがつかめないのである。
泉水館を買い取ったS観光の幹部を問いつめても、本当のことは、あくまで、隠そうとするだろう。
「参ったな」
と、十津川は、思わず、口に出して、いった。

M化学全体で、何かを隠そうとしている。それに、太刀打ちが出来ないのである。

それが、偶然、手掛りを、つかむことが出来た。

いや、偶然というのは、当っていないかも知れない。何とか、手掛りをと、悪戦苦闘している過程で、見つけ出したからである。

十津川たちが、絶望の末に考えたのは、去年の二月頃、M化学に、何かがあって、そのために、隠しているのではないかということだった。

特に、研究所といえば、災害の起きた可能性がある。

それが、周辺地区に、公害を撒き散らしたとすれば、M化学も、隠そうとするだろう。

十津川たちは、去年二月前後の新聞に、丹念に眼を通したり、研究所の周辺で、聞き込みもやった。

だが、M化学の研究所が、事故を起こしたという証拠は、見つからなかった。

新聞には、何も出ていなかったし、研究所の周辺の人々も、そんなことはなかったと、証言した。

十津川は、諦めずに、今度は、週刊誌を、当ることにした。

新聞が取り上げなかった小さな事故でも、週刊誌が、或いは、特ダネを狙って、記事にしたかも知れないと、思ったからである。

十津川は、国会図書館に行き、あらゆる週刊誌を調べてみた。

もし、それをやっていなければ、気がつかなかっただろうと思う。

写真週刊誌の一つに、ある写真が、のっていたのが、見つかったのだ。

〈M化学は、どう出る？　日比関係に影響か〉

という見出しで、成田空港から、フィリッピンに出かけるM化学の社員たちの写真が、のっていた。

その五人の社員の中に、中原雅男の姿を、見つけたのである。

2

問題の五人は、M化学の管理部長、営業部長、研究所長、それに、研究所の技術者二人で、その一人が、中原雅男である。

十津川は、写真についている記事に、眼を通した。

〈M化学の援助で、フィリッピンのセブ島に造られた化学工場「セブ・コーポレーション」で、最近、公害問題が起きており、フィリッピン国内でも、反対運動が生れている。このままだと、フィリッピンとの友好関係にも、ひびが生れかねないということで、M化学の幹部と、技術者が、急遽、セブ島に向けて出発した。M化学では、問題はないといっているが、大丈夫なのか？〉

この写真週刊誌は、去年の二月二十六日号となっていた。

とすると、この一行が出発したのは、二月二十日頃だろう。

十津川は、そのページをコピーして貰い、亀井たちと、捜査本部に、戻った。

全員が、突破口を見つけたということで、顔を輝かせていた。

「恐らく、二月二十五日から二十七日頃は、中原は、フィリッピンに、行っていたんだ」

と、十津川は、いった。

「しかし、それを、なぜ、隠しているんでしょうか？」

と、亀井が、きく。

「その点を、M化学の研究所へ行って、聞いてみようじゃないか」

と、十津川は、いった。

二人は、中野の研究所へ行き、所長の大野に会った。

これで、何回目だろうか？　大野は、明らかに、不機嫌だったが、十津川が、写真のコピーを見せると、狼狽の色を見せて、

「それが、どうかしましたか？」

と、開き直って、きき返した。

「去年の二月二十五日から三日間、中原さんは、休暇を取ったといいましたが、フィリッピンへ、行っていたんじゃありませんか」

と、十津川は、大野の顔を、見すえて、いった。

「私は、嘘をついていませんよ」

「じゃあ、この写真は、どう説明されるんですか？」

「それは、去年の二月二十日だと思いますよ。確かに、私も、中原君も、フィリッピンに行きましたが、別に、大きな問題ではなかったので、二十二日には、帰国しています。そのあと、中原君は、三日間の休暇を取っているんです。だから、嘘はついていないと、申しあげたんですよ」

「しかし、二月二十五日から三日間、中原さんは、山中温泉には、行っていないんですよ」

「その辺のことは、私には、わかりません。個人的な問題ですから」

と、大野は、いった。

「フィリッピンのセブ島で、どんな問題が、起

きていたんですか？」
と、十津川が、きいた。
大野は、笑顔になって、
「別に、問題は、起きていませんよ」
「しかし、ここには、公害問題が、起きていて、フィリッピンとの間の友好にも、ひびきかねないと、書いてありますよ」
と、亀井が、いった。
「それは、大げさに、書いてあるんです。確かに、公害騒ぎはありましたが、すでに、解決していています。その証拠に、この工場は、今も、順調に、動いていますよ」
「どんな会社ですか？」
「日本の政府援助で出来た会社で、M化学は、技術的な指導を、行っているわけです。だから、フィリッピンの会社なんですよ」
「何を造っているんですか？」
「レアメタルの製造です」
「稀少金属ということですね？」
と、十津川が、きいた。
「そうです」
「それで、どんな公害問題が、起きているんですか？」
亀井が、改めて、きいた。
「工場廃水のことで、騒ぎがあって、われわれが行って、改善したので、もう、問題はなくなっています」
「どんな風に、改善されたんですか？」
と、亀井が、なおも、きくと、大野は、眉をひそめて、
「お二人は、殺人事件を、追っておられるんでしょう？　殺人事件と、フィリッピンの工場と、どんな関係があるんですか？」
「わからないから、調べているんです」

と、十津川は、いった。
「問題のセブ・コーポレーションは、今も、順調に、稼動して、フィリッピンの経済に、貢献しているんですよ。問題があれば、操業停止になっています」
と、大野は、わざわざ、その工場の写真を見せてくれた。
スマートな工場である。工場の周囲には、グリーン地帯が、設けられている。いかにも、清潔な、近代的な工場に見える。
「ここは、M化学の技術で、操業されているわけでしょう？」
と、十津川が、きいた。
「そうです」
「機械も、M化学のものが、使われているわけですね。それに、M化学の人間が、技術指導をした？」
「そうです」
「そうなると、もし、この工場で、公害問題が起きれば、M化学にも、責任があることになりますね？」
「十津川さん」
「何です？」
「公害問題は、すでに、解決しているんですよ」
「本当ですか？」
「解決していなければ、今頃、国際問題化していて、セブ島で、操業していませんよ。そうでしょう？　問題があったことは、認めますが、今もいったように、われわれが行って、解決しました。それに、あの工場が出来て、五百人近い人たちが就職できて、現地の人たちには、大変に、感謝されているんですよ」
と、大野は、いった。
「公害問題は、どんなことが、問題だったんで

すか？」

と、十津川は、なおも、きいた。

「警察は、いつから、公害問題に口を出すようになったんですか？　私が、それについて、回答しなければならない義務はないと、思いますがねえ」

大野は、肩をすくめるようにして、いった。

それ以上は、聞けそうになかったので、十津川と亀井は、引き揚げることにした。

ただ、十津川は、亀井を先に帰し、自分は、ひとりで、例の写真週刊誌を出している出版社に、廻ってみた。

「週刊インサイド」の浅井編集長に、会った。

十津川が、コピーを見せてきくと、浅井は、

「この写真と記事は、フリーのカメラマンの持ち込みです」

「その人に、会えますか？」

「確か、東南アジアを廻っている筈ですが、もう帰っているかも知れません」

と、浅井はいい、電話をかけてみてくれた。

小さく、女の声が聞こえていた。浅井は、電話を切ると、

「妹さんがいたんで、聞いてみましたが、まだ、四、五日、帰らんそうです。今、フィリッピンに、いるそうですよ」

「この公害問題でですか？」

「そう思いますが、くわしいことは、わかりません」

と、浅井は、いう。

十津川は、カメラマンの住所と名前を教えて貰い、その妹に、会ってみることにした。

住所は、四谷三丁目近くのマンションである。

階下の郵便箱で「伊原」という名前を確かめてから、五階に、あがって行った。

カメラマンの名前は、伊原孝平、二十九歳だと、浅井編集長に、教えられていた。

五〇六号室のインターホンで、来意を告げると、ドアが開いて、伊原の妹が、顔を出し、中へ、通してくれた。

彼女の名前は、敬子で、大学三年だということだった。

2DKの部屋で、兄妹で一緒に生活していた。

兄の孝平の部屋は、さすがに、いろいろなカメラ機器や、アルバムや、撮影ずみのフィルムで、あふれている。

その部屋の方を、ちらりと、見てから、

「お兄さんは、今、フィリッピンだそうですね」

と、十津川は、敬子に、いった。

「ええ。なんでも、向うで、裁判が始まっているので、それを見て、帰ってくると、いっていました」

と、敬子は、いう。

「裁判って、例のセブ島の公害問題のですか？」

「ええ」

「おかしいな。M化学では、公害問題は、解決したといっていましたがね」

「兄は、裁判になったといっていましたわ。工場周辺の人たちが、告発したので、裁判になったと」

「お兄さんに、連絡がとれますか？」

と、十津川は、きいた。

「ホテルに泊っているのなら、連絡できるんですけど、兄は、訴えた人たちの家に泊り込んで、写真を撮っているんです。その家には、電話はないみたいなんですよ」

と、敬子は、いう。

「帰国するのは、四、五日後ですか？」
「そういっていましたけど、わかりませんわ。兄は、夢中になると、時間を忘れてしまう人間ですから、ひょっとすると、十日、二十日と、のびるかも知れませんわ」
「困ったな」
と、十津川は、考え込んでしまった。
伊原孝平に会って、話をききたいのだが、これでは、いつ会えるかわからない。
十津川は、捜査本部に帰ると、すぐ、フィリッピンに行かせてくれるように、三上部長に、いった。
「今度の事件の謎の部分は、セブ島にあると思っています。M化学が、嘘をついてまで、守ろうとしている秘密も、セブ島で起きている公害問題だと、思っているのです」
「間違いないのかね？」
三上は、半信半疑の顔で、きいた。
「そう確信しています」
「証拠はなしか？」
「その証拠を、見つけるために、セブ島に行きたいわけです」
と、十津川は、いった。
「セブ島へ行く以外に、解決の方法は、ないのかね？」
「ありません」
「とにかく、時間をくれ」
と、三上は、いった。
その日一日、待たされ、翌日になって、やっと、セブ島へ行く許可が下りた。が、亀井を連れて行くことは、許されず、十津川一人でということになった。
十津川は、その日のうちに、成田から、マニラに向った。


Philippine Airlines

約四時間の旅である。マニラから、フィリッピン航空に乗りかえ、セブ島に向った。

セブは、リゾート地として有名で、同じ飛行機に、日本人の団体が、二組も、乗っていた。

セブ島の空港に着いたのは、午後四時過ぎである。

セブ市内には、車で、海峡にかかる橋を渡って行く。日本の援助でかけられた橋である。

問題の工場は、セブ市から、更に、車で三十分ほど走った山間に建っていた。

高い塀が、工場を取り囲んでいる。正門には、ガードマンが、二人、こちらを、睨んでいた。

十津川が、しばらく、見つめていると、急に、工場内が、騒がしくなり、一人の男が、押し出されて来た。

背の高い、若い男である。英語で、何か叫んだようだが、離れた場所に立っている十津川には、はっきりとは、聞こえなかった。

二人のガードマンが、その男を、門の外に放り出した。

男は、よろけて、倒れかけたが、踏み止まると、「畜生！」と、今度は、はっきりと、日本語とわかる言葉を、口にした。

工場の中から、カメラを持った中年の男が出て来て、青年に渡して、何かいっている。

その堅い表情から見て、叱りつけているという感じだった。

中年男が、工場の中に姿を消してから、十津川は、青年に、声をかけた。

「伊原さんじゃありませんか？」

「――」

相手は、黙って、振り向いた。

「自己紹介します。東京から今日着いた十津川です。警視庁捜査一課の警部をやっています」

「刑事？」
と、相手は、呟いてから、
「日本の刑事が、何をしに、ここへ来たんですか？」
「あなたに会いにですよ」
「M化学に頼まれて、僕を逮捕しに来たんですか？」
と、青年、伊原孝平が、きいた。
十津川は、苦笑しながら、
「なぜ、私が、あなたを逮捕しなければならないんですか？」
「そりゃあ、僕が、セブ・コーポレーションの、いや、M化学の秘密を、あばき出そうとしているからですよ」
「実は、私も、その秘密を、知りたいと思っているんです」
「信じられませんね」
「なぜです？」
と、十津川は、きいた。
伊原は、カメラを、肩にかけ、工場の塀に沿って歩き出しながら、
「警察は、いつだって、公害反対運動を弾圧する側に立って来たんじゃありませんか。会社側の利益を守って来た人間の言葉は、信じられませんよ」
「なるほどね」
十津川は、逆らわずに、肯き、伊原と並んで歩き出した。
「私は、別に、どちらの側にも、立つ気はありませんよ。ただ、事件を調べていくうちに、M化学の秘密というか、この工場の公害問題に、ぶつかったんです。従って、あなたのように、公害問題そのものに、関心があるというわけじゃないですよ」

「よくわかりませんが――」
伊原は、戸惑いの色を見せて、十津川を、見た。
自然に、二人の足がとまった。
「東京で、M化学研究所の研究員が一人、死にました。名前は、中原雅男です。あなたが、去年の二月に、写真週刊誌にのせた写真に、彼も、出ているんです」
と、十津川がいうと、伊原は、急に、興味を示して、
「ああ、あの写真ですか」
と、いった。
「あれは、この工場で、公害騒ぎが起きて、M化学の人間が、あわてて、セブ島に行ったときの写真でしたね？」
「公害は、もっと早くから起きていたんですよ。騒がれ始めたのが、去年の二月頃からというこ
とです」
「写真の五人は、何をしに、セブ島へ来たか、わかりますか？」
と、十津川は、きいた。
「M化学にきいたら、どうですか？　警察の人になら、話すんじゃないかな」
「いや、全然、話してくれませんよ」
「なぜですかね？」
「多分、われわれが、中原という研究員の死の謎を追っているからでしょうね」
「死因が、おかしいんですか？」
「三角関係のもつれから、自殺したことになったが、あれは、明らかに殺人でね。問題は動機なんです。M化学は、あくまでも、三角関係のもつれと、思わせようとしています。私は、違うと思うのだが、それなら、いったい何なのだとなると、それが、皆目、見当がつかなかった

んですよ」
「それで、ここの公害事件に、眼をつけたんですか？」
伊原は、まだ、信じ切れぬ様子で、十津川を見ている。
「そうです。ワラをもつかむ気持でね」
と、十津川は、いった。

## 3

「どこか、落ち着いて話せる場所が、ありませんか？」
と、十津川が、きいた。
「何の話をするんですか？」
「ここの公害のことと、それに、死んだ中原雅男が、どう関係していたかということを、知りたいんですがね」
「中原さんのことは、正直いって、よく知りません。だが、公害のことなら、話せると思います。少し歩きましょう」
と、伊原は、いった。
二人は、工場の近くを流れる川に沿って、ゆっくりと、歩いた。
「昔、この川沿いに、小さな村があったんですがね、別の場所に、移って行きました」
と、伊原が、話す。
「あの工場のためにですか？」
「そうです。あの工場は、廃液を、この川に、たれ流していたんです。村人たちには、何の警告もせずにね」
「それで、どうなったんですか？」
「この村の人たちは、この川の水を飲料水にし、魚も、獲って食べていましたからね。当然、日本の水俣病と同じような現象が、現われ始めたんですよ。最初に、この地区の小学校の教師が、

問題にしたんですが、工場側は、関係ないと、突っぱねました。M化学は、この工場は、フィリッピン政府のものだから、関係ないと、責任を回避しましたよ。しかし、あの工場は、M化学の技術指導で、出来たものです。機械も、M化学が提供し、技術者も、M化学から派遣されているし、幹部も、M化学の人間です」

「そうでしょうね」

「何より、重大なのは、M化学は、日本で、同じ工場を作り、そこで、公害を発生させたという前科があることですよ。廃液などの処理施設を作らずに、工場を稼動させたら、どうなるかわかっているのに、M化学は、その措置をせずに、工場を動かしたんです。フィリッピンなら、問題にはなるまいと、タカをくくっていたんだと思いますね」

「問題化したので、あわてて、あの五人が、乗り込んで来たわけですか？」

「そうです。今もいったように、最初は、この地区の小学校の教師が、問題にしたんですが、それを、M化学は、金の力で、押さえ込もうとしたわけですよ。廃液は、この川に流さず、貯水池を作ると約束して、今、造成中です。被害者の村人たちには、見舞金を出しました。それも、わずかの金額ですよ。まあ、フィリッピンでは、かなりの額なので、村人たちの中には、沈黙を守っている人間が多いんですがね」

「しかし、今は、裁判になっているんでしょう？」

「そうです。全部が、沈黙したわけじゃありませんからね。その教師は、黙らなかったし、村人たちの健康診断に当った医者も、セブ・コーポレーションと、その後ろ盾になっているM化学を、告発したわけです」

「それで、裁判になったわけですね？」
「そうです。やっと裁判が、始まったわけです」
「M化学も、当然、被告側として、呼ばれるわけでしょう？」
と、十津川は、きいた。
「そうなると思います。M化学側は、あくまで、セブ・コーポレーションとは、無関係を主張すると思いますが、何回もいうように、実質的には、M化学が、動かしているわけだし、製品は、全て、M化学に、納入されているんです」
「さっき、あの工場から、追い出されていましたが、何かあったんですか？」
と、十津川が、きくと、伊原は、笑って、
「何を質問しても、向うがノーコメントだし、レアメタルの製造過程を秘密にしているので、何とか、写真に撮りたいと思って、塀をのり越えて、潜入したんですよ。警戒の厳重さが、よくわかりましたよ。すぐ見つかって、つまみ出されました」
「伊原さんは、被害者の家に、寝泊りしているということですが」
「その方が、実態が、わかると思いましてね」
「ここから遠いんですか？」
「歩いて、十五、六分のところに、村が、移されたわけです。セブ・コーポレーションが、資金を出したことになっていますが、実際に、金を払ったのは、M化学ですよ。つまり、あの工場が、M化学のものだという証拠なんです」
「その新しい村に、案内して貰えますか」
と、十津川は、頼んだ。
そこへ行けば、何かがわかるのかどうか、十津川には、自信がなかった。しかし、ここまで来たら、他に、方法が見つからないのである。

二人は、川沿いの道を、上流に向って、歩いて行った。

伊原は、十五、六分といったが、実際には三十分近くかかった。

山の中腹を切り開いて造られた村である。

プレハブの住宅が、点在していて、中に入ると、診療所もあった。

真新しいプレハブの屋根が、強烈な太陽の光を受けて、きらきら、光っている。

だが、十津川が受けた印象は、死んだように、眠っている村だなということだった。全体に、活気が感じられないのである。

子供の姿は、他のフィリッピンの場所と同じように、沢山見かけるが、彼等は、さすがに、明るく、動き廻っている。

だが、活気のないのは、大人たちの姿だった。

男たちが、開け放した家の中で、だるそうに腰を下し、ぼんやりと、外を見ている。一日中、そんな姿勢を、崩さないように、十津川には、見えた。

若い女の姿は、ほとんどなく、年老いた女たちは、ひどく、疲れた表情に見えた。

子供たちだけが、動き廻り、あとは、全て、動きを止めてしまっているように見えるのだ。

伊原は、十津川を、村の真ん中にある診療所へ連れて行った。

インド系の顔立ちの五十五、六歳の男の医者だった。

この医者も、十津川に向って、最初、警戒するような眼になった。

# 第十一章　対　決

## 1

その医者の名前は、J・クリシュナンと、いった。

十津川が、英語で、ここでの実情を知りたいというと、クリシュナンは、彼を、若い母親と、その赤ん坊に会わせた。

「その赤ん坊をよく見て下さい」

と、クリシュナンは、いった。

最初は、眼の大きい、可愛らしい女の子に見えたが、よく見れば、その大きな瞳は、全く動かないのだ。

「私は、統計をとっているんですが、この地区で、最近生れた子供たちの中に、障害のある子が、間違いなく増えているんです。あの工場が出来てからね。私は、工場廃水が原因だと思っていますが、工場側も、日本のM化学も、認めようとしません」

と、クリシュナンは、悲しげな表情で、いった。

「去年の二月二十五日に、M化学の幹部と研究員が、実態を調べに来たと思うんですが、会われましたか？」

と、十津川は、きいた。

「いや、来られたのは、一人だけでしたよ。それも、個人的に、見えただけです」

「その人の名前を、覚えていますか？」

と、十津川が、きくと、クリシュナン医師は、診療所の机の引出しから、ノートを出して、見

せてくれた。
そこに、「M. Nakahara」の署名が、あった。
「この人のことを話してくれませんか」
と、十津川は、いった。
「いい人でした」
と、医師は、まず、いった。それから、言葉をついで、
「M化学からやって来た日本人の中で、唯一人、本当に、あの工場の公害について、考えてくれましたよ。もう一つ、ええ、ケイと、親しくなっていたのも、覚えていますね」
「ミス・ケイ？」
「マニラから、ここの公害問題について、研究しに来ていた大学生がいたんです。これが、彼女です」
医師は、ポラロイドで撮った写真を、見せてくれた。
丸顔の、眼の大きな女性だった。恥ずかしそうな笑顔である。
「それは、ミスター・ナカハラが、撮ったものですよ」
と、医師は、いった。
（だから、はにかんでいるのか）
と、十津川は、思いながら、
「二人は、ここで、出会って、それから、どうなったんですか？」
「彼が帰国したあと、ミス・ケイと、文通していました。確実に、二人の間に、愛が芽生えていくのが、私にもわかりました。ええ、ケイが、彼から来た手紙を見せてくれましたから」
「彼女の名前は、ケイ何というんですか？」
「ケイ・トーマスです」
と、医師は、いった。
（それなら、K・Tになる）



と、十津川は、思った。

「彼女は、去年の夏だったと思いますが、ミスター・ナカハラに会いに、日本へ行きました」

と、クリシュナン医師は、いった。

「愛情を確かめるためにですか？」

「それもありますが、M化学の研究員であるミスター・ナカハラに、公害問題で、証言してくれと、頼むためです。ミスター・ナカハラは、日本の北の方にある景色の美しい海岸に、連れて行ってくれたと、いっていました。恋人同士の伝説のある場所だったそうですよ」

「恋路海岸？」

「コイジ？　ああ、それです。その上、必ず、苦しんでいるセブ島の人々のために、証言すると、約束してくれたと、帰ってきて、ミス・ケイは、嬉しそうに、私に、報告してくれました」

「なるほど」

と、十津川は、肯いた。少しずつ、事件の本当の貌が、見えて来たような気がした。

## 2

「ところが、いよいよ、公害裁判が始まるときになって、ミスター・ナカハラは、会社に不利になるような証言は、出来ないと、いって来たんです」

と、クリシュナン医師は、腹を立てるというより、悲しげな表情で、いった。

「日本人は、なかなか、自分の属している会社について、内部告発は、出来ないんですよ」

と、十津川は、いった。

「私も、日本人は、何人か知っているから、その気持は、わかります」

と、クリシュナンは、いってから、

「しかし、ミス・ケイは、悲しみました。二重に、悲しみました。わかるでしょう?」
「ええ。自分への愛も、消えたと思ったからでしょう?」
と、十津川は、いった。
「そうです。彼女は、ミスター・ナカハラの本当の気持を確かめるために、もう一度、日本へ行くことにしたんです」
「それは、今年になってからですね」
「そうです。彼女は、ミスター・ナカハラと、もう一度、思い出の海岸に行ったそうです。その時、ミスター・ナカハラは、彼女に、こういいました。私を、責めないでくれと」
「それで、ミス・ケイは?」
「とても、悲しかったと、いっていましたね。私は、あなたを責めるために来たんじゃない。愛情を確かめに来ただけだと、彼女は、ミスター・ナカハラにいったそうです」
「ミスター・ナカハラは、どう返事をしたんですか?」
「考えさせてくれといったようです。それで、彼女は、わずかな期待を持って、フィリッピンに帰って来ました。しかし、今になっても、ミスター・ナカハラからは、何の便りもありません」
「死んだんですよ」
と、十津川は、いった。
「死んだ? 本当ですか?」
医師は、信じられないという顔で、十津川を見た。
「そうです。死にました。恐らく、ミス・ケイが、帰国した直後だったと思います。自殺ということになっています」
「自殺?」

「だが、私は、違うと思っているのです。それを調べに、来たんです」
と、十津川は、いってから、
「ミス・ケイにも、会いたいんですが、セブのどこに行けば、会えますか？」
「ミス・ケイは、マニラに帰っています」
「問題の公害裁判が、始まったのに？」
「彼女は、豊かではありません。日本に、ミスター・ナカハラに会いに行くのに、お金が、かかりました。お金を借りたので、返すために、働かなければならないんです」
と、医師は、いった。
「学校は、やめてしまったんですか？」
「それは、わかりません。何もいって来ませんから」
「僕が、マニラへ行って、探してみるよ」
と、伊原は、十津川に、いった。

二人は、診療所を出た。
十津川は、クリシュナン医師に教えられたことを、頭の中で、思い返していた。
「ミスター・中原が、なぜ死んだか、わかったんですか？」
と、伊原が、きいた。
「ぼんやりと、わかって来ましたよ」
「犯人を、捕まえられるんですか？」
「多分ね」
「相手が、M化学という組織でもですか？」
と、伊原が、意地悪く、きいた。
「なぜ、そう思うんですか？」
「あなたと、クリシュナン医師の話を聞いていれば、誰だって、想像がつきますよ。内部告発しようとした人間がいた。いざ、裁判が始まろうとしたら、急死する。ただの死だとは、誰も思いませんね」

「私も、そう思いますよ」
「がんばって下さい」
と、伊原はいってから、ひとりで、呟いて、
「警察の人に、がんばってくれといったのは、考えてみると、初めての経験だな」
「あなたも、がんばって下さい」
と、十津川は、いった。
「空港まで、送りますよ。すぐ、東京へ帰るんでしょう？」
と、伊原は、いった。
「あなたは、マニラへ行くんですね？」
「そうです。ミス・ケイに会って、中原さんが死んだことを伝えたいと思うんです。彼女は、恐らく、彼に裏切られたという意識しか持っていないでしょうからね」
と、伊原は、いった。
二人は、タクシーで、空港に向った。
「中原さんが、殺されたところをみると、彼は、裁判で、内部告発してくれる気になっていたと見ていいんでしょうね？」
と、タクシーの中で、伊原が、きいた。
「中原さんは、苦しんでいた。それだけは、間違いありませんね。実際に、内部告発する気になっていたかどうかは、正直にいって、わからない。ただ、会社側は、そんな中原さんを、危険だと、思ったに違いないんです。M化学の研究員が、公害裁判で、会社を断罪したら、会社にとって、大変な痛手に違いありませんからね」
「そのことも、彼女に、伝えますよ」
と、伊原は、いった。
「そうして下さい。ミスター・中原は、裏切るつもりはなかったとね」
と、十津川は、頼んだ。

恋路駅のノートに書かれた中原の言葉は、いわなかった。

あの言葉には、明らかに、恨みの匂いがあった。

中原は、良心的な人間だった。それは間違いない。だからこそ、去年の二月に、セブ島をおとずれ、公害の現実を見て、内部告発を、決意した。

だが、同時に、中原は、弱い人間でもあったのだと思う。

彼は、会社の圧力に負け、その決意を捨ててしまった。

それは、ミス・ケイに対する裏切りでもあったから、彼女のことも、忘れようとしたのだろう。

新しく、井岡あや子という恋人も、出来た。

こぢんまりした幸福を守っていこう、セブ島の公害には、眼をつむろうと、決意したに違いない。

だから、中原は、セブ島のことは、あや子には、一言も、喋らなかったのだ。

何とか、忘れられそうになっていたとき、ミス・ケイが、突然、会いに来た。

彼女は、正義を求めて来たのだが、中原にしてみれば、悪魔が現われたように、見えたのではなかったか。

その苦痛を、恋人のあや子に、話すわけにはいかない。

だから、恋路駅のノートに、自分の心の苦痛を書きつけたのだ。

十津川と伊原は、マニラまで一緒の便で行き、そこから、十津川は、東京行のＪＡＬに、乗り込んだ。

これで、事件は、解決する——という気はな

かった。

相手は、一人や二人の人間ではない。M化学という大きな組織が、相手なのだ。

伊原もいっていたではないか。相手は、M化学ですよ。大丈夫なんですか？　——と。

飛行機の中で、十津川は、手帳を取り出して、セブ島でわかったことを、書きつけていった。

忘れないためも、もちろんあるが、書きつけていくことで、自分に、いいきかせようとしたのである。どんな圧力があっても、絶対に、真相を明らかにしてみせることである。

成田空港には、亀井が、迎えに来ていた。

「ご苦労さまでした」

と、亀井は、十津川を迎えてから、

「M化学の中で、何か起きていますよ」

と、パトカーの中で、いった。

「私が、セブに行ったことが、向うから、報告されたからだろうね」

「西本君たちが、ちょっと、当ってみたんですが、どうも、社内に、通達が出たらしいんです。外部の人間に何も話すな、という箝口令のようです」

「なるほどね」

「セブ島で、何かわかりましたか？」

「いろいろと、わかったよ」

十津川は、亀井に、セブ島の工場で起きている公害問題や、クリシュナン医師のこと、そして、ミス・ケイの話などを、説明した。

「それじゃあ、M化学が、ぴりぴりしているのは、当然ですね」

と、亀井は、眼を輝かせた。

「ああ。いわば、会社ぐるみの犯罪だからね」

と、十津川は、いった。

警視庁に戻ると、十津川は、まず、三上刑事

部長に、報告した。
　案の定、三上部長は、難しい顔になった。
「もし、うまくいかない時は、大変なことになるぞ。わかっているだろうがね」
「それは、わかっています」
「慎重の上にも、慎重にやって欲しいね」
　と、三上は、繰り返した。
　次に、十津川は、本多捜査一課長に会って、同じ報告をした。
　本多は、肯きながら、聞いていたが、
「実は、昨日、三上部長のところへ、有沢さんが来ているんだよ」
　と、いった。
「有沢さんというと、前に、刑事部長をやっていた方ですね？」
「ああ。今、M化学で、労務管理をやっている。三上部長の先輩が、何をしに来たか、想像できるだろう？」
「わかります」
「だから、余計に、三上部長は、慎重になっているんだよ」
「しかし、今度の事件では、うちの小山刑事が、殺されています。遠慮はしませんよ」
「しかし、小山刑事を殺したのが、M化学の人間だという証拠はないんだろう？」
「ありませんが、今度の一連の事件の流れを見ていけば、小山刑事を殺したのも、中原雅男を自殺に見せかけて殺したのも、M化学としか考えられません」
　と、十津川は、いった。
　十津川は、自分の部屋に戻ると、亀井たちを集め、黒板に、今までに死んだ人間の名前を書きながら、今度の事件についての自分の考えを、説明した。

「今度の事件は、M化学が、セブ島に、化学工場を作ったことに始まっている。この工場は、日本の政府援助資金で作られ、フィリッピン政府との合弁だが、工場の機械や、技術指導は、全て、M化学がやっているし、製造されたものは、日本に輸出されているんだ。ここで、公害問題が起きた。工場が作られた土地には、もともと、農地があったんだが、それをタダ同然で取りあげた上、工場廃水で、川の魚が汚染され、明らかに、その影響と思われる障害が、人間に、出てきている。おとなしい現地の人たちも、立ち上って、公害裁判が、始まろうとしていたんだ。M化学は、もちろん、公害は、関係ないといっていたが、中原が、内部告発を始めようとした。彼が、裁判で証言したら、M化学は、敗れてしまうだろう。それで、自殺に見せかけて、殺してしまったんだよ」

「M化学の社員が、殺人までやるとは、考えられませんが」

と、亀井が、いった。

「社員が、やったとは思っていないよ。そういうダーティな仕事を引き受ける人間がいるもんだ。多分、そうした人間を、金で雇って、やらせたんだと思うね。M化学は、それで、すんだと思っていたんじゃないかな。ところが、中原の恋人の井岡あや子が、自殺に疑いを持って調べ始めた。われわれも、疑いを持ち、小山刑事が、彼女を尾行して、能登へ出かけていった」

「M化学にしてみれば、まずいことになったと思ったでしょうね」

と、西本刑事が、いう。

「そうだ。下手をすれば、公害問題に、殺人まで加わって、M化学のイメージダウンは、まぬがれないし、今後の海外進出にも支障をきたす。

だから、必死になったんだよ」
「それで、小山刑事まで、殺したんですね？」
「毒食わば皿までというやつだ。何としても、中原雅男は、女関係の悩みで、自殺したことにしなければならなかったんだよ」
「田代恭子の件は、どう、解釈されますか？」
と、亀井が、きいた。
「これは、自殺と、私は、思っているんだよ」
「自殺ですか？」
「そうだ」
「すると、中原雅男に失恋して、自殺ということになるんですか？」
西本が、首をかしげた。
「それは、違うね」
「しかし、中原から、彼女に宛てた手紙が、何通も、見つかっていますが」
「あれも、恐らく、作られたものだよ」
と、十津川は、いった。
だが、それを、証明しなければならないのだ。
「あとは、泉水館の従業員が、殺されていますね」
と、亀井が、いった。
「それも、全て、中原が、自殺したことにしようとするM化学の圧力だよ。M化学では、何としてでも、中原は、自殺という線で、押し通したいんだ」
「われわれだって、絶対に、後には引けませんよ。われわれの仲間が、一人、殺されているんですから」
と、日下刑事が、眼を光らせて、いった。
「その通りだよ。それに、真実を明らかにするのが、われわれの仕事だからね」
と、十津川は、いった。
「具体的に、どうしますか？」

と、亀井が、きいた。
「私とカメさんは、金沢へ行く。田代恭子の死や、泉水館のことを、調べたいからだ。東京に残った者は、M化学が、ダーティな仕事に、誰を使ったか、調べておいてくれ」
と、十津川が、いった。
「M化学の誰が、その面を、担当していると、思われますか？」
西本刑事が、きいた。
「これは、想像だがね、M化学で、労務問題を担当している有沢という人間だと思っている」
「その人は、ひょっとすると、警視庁のOBじゃありませんか」
と、日下が、眉をひそめて、きいた。
「そうだよ。有沢さんなら、暴力団関係にも顔が利くからね。私情を排して、徹底的に、調べて欲しい」
と、十津川は、強い調子で、いった。

## 3

翌日、十津川と亀井は、特急「白山1号」に乗って、金沢に向った。
飛行機にしなかったのは、向うに着くまでに、亀井と、意見をたたかわせておきたかったからである。
「田代恭子は、自殺だといわれましたが、これは間違いないでしょうか？」
と、列車の中で、亀井が、きいた。
「ああ、そうだ」
「中原のように、殺された可能性は？」
「ないね。田代恭子の恋人は、中原じゃないと思う。しかし、それで殺すというのは、不自然なんだ。たまたま、田代恭子が、自殺した。イニシアルは、K・Tだ。その上、M化学の社員

と、関係があった。そこで、M化学は、この田代恭子を、K・Tに、仕立て上げることにしたんだ。われわれが、中原の自殺法に疑問を持ち、小山刑事が、殺されたこともあって、恋路駅のノートにあったK・Tに、関心を持って、調べていたからね」

「すると、彼女のマンションで見つかった中原の手紙も、作られたものということになりますね？」

「もちろんだよ」

と、十津川は、いい、通りかかった車内販売で、コーヒーを買った。

十津川は、それを、口に運びながら、

「M化学が一枚かんでいれば、なんでも可能だよ。中野の研究所には、中原の遺品が、何点かあったろうから、それを、田代恭子のマンションに、運び込んでおいたんだろうし、中原の筆跡で、手紙も作った」

「しかし、田代恭子自身、友人に、M化学の社員と、結婚したかったといっていますから、中原ではなかったとしても、誰か相手がいたことは、間違いないと思いますが」

と、亀井が、いう。

十津川は、ニッコリして、

「そこが、突破口になると、思っているんだよ。田代恭子が、自殺したのは、誰かに、裏切られたからだろう。そいつを見つけ出せばいいんだ」

「中原が、金沢支社に行ったとき、彼を、田代恭子のいるクラブに連れて行った社員がいるわけですね」

「だから、支社の人間であることは、間違いないと、思っている。それに、田代恭子が死ぬ直前に、結婚している人間じゃないか。若い社員

なら、それだし、中年なら、冷たくなったかだね」
「まず、結婚した社員の方から、当ってみましょう」
と、亀井は、いった。
一五時三二分に、金沢に着いた。
十津川は、石川県警本部に、あいさつしてから、亀井と、聞き込みに走り廻った。
支社の職員の中で、最近、結婚した者のリストである。
支社の人間は、そう多くはないから、簡単に、わかった。
二人の社員が、結婚式をあげていた。
名前は、大沢明と内田健一である。二人とも、支社長夫婦が仲人をつとめていた。
どうせ、支社内にも、箝口令が敷かれているだろうから、同僚から、話を聞くことは出来ないだろう。
田代恭子の働いていたところでも、恐らく、同じだろう。何しろ、M化学は、ダミー会社を使って、泉水館を買収することさえしているのだ。関係者を、買収するぐらいのことは、しているに違いないのだ。
「直接、この二人に会って、反応を見てみよう」
と、十津川は、亀井に、いった。
「すぐ、M化学に、わかってしまいますよ」
と、亀井が、いう。
「それでいいんだ。圧力が、かかるからね。M化学が、あわてるのを拝見するのも、悪くないよ」
と、十津川は、微笑した。
向うも、有沢を使って、こちらに、圧力をかけて来ているのだ。それに対抗して、M化学の

もっとも弱い点に、圧力をかけてやるのも悪くないだろう。

十津川と亀井は、まず、大沢明に、会いに行った。

夜に入っていて、新婚の夫婦は、支社近くのマンションにいた。

大沢は、二十七、八歳で、ちょっと甘い顔立ちの男だった。十津川が、警察手帳を見せたとたんに、顔色が変った。

(上司に、いろいろと、注意されているな)

と、思いながら、

「田代恭子さんを知っていますね？」

と、十津川が、きいた。

「そんな女性は、知りませんよ」

大沢は青ざめた顔で、切口上で、いう。

「あんなに、新聞で騒がれたのに、知らないんですか？」

十津川が、そういって、睨むと、大沢は、あわてて、眼をそらせた。

「じゃあ、忘れたんです。いろいろと、忙しかったですからね」

「いろいろと？」

「ええ。結婚で、忙しかったんですよ」

「田代恭子を捨てて、結婚したわけですか？そのために、彼女は、自殺したんですよ」

「彼女は、本社の中原さんと、愛し合っていたんですよ」

「覚えているじゃありませんか」

と、十津川が、皮肉な眼つきをした。

「思い出したんですよ。しかし、僕は、関係ない！」

と、大沢は、急に、大声を出した。

もう一人の内田は、同じように、十津川たちを見て、青い顔になったが、十津川の質問に対

して、全く、返事をしなかった。
「上司から、警察には、何も返事をするなといわれているんですか？」
と、十津川が、皮肉をこめてきいても、内田は、黙ったままだった。
十津川たちは、いったん、外へ出て、この二人を見張ることにした。
石川県警が、二台の覆面パトカーを用意してくれた。その一台に、十津川と亀井が、乗り込んだ。
田代恭子の恋人だった方が、必ず、上司に、相談しに行く筈だと、十津川は、考えたのである。
午後十一時過ぎになって、内田の方が、自分の車で、動き出した。
十津川たちは、その車を尾行した。
金沢市郊外の大きな邸の前で、内田の車はとまり、内田は、あわただしく、通用門から、中に入って行った。
その家の表札に、「木内」とあった。
「支社長の家ですよ」
と、県警の刑事が、教えてくれた。
「これから、どうしますか？」
亀井が、きいた。
十津川は、ひとりで、カメラを持って、車を降りた。
門の前で、内田が出てくるのを待った。
一時間近く、待ったろうか。通用門が開き、内田が、出て来た。
十津川は、その顔に向って、いきなり、フラッシュをたいた。
もう一枚。
内田は、手で、顔をかくし、
「何をするんだ！」

と、怒鳴った。

「口が利けるんですね」

と、十津川は、皮肉をいった。

「訴えるぞ！　警察だからって、こんな横暴が、許されるのか！」

「ぜひ、話をして下さい。われわれは、あなたが、田代恭子と関係があったと睨んでいるんですよ。彼女が自殺したのは、あなたのせいだし、泉水館に泊ったのも、実は、中原じゃなく、あなたとだったと信じている。この写真を関係者に見せて、それを、証明して見せますよ」

「その写真を返せ！」

「駄目ですね。返して貰いたければ、正直に話すか、私を、告発するんですね。その代り、M化学を、危機にさらす覚悟が、必要ですよ」

と、十津川は、脅した。

門灯の下で、内田が、血の気を失っているのがわかった。

狼狽し、どうしていいかわからなくなっている感じだった。

（やはり、この男が、田代恭子の恋人だったのだ）

と、十津川は、確信した。

内田は、通用門の方に眼をやったが、のろのろと、自分の車の方に、歩いて行った。

十津川は、パトカーに、駆け戻ると、外から、

「あの男を、監視して下さい。自殺でもされたら困る」

と、県警の刑事にいった。

「十津川さんは？」

「これから、支社長に会って来ますよ。対決して、相手の反応を見てみたいんです」

「私も同行します」

と、亀井も、車から降りた。

内田の車が、走り出したあと、十津川と亀井は、門に近づき、インターホンを鳴らした。

# 第十二章　一つの解決

## 1

十津川たちは、木内支社長に会ったが、木内は、

「東京で、本社の重役が、お会いするといっています。私は、何もお答えできません」

と、繰り返すだけだった。

仕方がない、東京に戻ることにした。

翌日、早く、十津川と亀井は、飛行機で、東京に引き返し、空港から、M化学の本社に向った。

M化学の方でも、覚悟していたと見えて、すぐ、五階の応接室に通され、畑中という副社長が、顔を出した。

「刑事さんは、何か大きな誤解をなさっておられるようだが」

と、畑中は、少しばかりぎごちない笑顔で、いった。

「われわれは、誤解とは、思っていませんよ。それどころか、やっと、真相をつかんだと思っているんです。M化学が、セブ島に作った化学工場が、公害を撒き散らしている。その裁判が始まった。M化学は、何とか、傷つかずに、乗り切ろうとしていた。そんな時、内部告発をしようという人間が出て来た。M化学の研究所で働いていた中原雅男ですよ。一度は、何とか説得して、黙らせることに成功したが、セブ島から、かつて、中原と愛し合っていたフィリッピン女性が来日して、また、彼の心が、動揺し始

めた。もし、中原が、公害裁判で、M化学に不利な証言をしたら、M化学は、裁判に負け、莫大な賠償金を払わなければ仕方なくなる。それだけでなく、他の地域に進出している工場への影響だって、計り知れない。そこで、中原雅男を、女性との三角関係に悩んで自殺ということで、殺してしまった」

「それは、勝手な推測ですよ。実際に、中原君には、恋人の他に、水商売の女がいて、悩んでいたと聞いていますよ」

と、畑中は、いった。

「田代恭子ですか？」

「そんな名前と聞いています」

「ちょっと、電話をお借りしていいですか？」

と、十津川は、突然いい、応接室の隅にある電話のところへ、歩いて行った。

石川県警に電話をかけ、その後の捜査の模様を聞いた。

「内田健一の写真を、関係者に見せて廻りました。結果は、予想した通りです。田代恭子と親密だったのは、中原ではなくて、内田ですね」

と、県警の刑事が、答えた。

「それで、内田は？」

「田代恭子を殺害した容疑で逮捕しています。彼女の自殺は、はっきりしていますが、下手をすると、内田も、中原のように、自殺に見せかけて、殺されかねませんから」

「なるほど」

「内田は、逮捕されたことで、ショックを受けたらしく、急に、われわれに、協力的になりましたよ。支社長の命令で、いろいろ動き廻ったことも、喋っています。多分、M化学は、内田を贄にすると思いますね。自分たちを守るためにね」

と、県警の刑事は、いった。
十津川は、電話を切ると、わざと、ゆっくりと、席に戻った。
畑中は、不安気に、十津川を見ている。
「内田健一が、田代恭子の恋人だったことを自供したそうですよ。M化学の金沢支社の人間です。彼は、今、警察で、全部、喋っていますよ。何もかもね」
と、十津川は、畑中に、いった。
「うちのような大きな会社だと、一人や二人は、妙な社員がいるものです」
畑中は、努めて、平静を装って、いい返した。
「もう一度、電話を貸して頂けませんか」
と、今度は、亀井がいい、畑中の承諾を待たずに、電話のところへ、歩いて行った。
亀井は、五、六分、電話して戻ってくると、十津川に、
「有沢が接触している暴力団が、わかりました。K組です。このK組の中に、坂口五郎という男がいます。現在、行方不明ですが、恋路で小山刑事になりすました男に、顔立ちが、酷似しています」
と、いった。わざと、畑中に聞こえるようにである。
「ダーティな仕事は、全部、その男にやらせたのかな？」
「そう思います」
「その資金は、M化学から出ているということですね？」
と、十津川が、急に、畑中に眼をやった。
畑中は、狼狽した顔で、
「何のことですか？」
「今のが、聞こえなかったんですか？」
「お二人の話なので、聞いていませんでした

が」

「M化学と暴力団とのつながりですよ。これが証明されると、ますます、まずいことになって来ますね」

と、十津川は、いった。

## 2

十津川が、予想した通り、さまざまな圧力が、かかってきた。

有沢は、何度も、三上部長に会いに来た。

警察出身で、現在、代議士になっている何人かも、電話して来たし、そのうちの一人に、十津川も会った。いや、会わされたといった方が、いいだろう。

五十嵐という、政務次官だった。

「わたしは、今度の事件の詳細は知らん」

と、五十嵐は、まず、いってから、

「わたしは、常に、日本の国益は何かということを、念頭においている」

「つまり、今度の事件の真相を明らかにすることは、国益に反するということですか？」

と、十津川は、きいた。

「君のいう真相が、果して、本当に、真相なのかどうかも、わからんのだろう？　下手をすると、そのために、日本とフィリッピンの関係が、まずいことになってしまう恐れがある。それだけじゃない。もし、M化学が、フィリッピンから撤退することになれば、他の会社も、よかれと思ってやったことが、批判されるのなら、もう援助は止めようということを、いい出すんじゃないかね？　そうなると、日本の援助を必要としている国々は、困ることになる。そう思わんかね？」

「全てを明らかにした上での援助でなければ、

本当の援助には、ならないと思いますが」
「では、あくまで、捜査を続けるというのかね？」
「その積りです」
「困った男だ。政治というものが、全く、わかっていないようだね」
と、いって、五十嵐は溜息をついた。
十津川は、微笑して、
「自分でも、そう思います。だから、政治家には、なりません」
と、いった。
五十嵐は、もう、それ以上、口を挟むことがなかった。が、十津川は、油断をしなかった。
十津川が、本当に恐れているのは、こうした上からの圧力の陰で進行していることだった。
M化学は、政治家に頼んで、警察に圧力をかけているが、これは、明らかに、時間かせぎだ。
そのために、十津川たちが、捜査を止めるとは、信じていないだろう。従って、本当の目的は、時間かせぎで、
（証拠の湮滅を、その間に、やる気だ）
と、十津川は、思った。
彼の危惧が、事実になって現われた。
行方不明だったK組の幹部、坂口五郎の死体が、千葉県の勝浦で、発見されたのである。
溺死体だった。
十津川は、亀井を連れて、勝浦に急行した。
その時、井岡あや子にも、同行して貰った。
勝浦署で、死体と対面した。
十津川は、あや子に、死体を見させた。彼女は、黙って見つめていたが、十津川に向って、肯いた。
「恋路で、私に、小山刑事だといった人ですわ」
と、彼女は、はっきりした口調で、いった。

坂口が、借りていたという海岸近くのマンションも見た。彼は、もちろん、偽名で、部屋を借りていたのだが、やたらと、電話をかけていて、管理人には、間もなく、東南アジアに行くといっていたらしい。

十津川たちの捜査が、もっと、ゆっくりしたものだったら、彼は、フィリッピンかタイにでも、逃亡していたろう。捜査が急展開したので、口封じに殺されてしまったのだ。

しかし、坂口が、小山刑事殺しの犯人だという証拠は、何も見つからなかったし、K組では、破門している、組とは無関係の男と主張した。

その翌日になると、有沢が、M化学を辞めたという情報が入って来た。

「M化学から、かなり多額の退職金が支払われたようで、有沢は、家族を連れて、しばらく、ハワイあたりで、のんびりしてくると、いっているらしいです」

と、西本が、報告した。

こうした一連の出来事が、何を意味しているか、明らかだった。

M化学は、必死になって、不利な部分を切り捨てているのだ。一番危険な坂口を消し、K組との接触のパイプになった有沢を、辞めさせた。もし、今後、有沢の行動が問題になった時は、M化学は、多分、有沢個人が勝手にやったことだと、主張するだろう。

その有沢は、二日後、タイに向って出発することが、わかった。家族を連れての旅行である。

だが、今のところ、その有沢を、逮捕することができない。彼が、K組の坂口たちを使って、小山刑事を殺させたり、中原を、自殺に見せかけて殺したりしたことが、証明できないからである。

有沢が、逮捕できなければ、彼を使っていたM化学の犯意も、証明できない。

十津川は、覚悟を決めていた。ここまで来たら、負けることは、許されないからである。

もちろん、どの事件でも、敗北は許されないのだが、今度の事件では、なおさら、それを強く感じていた。

事件が、日本の国内問題を越えてしまっていたからである。

五十嵐という政務次官は、日本のためを考えてくれと、いった。十津川は、その言葉を、そのまま、五十嵐に返したかった。

セブ島での公害裁判は、すでに始まっている。M化学は、企業の論理で、公害はなかったと主張するだろう。だが、日本の警察まで、それに同調してしまったら、日本の国家までが、公害を蔽いかくそうとしていると、非難されるに決っている。

それは、あくまでも、阻止しなければならない。そのためには、今度の事件は、絶対に解決して、その真相を明らかにしなければならないと、十津川は、考えていた。

「危険を承知で、やってみるかね？」

と、十津川は、亀井に、声をかけた。口元は、笑っていたが、眼は、笑っていない。それだけ、覚悟も決めていたのである。

亀井も、それを感じて、

「警部と、心中しますよ」

と、いった。

十津川の頭の中で、事件の図式は、すでに、はっきりしているのだが、問題は、証拠だった。それを、見つけなければならない。

M化学が、有沢を使って、K組に金を渡し、小山刑事と、中原、それに原田幸枝を殺したと

いう証拠である。
まともにぶつかったのでは、否定されるに決っていた。
特に、M化学は、一連の事件と関係のないことを、必死になって、主張するだろう。
「大野所長に会いに行こう」
と、十津川は、いった。
「中野のM化学の研究所ですね」
「ああ。中原の上司だし、多分、M化学の弱い部分だと思うからね」
二人は、中野に出かけ、研究所の大野所長に、会った。
大野は、疲れた表情をしていた。事件の推移が、この男には、応えているのだろう。
「現在、金沢で、支社の内田健一という社員が、どんどん、自供していますよ。田代恭子の恋人は、自分だったと。すると、中原雅男が、田代恭子宛に出したラブレターは、どうなるのか？彼女のマンションから見つかった中原のライターなどは、誰が、どこから持ち込んだのか？答は一つしかないんですよ。ラブレターは、中原の筆跡をよく知っている人間、つまり、この研究所の人間が、上からの指示で創りあげて、ライターなどは、ここの中原の机やロッカーにあったものを、持ち出して、田代恭子のマンションに、置いておいたとしか考えられません。更にいえば、ラブレターに、微妙な年月の差を出すのに、M化学は、得意の技術を使用したと、私は、考えているんですよ。つまり、社をあげて、殺人事件の真相隠しをやったに違いないのです」
十津川は、この男には珍しく、雄弁だった。
大野は、黙りこくっている。
「反論があれば、いって下さい」

と、十津川が、いっても、大野は、青ざめた顔で、黙ったままだった。
「全て、社長の指示で行われたんですか？」
「社長は、全く知らないことです」
と、大野は、かすれた声で、いった。
「では、副社長の指示ですか？」
十津川は、どんどん、追い詰めて、いった。
「そんなことは、ありません」
「では、重役会で、決めたことですか？」
「それもありません」
「じゃあ、誰が、指示したんですか？　ひとりでに、ラブレターが出来あがったり、中原雅男の持ち物が、金沢へ飛んで行く筈がないでしょう？　このままでは、われわれは、M化学の社長を、逮捕せざるを得ないと思っているのですよ。殺人、それも、三件の殺人の命令と、全く関係のない男女の関係を、でっちあげた容疑です」
「――」
「あなたは、今度の事件について、いろいろと、知っている筈です。もちろん、あなたは、会社の指示に従って、止むを得ず、動いたのだと、思っていますよ。それを、話してくれませんか？　このままでは、われわれは、あなたも、実行犯の一人として、逮捕せざるを得なくなってしまうのですよ。われわれは、そうはしたくない。サラリーマンとして、あなたは、止むを得ず、命令に従っただけだということを、私は、知っています。どんな指示か、誰から出たのか、それを、話してくれませんか？」
と、十津川は、いった。
大野は、眼を伏せてしまった。
「このままでは、あなたを逮捕し、M化学の上層部も、根こそぎ逮捕することになりますよ。

事実を話してくれれば、本当の関係者だけを、逮捕できるんです。それがM化学のためにもなると、思うんですがね」

と、十津川は、いった。

「考えさせてくれませんか」

と、大野は、小さな声で、いった。

「考えて、本当のことを、話してくれますか？」

「明日、もう一度、来て下さい」

と、大野は、相変らず、伏眼がちに、いった。

## 3

十津川は、研究所を出てから、亀井に、大野を監視するように、いった。

「あの男は、逃げるか、自殺するかのどちらかを選ぶ可能性があるからね」

と、十津川は、いった。

「正直に、全てを話してくれるとは、思われないんですか？」

「そうしてくれれば、一番いいと思っているんだが、彼も、大企業の忠実な社員の一人だろうからね」

と、十津川は、重い口調で、いった。

亀井と西本刑事を、監視につけることにした。

その夜、十津川の不安が適中した。

阿佐ヶ谷の自宅に帰った大野だったが、午前二時過ぎに、突然、救急車が、呼ばれたのである。

亀井と西本は、救急隊員と一緒に、大野邸に、飛び込んだ。

大野は、二階の書斎で、首を吊っていたのだ。

妻の弓子が発見して、あわてて、一一九番した。

大野は、すぐ、救急病院に運ばれた。

十津川も、知らせを受けて、その病院に、飛んで行った。

亀井が、待ち受けていて、
「申しわけありません」
「カメさんのせいじゃないよ。自殺しようという人間を、防ぐ方法はないんだ」
と、十津川は、慰めてから、
「それで、助かるのかね？」
「まだわかりません」
「家族は？」
「奥さんと娘さんが来ています」
と、西本が、いった。
十津川は、妻の弓子に会った。彼女は、血走った眼で、十津川を見つめ、
「主人は、なぜ、自殺する気になったんですか？　何か、警察の厄介になるようなことをしたんですか？」
「ご主人は、何か、手紙を、書いていませんか？」
「ありました」
と、いったのは、大学へ行っているという娘だった。
「それを見せて貰えませんか。絶対に、公けにはしません」
と、十津川は、頼んだ。
娘は、二つに折りたたんだ封筒を取り出した。
「どうしたらいいの？」
と、彼女は、母親を見た。
「見せて下さい。お願いします」
と、十津川は、もう一度、頼んだ。
「本当に、内密にして下さいますか？」
弓子が、きいた。十津川が、大きく肯いて見せると、彼女は、娘から、その封書を取りあげ、十津川に、渡してくれた。
十津川は、彼女たちの眼の前で、それを、読むことにした。

宛名は、M化学の社長だった。

便箋三枚に、几帳面な小さな字で書かれている。

今回の一連の事件について、簡単に触れていたが、あとは、初めから終りまで、自分の力が足らず、会社に迷惑をかけて、申しわけなかったという言葉で、あふれている。

十津川は、それを、亀井にも見せたあと、弓子に、返した。

丁度、医者が、出て来て、母と娘に、大野の容態を説明し始めた。どうやら、一命は取り止めるらしい。

翌日、十津川は、亀井と、M化学本社に畑中副社長を訪ねた。社長に会いたかったのだが、嘘か本当か、アメリカへ行っていて留守ということだったからである。

畑中は、朱く、充血した眼をしていた。

(夜半に、大野が自殺を図ったことを、知らされたな)

と、十津川は、思った。

「どうする気ですか？」

と、十津川は、いきなり、畑中に、かませた。

畑中は、狼狽した表情で、

「何をですか？」

「われわれは、追及を止めませんよ。このままでいけば、どんどん、犠牲者が出てくる。それでもいいんですか？　それに、マスコミだって、もう気付いています。あなた方が、反省してくれなければ、全てを、マスコミに、話しますよ」

「脅かすんですか？」

「別に、脅してはいませんよ。事実を話しているだけです」

と、十津川は、いった。

畑中は、言葉を失ったみたいに、黙ってしまった。それに追い打ちをかけるように、
「どうするんです？　このまま、何とかなると思っていたら、大きな間違いですよ。事態は、どんどん、悪化していくんです」
と、十津川は、いった。
「明日、改めて、返事をさせて下さい」
沈黙のあとで、畑中が、いった。
畑中は、翌日の午後、有沢を連れて、やって来た。
十津川は、最初、それを知らなかったのだが、三上刑事部長に呼ばれて、部屋に行くと、二人がいたのである。
本多捜査一課長も、同席していた。
「今、畑中さんから、今度の一連の事件についての、M化学の考えを聞かされたところだ」
と、三上が、十津川に、いった。
十津川は、黙って、畑中と有沢を見た。その顔色から、どんな回答を持って来たのか、知りたいと思ったからである。
二人とも、こわばった表情をしていて、かなりの決意を持って、やって来たことが、想像された。
有沢が、まず口を開いた。
「今度の一連の事件について、私から、説明したい。私は、M化学に入ったときから、会社のためだけを考えて過して来た。私情をはさんだことは、一度もないんだ。去年から、セブ島での公害問題が起きて来た。しかし、私とは関係のないことだと思っていた。ところが、研究所の中原君のことで、彼を説得するように、会社から頼まれて、この問題に、関係して来たんだよ。中原君は、なかなか、うんといってくれなかった」

「だから、殺したんですか？」
十津川は、きいた。
「いや。そんなことはしない。彼が、説得に応じてくれないので、弱っていたんだ。そんな時、たまたま、K組の幹部の坂口に、会ったんだよ。少し酒を飲んでいたので、ポロッと中原君のことを喋ってしまった。誓っていうが、中原君を、どうしてくれと、頼んだことはない。
ところが、坂口は、翌日、電話して来て、例の件は、もう、ご心配いりませんといったんだよ。自殺に見せかけて、殺したというんだ。私は、びっくりして、とんでもないことをしてくれたと、叱り飛ばしたんだが、後の祭りだった」
「それを、信じろというんですか？」
「事実だよ。あとは、必死になって、中原君が自殺したと思わせるように、取りつくろった。田代恭子という女性が自殺したので、彼女と中原君を結びつける工作をしたのは、私だ。金沢の支社にも、研究所の大野さんにも、手伝わせた」
「小山刑事と原田幸枝を殺したのは？」
「坂口だよ。あれは、彼自身を守るために、やったんだ」
「坂口を溺死させたのは、誰なんですか？」
と、十津川は、きいた。
「あれは、自殺だよ。追い詰められて、自殺したんだ」
と、有沢は、いった。
「われわれだけで、検討したいので、部屋を出ていてくれませんか」
と、三上が、畑中と有沢に、いった。

## 4

二人が出て行くと、三上は、十津川に向って、
「どうかね？」
「何がですか？」
と、十津川は、呆れて、きき返した。
「有沢さんも、自分や、M化学が、今度の事件に関係があったことは、認めているんだ。これ以上、追及しても、意味がないんじゃないかね？」
「私には、何も解決していないように思えますが」
「しかし、十津川君。これ以上、捜査を進めれば、大野のような犠牲者を出すだけだよ」
と、三上は、いった。
「坂口が、自殺とは、考えられません」
「しかし、千葉県警の話でも、他殺の証拠は見つからないというんだ。それに、畑中副社長は責任をとって、M化学を退社するといっている」
と、三上は、いった。
「警察としては、それで、終りにするということですか？」
「石川県警も、それで、終りにしたいと、いっているんだ」
「私には、一つだけ、M化学に要求したいことがあります」
「何だね？」
「それは、直接、畑中副社長に、いいたいんです」
と、十津川は、いった。
畑中と有沢に、もう一度、部屋に入って貰った。
「十津川君が、一つだけ、いいたいことがある

そうです」
と、三上が、二人に、いった。
十津川が、口を開く前に、有沢は、
「泉水館の件なら、あれも、私が、指示してやらせたことだ。それで、いいだろう」
と、先廻りして、いった。
十津川は、首を横に振って、
「違います」
「じゃあ、何のことだね？」
「畑中さんにいいたいのですが、セブ島の公害問題は、公害が起きていることを、認めて下さい」
と、十津川は、いった。
「しかし、あれは、裁判が進行中で、シロ、クロが、わかっていないんですよ」
と、畑中が、いった。
「しかし、今度の事件の発端は、セブ島の公害問題ですよ。それに、M化学は責任がないと、本当に、確信があるのなら、なぜ、たった一人の研究員の言葉に、狼狽したんですか？　私自身も、セブ島へ行って、この眼で、公害の現実を見て来ましたよ」
「どうしろと、いうんですか？」
「裁判はやめて、告発を、そのまま認めて、賠償金を払って下さい。その方が、日本のためです」
と、十津川は、いった。
「出来ないといったら？」
「私も、追及を止めませんよ」
「十津川君」
と、三上が、あわてて、いった。
畑中は、社に帰って検討したいといい、有沢と一緒に、帰って行った。
その後、M化学の社内で、何があったかわか

らないが、翌日、次のことが、発表された。
セブ島の公害事件について、原告側の訴えを全て認め、賠償金の全額を支払うこと、それに合せて、畑中が、辞職することの二つである。
十津川も、それで、妥協することにした。
石川県警も、捜査終了を、知らせてきた。
「これで、よかったんですかね？」
亀井が、十津川に、きいた。
「よくはないよ」
と、十津川は、いった。
「しかし――」
「上の方が、これ以上やる気がなければ、われわれには、どうしようもないんだ。それに、中原雅男が、悩んでいたセブ島の公害問題も、何とか、解決できたからね」
と、十津川は、いった。
それから二日後、十津川と亀井は、セブ島へ行くという井岡あや子を、成田空港に、見送りに行った。
「向うで、ミス・ケイに、会って来たいと、思うんです」
と、あや子は、いった。
十津川は、それに、賛成も、反対もしなかった。
「とにかく、あの島を見ていらっしゃい」
とだけ、十津川は、いった。

この作品は「婦人公論」一九八九年二月号から一九九〇年一月号に、「『のと恋路号』に乗っていた女」のタイトルで連載されました。

C★NOVELS
©1990年

「のと恋路号」殺意の旅

1990年 3 月15日　初版印刷
1990年 3 月25日　初版発行
著　者　西村京太郎
発行者　嶋中鵬二

本文印刷　三晃印刷
カバー　トーブロ
製　本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋2-8-7
振替 東京2-34

Printed in Japan
ISBN4-12-500141-3

C★NOVELS

西村京太郎　都会派ミステリー
環状線に消えた女

山村美紗　本格長篇ミステリー
紫式部殺人事件

山村美紗　本格抒情ミステリー
京都紅葉寺殺人事件

山村美紗　本格抒情ミステリー
京都貴船川殺人事件

赤川次郎　ユーモア・ミステリー
静かなる良人（おっと）

赤川次郎　ユーモア・ミステリー
本日は悲劇なり

斎藤　栄　長篇トラベル・ミステリー
日本国有鉄道殺人旅行

斎藤　栄　長篇占術ミステリー
タロット日美子の友愛占術

斎藤　栄　長篇占術ミステリー
日美子の救急占術

斎藤　栄　長篇占術ミステリー
横浜ＱＥ２号殺人事件

紀和　鏡　旅情ミステリー
秩父夜祭り殺人囃子（ばやし）

辻　真先　書下ろしユーモア・トラベル推理
死体も歌え奥信濃